SUNRISE MINISTRY

アンカー

Anchor

セブンスデー・アドベンチストの存在理由

ー最後の贖いー p22

世界支配を狙う二大勢力！

聖なる御言葉の歴史と移行 p33

ケロッグ博士の歴史「背教のアルファ」p44

46号

2011年 1月

RESEARCH

世界支配を狙う二大勢力！

ダニエル書

11章40-45節の研究

ダニエル書の研究において11章は、未だにすっきりした解説がなされていない。ダニエル11:1-3までは、ほとんどの解釈者が一致しているが、14節以降の様々な解釈のために、多くの者がその研究を躊躇している状態ではないだろうか。

- 村上氏は「最も解釈の分かれる難解な章である。…さて問題は14節以降、40-45は最も難解な箇所である」と言っている。
- マックスウエル氏の本でさえ、40節以降は注解していない。
- E.G.ホワイトも11:40-45は一切言及していない。
- しかし、「終わりの時」には「賢い者は悟る」という約束がある(12:4,10)。今日わが教会に悟り始めている人々がいることは幸いである。ということは、時が近づいていることを表しているのであろう。終わりに近づくにつれ、だんだんはっきりしてきて最後の大いなる叫びに備えられることであろう。

大きく分けて二つの解釈がある。今回は、両方の研究を提示してみたい。意見の相違をおそれてはならない。読者の今後の研究の刺激となることを願うものである。

アンカーでは、聖書の預言から世界支配を狙うローマ法王教について幾度も書いてきた。

数年前、アメリカの友人に、我々の教会は、聖書の反キリストはローマ・カトリック教会と言ってきたが、今はそうではなく、イスラム・パワーが反キリストなのだと聞かされた。

また、このような面白い本を最近見た。「**イスラム・パワー～21世紀を支配する世界最大勢力の謎～宮田律**」

しかし、読者に誤解されないために、聖書的結論から明言しておきたい。たとい、どんなにイスラム勢力が驚くべき速さで、ローマ法王教を上回る勢力に発展しようと、それは、反キリストではないし、それが世界を支配するのでもない。結局は、ローマ法王教が世界を支配し、新世界秩序を構築することになっている。

近年まで、世界のローマ・カトリックとイスラムの人口は、どちらも約13億と思っていた。しかし、次のような記事を見て驚いた。その一部を掲載しよう：

「世界のイスラム教徒人口がカトリック信者を抜く」

バチカン統計　2008年04月01日 08:50　発信地:バチカン市国:

【4月1日　AFP】国連などのデータに基づいたバチカンの最新統計年鑑によると、2006年度の世界のイスラム教徒人口がカトリック教徒人口を抜いた。バチカンの機関紙「オッセルバトーレ・ロマーノ(Osservatore Romano)」が30日に報じた。発表された統計によると、2006年の世界人口65億人のうち、イスラム教徒は19%以上、カトリック教徒は17.4%を占めた。ただしカトリック、ギリシャ正教、英国教会、プロテスタントなども含めたキリスト教全体では「世界人口の3人に1人」の割合となり、イスラム教徒の人口を上回る。」

「4人に1人がイスラム教徒　世界で15億7000万人　」

Christianity Today 2010年10月11日／米機関調査　2009年10月13日

「約68億人と言われる世界人口のうち４人に１人に当たる約15億7000万人がイスラム教徒であることが、米調査機関ピュー・フォーラムの調べで明らかになった。

ピュー・フォーラムは世界232カ国・地域の国勢調査結果などを基にイスラム人口の分布を調査。国別に見ると、最もイスラム人口が多いのは**インドネシア**の２億286万7000人、次いで**パキスタン**の１億7408万2000人、**インド**の１億6094万5000人となっている。

地域別に見ると、**アジア太平洋**がイスラム世界人口の61.9%を占

急増するイスラム人口とローマ・カトリック

金城 重博

める９億7253万7000人で最多。次いで**中東・アフリカ北部**が３億1532万2000人（20.1％）、**サハラ以南のアフリカ**が２億4063万2000人（15.3％）という結果となった。

国家の人口に対するイスラム教徒の割合が最も多い地域は**中東・アフリカ北部**で、全２０カ国・地域のうち半数以上で人口の９５％以上をイスラム教徒が占める。

各国で少数派であっても、非常に多くイスラム人口が存在する国もある。インドのイスラム教徒は１億6094万5000人と世界で３番目にイスラム人口が多く、同国人口の13.4％、世界のイスラム人口の10分の１に当たる。中国のイスラム教徒は2166万7000人で同国人口の1.6％を占め、シリアの2019万人より多い。ロシアのイスラム人口は、ヨルダンとリビアのイスラム人口を合わせた数より多い。」

「イスラミックセンター・ジャパン（東京）によると、公式な統計ではないが、**日本のムスリム人口はおよそ二十万人**、うち**５万人がいわゆる『日本人』**だという。」

十字軍以来、イスラム・パワーがこれほどキリスト教世界に脅威となっておそってきた時代はないと言われている。近代イスラムの再台頭は世界で最も早く成長している宗教であると誰もが認める現象であると、インターネットのウィキ（Wiki）でも紹介されている。 Wiki.answers/Q/what_is_the_fastest_growing_religion。

カトリックもイスラムも、ダニエル 11 章の終わりの時になって「北の王」と「南の王」の争闘が描写されている展開を今日世界に見せている。一方は、平和的政策で一方は強暴なやり方で宗教的世界支配を狙っている。

・「彼（ローマ法王教）は平和によって多くの者をほろぼす」ダニエル8:25（欽定訳）

・「南の王（イスラム）は彼（北の王＝ローマ法王教）に戦いを挑む」ダニエル11:40

「1400年の間、イスラムとカトリックは戦争の中で共存してきた。ジハード（聖戦）と十字軍の戦いをくりかえしながら。興味深いことに両方とも大体同じ時期に世界の舞台に登場してきた。

その最初の1000年間に、イスラムの感化と領域と権力を徐々に拡大していった。しかし、17世紀になってその流れが変わった。カトリックが勢力を増してくるのである。ヨーロッパばかりでなく、アジア、アフリカでも。イスラムは背後に隠れていった。

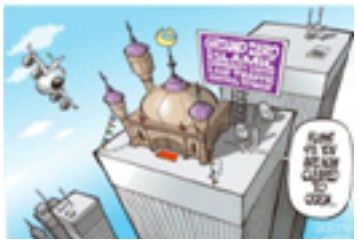
20世紀の前半に西欧の植民地主義が衰微するようになると、イスラム社会の独立が目立つようになる。イスラム人口の数と権力が増してくる。やがてソ連邦の崩壊へとつながっていく。ハンティントンは、この歴史的現象は非常に意味深いとしてイスラムの復活と表現している。この復活は全イスラム人の行動と理想に大きな力をつけ、彼らの再献身の原動力となる。」 www.http://www.olivetreeviews.org/wordpress/category/islam-arabs/

「1972年～1979年の間に起こった**オイルの高騰**がイスラム諸国にドルが流れ込む現象を生んだ。またイランのシャーが、イスラム原理主義者により1979年に退位させられ、その後**アヨトラ・ホメイニーが最高指導者**となる。

またしても1999-2007年にオイル高騰現象を起こす。するとイスラム主義布教と反キリスト教の活

動のための資金が900万億ドルを超した。それが各地に**モスク建築**の資金となり、その戦いの支援金となる。こうして『終わりの時に』聖書の預言が成就する見通しとなった(ダニエル11:40-42)。」(フランクリン・ファウラー資料［南の王］より)

2001年9月11日は全世界を戦慄させたテロ爆破事件であった。ニューヨークのゼログランドにイスラムの**１３階のモスクを建てる計画**が公に知られた。すると、米国民から猛反発が起こっている。その主導者はイマム（イスラム教の指導者）フェイサル・アブドゥル・ラウフ師。米ニューヨーク市の０１年同時多発テロ跡地近くに、イスラム教のモスク（礼拝施設）を建設する計画が反発を招いていることについて、オバマ大統領は１３日、「宗教の自由に対する米国の誓約に揺るぎがあってはならない」と述べ、建設を支持する姿勢を示した。



ラウフにお辞儀をするオバマ大統領

アメリカにおける反米運動―反イスラム運動

写真は、最近益々エスカレートするイスラム過激派の反米運動を表している。

この現象は、アメリカばかりでなく、ヨーロッパ諸国、その他の国々でも起こっているのである。

さて、このような今日の状況は、預言的にどのように見たらいいのであろうか？

近い将来、「**イスラム」対「ローマ法王教＋西側同盟国」の戦い**はあるのだろうか？聖書のどこにそのようなことが書かれているだろうか？

主の僕、E.G. ホワイトは次のように言っている：

1.「世界は戦争の精神でわき立っている。ダニエル11章の預言は、ほとんど完全な成就をみている。まもなく、この預言に告げられている苦難の光景が起こるであろう。**この預言の成就した多くの歴史は、また繰り返されるであろう。30節にある勢力**が述べられている。『彼は脅かされて帰り、聖なる契約に対して憤り、事を行うでしょう。彼は帰っていって、聖なる契約を捨てる者を顧み用いるでしょう。』[31-36を引用]。これらの言葉に引用されている**似たような光景**が起

こるであろう。サタンは神を恐れない者たちの心を支配しようと急いでいる証拠を見ている。すべてのものは、この書の預言を読み、理解しようではないか。なぜなら我々はまさにダニエル12:1-4に語られている時に入ろうとしているからである。」 13MR394 (1909年)

2.「われわれが生存している時代は厳粛にして重大である。神のみたまは徐々にではあるが、確実に地からとり去られつつある。神の恩恵をあざける者たちの上に災害や刑罰がくだっている。海陸の災害、社会の不安状態、戦争の警報などが危機をはらんでいる。それらは最大の規模をもった事件が近づいていることを予告している。悪天使たちは勢力を結集して、陣地を固めている。最後の大危機のために強化されつつある。まもなくこの世界に大変化が起ころうとしているが、最後の運動は急速なものとなるであろう。」 9T11

ダニエル11章の40節に注目しよう:

「終りの時になって、南の王は彼と戦います。北の王は、戦車と騎兵と、多くの船をもって、つむじ風のように彼を攻め、国々にはいっていって、みなぎりあふれ、通り過ぎるでしょう。」

この聖句は何を教えているだろうか？

1. 終わりの時。
2.「南の王」が「北の王」に挑戦する。
3. 二つの王国が対決すると描写している。
4. 多くの国々が関わってくる。
5.「南の王」が敗北する(41節)。

一方、アメリカ国民は反イスラム運動をもって対抗している。不気味な状況である。

「南」とは？

まず、最初に検討したいことは、ここのヘブル語で「南」とは何を意味するかということである。

・それは、“negebネゲブ”となっている。意味は、「乾燥しきった」である。

・77,000キロ平方メートルの広範囲の地域に及ぶパレスチナの南の不明確な領域のことを指している。確かにそこは極度に乾ききった場所である。聖書はその地域をネゲブと呼んでいる。

・そこは荒廃した場所である。神に呪われたことを象徴する。

「ネゲブの町々は閉ざされて、これを開く人がない。ユダはみな捕え移される、ことごとく捕え移される。」エレミヤ13:19

「人の子よ、顔を南に向け、南に向かって語り、ネゲブの森の地に対して預言せよ。すなわちネゲブの森に言え、主の言葉を聞け、主なる神はこう言われる、見よ、わたしはあなたのうちに火を燃やす。その火はあなたのうちのすべての青木と、すべての枯れ木を焼き滅ぼし、その燃える炎は消されることがなく、南から北まで、すべての地のおもては、これがために焼ける。」エゼキエル20:46-47

なぜ、「南」として、ここで訳されているのであろうか？

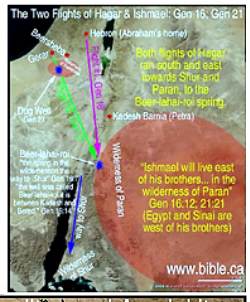
・それは、パレスチナの南だからである。従って、それは「南」の象徴となり、後に「南の民」とも言われるようになった。

・アブラハムがエジプトを出たとき、聖書は、彼は、ネゲブに来たと言っている（創世記13:1）。それから彼は、ヘブロンに移った（創世記13:18）。ここにおいて、この預言のドラマが展開されるのである。アブラハムの妻、サラとの家族騒動が起こったとき、アブラハムは、エジプトの召使い、ハガルをその息子イシマエルと共に追い出すことになる。理解しがたいことであるが、「パランの荒野」に母と息子の孤独な姿を見せられる。しかし、それは神がそうなさったことである。創世記16：1-16、21:13-21のストーリーを読んでいただきたい。

そして、更に観察を続けよう：

「神はわらべと共にいまし、わらべは成長した。彼は荒野に住んで弓を射る者となった。彼はパランの荒野に住んだ。母は彼のためにエジプトの国から妻を迎えた。」創世記21:20、21

ネゲブの荒野からパランに至るまで、イシマエルとその子孫が住むことになり、大いなる国民として発展していくのである。



こうして、新しい国民が誕生したのである。イスラム世界は、神がサラに与えた泉をさらに南の今日サウジアラビアと呼ばれるところに見出し、ここがメッカと言われるようになった。

「しかし、はしための子もあなたの子ですから、これをも、一つの国民とします」（創世記 21:13）。「そこでアブラハムは明くる朝はやく起きて、パンと水の皮袋とを取り、ハガルに与えて、肩に負わせ、その子を連れて去らせた。ハガルは去ってベエルシバの荒野にさまよった。」そこは、ネゲブの一部（南）であった。残されたわずかな食べ物と水を使い果たしてしまって、ハガルはイシマエルが死ぬのではないかと思った。しかし、天使が現れて言った：「神はわらべの声を聞かれ、神の使は天からハガルを呼んで言った、「ハガルよ、どうしたのか。恐れてはいけない。神はあそこにいるわらべの声を聞かれた。立って行き、わらべを取り上げてあなたの手に抱きなさい。わたしは彼を**大いなる国民**とするであろう」（21:17, 18）。

イシマエルとその子孫について次のようなユニークなことも記録されている：

「そこで、ハガルは自分に語られた主の名を呼んで、『あなたは**エル・ロイ**です』と言った。彼女が『ここでも、わたしを見ていられるかたのうしろを拝めたのか』と言ったことによる。」(16:13)

イスラムの伝説によると、イシマエルがアラブ民族の祖先とされている。…(http://en.wikipedia.org/wiki/Ishmael)

ユダヤの伝説によると、多くのアラブ民族はアブラハムの妻、サラが死んで後に結婚したケトラの子らからの子孫であると信じられている。

多くの歴史家は、時がたつにつれ、イシマエル部族とケトラによるアブラハムの子孫との間の混血があり（創世記 25：1-4）、それにアッシリアの部族との雑婚があったと推測している。イシマエルのイサクに対する憎悪がこれらの子孫に受け継がれ、イサクの神に対する憎しみへと発展したようである。

詩篇に次のように書いてある：

「神よ、沈黙を守らないでください。神よ、何も言わずに、黙っていないでください。見よ、あなたの敵は騒ぎたち、あなたを憎む者は頭をあげました。……彼らは心をひとつにして共にはかり、あなたに逆らって契約を結びます。すなわちエドムの天幕に住む者とイシマエルびと、モアブとハガルびと、ゲバルとアンモンとアマレクペリシテとツロの住民などです。」（詩83:1,2,5,6）

これらのアラブ民族は、聖書でいう「南」、ネゲブ、パランに散在している。

イサクーかえって「イサクから出る者が、あなたの子孫と呼ばれるであろう」（ローマ9:7）。「シオンの山は北の端が高くて、うるわしく、全地の喜びであり、大いなる王の都である。」

イシマエルーそこで、ハガルは自分に語られた主の名を呼んで、「あなたはエル・ロイです」と言った。彼女が「ここでも、わたしを見ていられるかたのうしろを拝めたのか」と言ったことによる。

詩篇 83:2-6, 8

「見よ、あなたの敵は騒ぎたち、あなたを憎む者は頭をあげました。すなわちエドムの天幕に住む者とイシマエルびと、モアブとハガルびと、ゲバルとアンモンとアマレク、ペリシテとツロの住民などです。アッスリヤもまた彼らにくみしました。彼らはロトの子孫を助けました。〔セラ〕」

歴史：

「イシマエルの12の子らとそのエジプトの妻は、多くの部族の祖先となった。」"ISHMAELITE,'" (TheZondervan Pictorial Bible Dictionary (Grand Rapids, MI: ZondervanPublishing House, 1963) p. 387

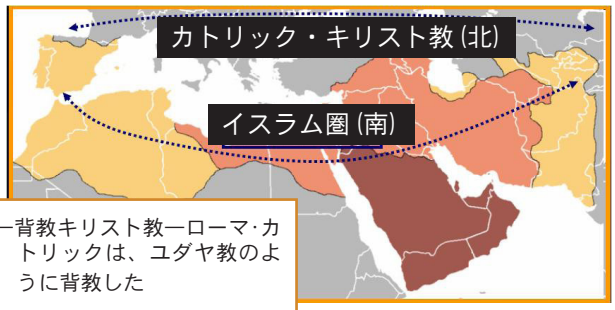
イシマエル人はベドウィン部族、クウェート、アラブ首長国、イエーメン、サウジの人々の祖先であるそうだ。

「イスラム」と唱える者たちは、すべてマホメッドの祖先、イシマエルの子孫であると主張しているという。

マホメッドとは？

マホメッド・アブドゥラー（570-632 A.D）は、アラビアのメッカで生まれた。イスラム教の創始者で、神からの啓示を受けて、コーランを書いたという。日が経ってメッカの人々は、彼のメッセージ、神の預言者という彼の主張を拒んだので、メディナというところに移り、力づくでも彼の教えを布教した。イスラムの人口増加は実に驚くべきものである。

マホメッドの時から「北」と「南」の区別は明らかになった。



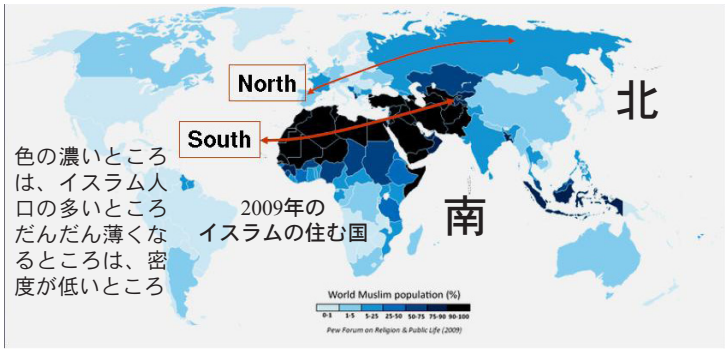
北ー背教キリスト教ーローマ・カトリックは、ユダヤ教のように背教した

南ーイスラムは、「本当の反キリスト」である「北の王」から人々の目をそらす役目をしている。

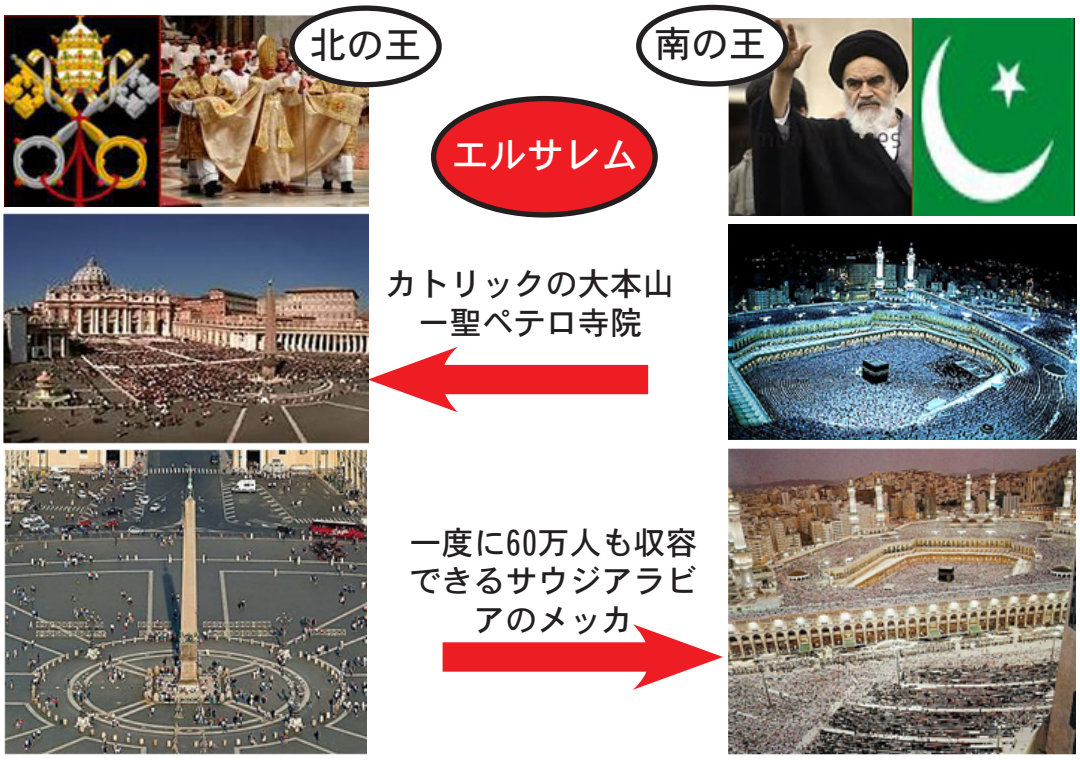
このことを理解することは非常に重要なことである。多くの者が欺瞞に陥っているからである。多くのプロテスタント教会の指導者たちは、多くの場所に出てくる「不法の者」、「バビロン」、「獣」等々は、イスラムのことだと思っている。

何世紀も経てこの区別はそのまま続いている！

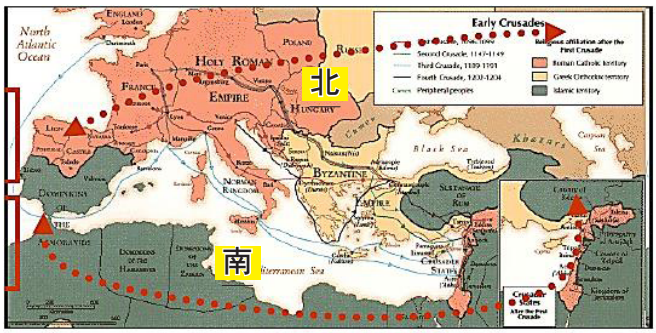
神は、非常に厳密である。北と南の二人の王が象徴するところは、神がアブラハムをご自分の民として「わが民」と言われた時代以来、変わらずはっきり区別されたまま残っているのである。



二つの勢力ー最大の二つの宗教、これは世界支配を狙っている最大勢力である！



「歴史は繰り返される」中世時代



南の王が北の王に挑戦ー第一の例

ダニエル 11:25-30

「彼はその勢力と勇気とを奮い起し、大軍を率いて南の王を攻めます。南の王もまたみずから奮い、はなはだ大いなる強力な軍勢をもって戦います。しかし、彼に対して、陰謀をめぐらす者があるので、これに立ち向かうことができません。」11:25

第一回十字軍ー聖地奪還の大遠征

ビザンチン帝国のアレックス・コメヌスは、法王ウルバン２世に助けを求める。1095 年彼はフランスのクレアモントで教会の指導者たちを集め、パレスチナ制服のために結束するなら、霊的、物質的な報酬（罪の許し、乳と蜜の流れる地の幸福）を約束して十字軍を発足させる。

重装甲の騎士が敵の騎兵を槍で突き落とし、剣で斬りつけた。イスラム騎兵の馬は快速で奇襲に

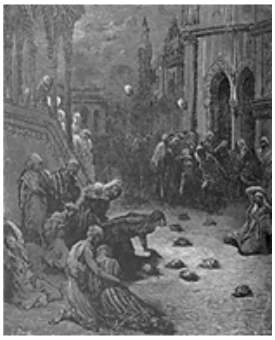
向いていた。城砦（じょうさい）に立て籠もったイスラム軍は槍と弓矢で応戦した。十字軍は城壁をよじ登り、坑道を掘り、弩（ど）（いしゆみ）で射撃し、投石器で石を打ち込み、攻城塔から攻め込んだ。1099 年、エルサレムは陥落した。

1096 年～ 1270 年、騎士、諸侯、富める者、貧しい者によって結成された十字軍は、トルコを取る。パレスチナの奪回は成功。「人々は膝まで至る血の中で泳ぐほどであった」。「虐殺はかつて記録されたこともないほどのものであった」。

第一回十字軍は成功したが、その後 9 回も十字軍が興されるが、ずっと敗北を続け「南の王」イスラムの勝利に終わる。少年十字軍も、悲惨なものだった。十字軍東方遠征の暴徒による沿道の略奪、暴行、殺戮はすさまじいものであった。

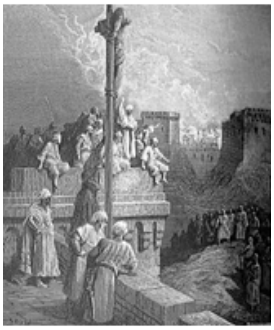
これらの戦争でどれほどの血が流されただろうか？十字軍は、イスラムから略奪するだけでなく、多くのユダヤ人も虐殺。

十字軍は聖地に小国家を建て、いくつかの城砦を築いた。シリアのケラク・デ・シュヴァリエは今も残っている。難攻不落の構えだったが、結局は 1271 年に明け渡し、十字軍はヨーロッパへ撤退した。このとき、絹や香辛料やアラブ馬を持ち帰ったが、船でクマネズミも連れ帰り、ヨーロッパではペストが流行し、人口の 3 分の 1 が犠牲となった。過去において、約 200 年間―1095-1291 年の間、この二大勢力は熾烈な戦いを繰り広げた。南のイスラム勢力と北の背教キリスト教との戦いは、実に血なまぐさいものであった。この事実は、あまりよく知られていない。しかし、中世時代のこの戦いの構図は、終末の戦いを表していることが分かる。　調べると限りなく興味深い事実が掘り出されてくる。YouTube の動画にも、レンタル DVD でも見ることができる。聖都エルサレムの奪還をめぐる戦いを絵で表した「十字軍物語」（塩野七生）は、十字軍とイスラムの壮絶な戦いであったことを私は初めて知った。「歴史は繰り返される」。ダニエル 11:40 以降のこれから起こる事件を知るうえで非常に大事だと思った。

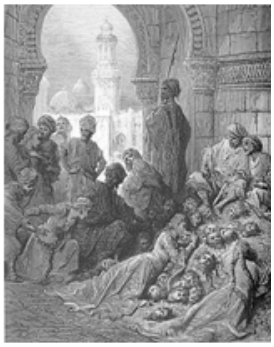


「堅固な城壁で囲まれたニケーアをめぐるキリスト・イスラム両軍の攻防は熾烈をきわめた。激闘はつづけばつづくほど、攻める側も守る側も平常心を失っていく。十字軍は、倒した敵の首を切り離し、その半数は市内に投げ込み、残りの半数は袋につめてビザンチンの皇帝に送りつけたのだった。

第一次十字軍の当時からキリスト教徒は、征服した都市に住んでいたイスラム教徒を殺しまくって恥なかった。しかも、命は助けると約束しておきながら、武装解除したとたんに殺していくのである。



また、サラディンも、宗教騎士団、それもとくにテンプル騎士団の騎士たちは容赦なく殺したが、助命を条件に降伏したエルサレムの住民への約束は、身代金つきにしても守っている。



イギリスの王リチャードが初めて、助命を条件に降伏したアッコン防衛のイスラム教徒たちを、それを確約しておきながら、武装解除するのを待って殺させたのである。これ以降はイスラム側も、キリスト教徒からこの一事を学んだのであった。」十字軍物語　塩野七生

しかし、第二回の十字軍とイスラムの戦い以降は、イスラムの勝利に終わっている。

「キリスト教徒の兵士もイスラムの兵も、戦士の誇りをかけて敢闘した。サラディンと、その彼に奪い返された地を再び奪い返そうとするリチャード。この二人の間で、一進一退の戦闘がつづくのである」十字軍物語　塩野七生

南の王が北の王に挑戦ー第二の例

トルコの王子、オスマン（1259-1326）は、近隣地域を征服し、その帝国は1300年に設立された。オットマンの軍隊は、1345年にバルカン地域までヨーロッパを占領。その時点から、19世紀にかけて、ヨーロッパのほとんどを占領。しかし、オスマン帝国は、1840年に失墜する。

「南の王」は「北の王」に挑戦する、全く同じことが「終わりの時に」起こるとダニエルは言っている。

イスラム勢力の復活 1970年代

1．オイル高騰

2．イラン国王シャーを1979年に廃位、過激派のアヤトラ・ホメイニ師の台頭。イスラムの中に狂暴派が出現。

3．第二次オイル高騰ー1997-2007年。その時イスラムの布教に多額の資金が注ぎ込まれる。900億ドルが領域拡大に投資された。テロがイスラム世界の特徴となる。イスラムは威圧的になる。平和を「主張」するが高圧的になる。コーランにもキリスト教に対する憎悪を見ることができる。近代社会で考えられないことが起こっている。(The Pew Forum on Religion and Public Life and the CFR May 3, 2005)

双方の敵愾(てきがい)心

「カトリックの考え方：彼ら以外はみな『異端者』と呼ぶ。バチカン第二公会議以後も変わっていない。

カトリックの異端者火あぶりの刑

イスラム世界の考え方：彼ら以外はみな『不信心者、異端者』と呼ぶ。平和の対話をしていながら、なおそのように考えていることに変わりはない。

双方とも、他を「悪魔的」「悪魔につかれている者」として見ている。」（フランクリン・ファウラー資料［南の王］より）

しかし、今日、イスラムとは言っても、過激派と穏健派があるようである。

北の王と南の王の相似点：

イスラムの不信心者に対する攻撃は2百万人の死をもたらした

不思議に両方ともよく似ているところがある：

- 両方とも世界支配を狙っている。
- 両方とも、宗教的権力である。
- 両方とも、終わりの時に再び登場する。
- 両方とも、他を悪魔呼ばわりする。
- 両方とも、似たような道徳的背教が見られる。

ローマ･カトリック教会の児童性的虐待に対する告訴

【パリ高木昭彦】児童に対するカトリック聖職者による性的虐待が世界各地で発覚し、ローマ法王ベネディクト１６世に対する批判が高まっている。法王自身がスキャンダル隠ぺいにかつて関与していた疑いも報道されており、一部被害者は法王の退位を要求している。

聖職者による児童虐待は昨年以降、アイルランドをはじめ、法王の出身国ドイツ、スイス、オーストリア、オランダ、ブラジルで報告された。

アイルランドでは1930年代から90年代にかけ数千人の児童が性的暴行などの虐待を恒常的に受けていた。法王は３月、一連の事件で初めて謝罪する書簡を発表。しかし、書簡は教会の体質には言及せず、事件を隠ぺいした教会トップの辞任も求めなかったため、逆に批判を浴びた。

さらに、スキャンダルは法王自身の身にも降り掛かった。法王がバチカン（法王庁）教理省長官時代、米国の神父による聴覚障害児２００人に対する性的虐待を報告する書簡を地元教会幹部から受け取りながら、何の対応も取らなかったと米紙ニューヨーク・タイムズが３月下旬に伝えた。ドイツでは、法王がかつて

大司教を務めたミュンヘン司教区で多数の虐待が行われていたことも明らかになった。

スキャンダルの広がりで、カトリック教会が聖職者の妻帯を認めていないことに内部から異論も出始め、一部司教らは禁欲が性的虐待に結び付いているとして妻帯を認めるよう主張。また、もともと小児性愛者が聖職者を志望するという実態も指摘されており、カトリック教会の抜本的改革を求める声は日増しに強まっている。2010/04/01 付西日本新聞朝刊

しかし、法王は強気の姿勢を崩していない。３月末、バチカンのミサでは「イエス・キリストは、流言を通じた脅しに立ち向かう勇気を持つように、われわれを導いてくださる」と表明。バチカン広報も「スキャンダルで法王の権威が弱まることはない」と語っている。一方、欧州の一部メディアは法王の退位問題について報じている。

2006 年の報告：1950 年以来 4,983 の司祭が告訴され、12,537 の犠牲者があると推定されてきた。教会は、虐待、治療費に昨年は 173％、4 億 6 千 6 百万ドルに跳ね上がった。新しい統計によると、1950 年以来、合計 10 億 1 千 9 百万ドルにも達したという。(file:///E:/Documents-Teaching/Papacy/Sex-papacy/PornSeminary-2004D83PE7O82.html)

イスラムの児童性的虐待は？

2009 年に共同結婚式：

「ハマスが小児愛症（大人の子供への異常性愛）結婚式の主催」450 人のイスラムの大人が 10 歳以下の女の子を花嫁とした。

ほとんどは 20 代の男性、ある者たちはすでに妻帯者。これは 2009 年のことである。ハマスの指導者、ムハマッド・ザハルは、みんなに祝福の手を伸ばした。そして言った、「我々は、世界に、またアメリカに向って、あなた方は、我々の喜びと幸福を否定できないのだと言いたいのだ」(www.libertynewsonline.com/article_375_28954.php)plus www.thelastcrusade.org by Paul L.Williams.

これらの少女たちの 21％は、幼児虐待を受けているという。(International Center for Research on Women)

ただ男性を楽しませる道具となるのである。女性に対するこのような野蛮な行為に対して批判する者を彼らはゆるさない！

プラカードには、「イスラムをののしる者を打ち首にせよ」「イスラムをののしる者を殺せ」「イスラムをあざ笑う者を殺戮（さつりく）せよ」「イスラムを中傷する者を消し去れ」「ヨーロッパは癌だ、イスラムが答えだ」等々と書いてある。

アフガニスタンでは、少年たちも、金持ちの政治家、商人、上流階級の性の道具として売り買いされている。右の写真は、バチャーバジーボーイと呼ばれている少年たち。女の子のような踊りをクラブでさせられ、夜はセックスの道具となるという。

ローマ・カトリック教会も、イスラムも小児愛症がしみ込んでいるという事実。この二つの世界最大の宗教勢力は非常に似ているのである。

「文明の衝突と世界秩序の再構築」サミュエル・フィリップス・ハンティントンは 1990 年に言った：

（サミュエル・P・ハンティントン Samuel Phillips Huntington は、ニューヨーク生まれの国際経済学者。ハーバード大学の教授を経て、アメリカ政府の国家安全保障会議で安全保

障政策担当のコーディネーターもつとめた実地派の文明学の専門家）

「キリスト教は主として改宗によって信者を増やしているのに対し、イスラム教は改宗と人口増加によって信者を増やしている。・・・・2025年には世界人口の約３０％に達するだろう。….

「イデオロギーの対立は終わったが、人類の対立、紛争が終わったわけではない・・・・・世界にいくつか存在する文明、多くの領域が絡み合った＜文明＞というものが正面に出てきて、これからは地球上の文明間で紛争が起こる」**20世紀哲学、思想史**―２０世紀の思想家は何を考えていたのか？―

ハンティントン博士は、自分たちの文明の優秀性を誇り、他の勢力は劣等であるという思想に取りつかれているイスラム原理主義を非常に憂慮している。

2002年当時の**ロシア大統領のプーチン**は、「イスラム過激派は、非回教徒の計画的な絶滅を追い求めている。…西欧文明はイスラム-テロリストからの致命的脅迫に直面した。彼らは『世界的カリフ統治』を作ろうという計画を持っている」と主張した。Putin, Vladimir; London Telegraph, Nov. 12, 2002 (emphasis added).

2008年11月に、アル・アクサテレビはハマスの指導者のハレッド・メシャールのメッセージを流した：

「イスラムは人類を地獄の火から救うため世界を支配するのだ」。

イランの指導者

イランのマフムド・アフマディネジャド大統領は、演説の際にしばしば「アメリカ、イギリス、そしてイスラエルに死を」と呼びかけ、欧米の民主主義国家を威嚇する[2]。　イランは、「イスラエル打倒同盟」を結成し、ある特定の国連加盟国をこの世から消滅させると警告する近代史上、類のない国家である[3]。反欧米感情を扇動するイラン最高指導者ハメネイ師とアフマディネジャド大統領。

終りの時に再燃する南の王と北の王の激戦！

聖書は、この二つの世界支配を狙っている巨大組織について明確な預言をしている。ダニエル11:40をもう一度引用しよう：

「終りの時になって、南の王は彼と戦います。北の王は、戦車と騎兵と、多くの船をもって、つむじ風のように彼を攻め、国々にはいっていって、みなぎりあふれ、通り過ぎるでしょう」。

この「彼と戦」うという表現は、新共同訳では、「戦いを挑む」となっている。つまり、「南の王」イスラム勢力が「北の王」ローマ法王教に対して激しく挑戦するというのである。

どちらが勝利するだろうか？ローマ法王教であると聖書は断言する。アメリカの同盟国、西諸国の応援でローマ法王教の勝利となる。それは、黙示録13章の預言も明言している：

「その頭の一つが、死ぬほどの傷を受けたが、その致命的な傷もなおってしまった。そこで、全地の人々は驚きおそれて、その獣に従い、「また、龍がその権威を獣に与えたので、人々は龍を拝み、さらに、その獣を拝んで言った、『だれが、この獣に匹敵し得ようか。だれが、これと戦うことができようか』」。13:3,4

黙示録17章においても同じである。

この世界二大勢力の戦いは、ダニエル11:44からは、最後の神の民に矛先が向けられる！

「しかし東と北からの知らせが彼を驚かし、彼(北の王＝ローマ法王教)は多くの人を滅ぼし絶やそうと、大いなる怒りをもって出て行きます」11:44

北の王が全世界を支配し、新世界秩序の王として君臨する時、「東と北からの知らせ」が彼を驚かし、怒らせる。

「第三天使の使命も、このようにして宣布される。それが非常な力で伝えられる時が来るならば、主は謙遜な器を通して働かれ、主の奉仕に献身した人々の心を導かれる。働き人は、学歴ではなくて、聖霊を注がれることによって資格を与えられる。信仰と祈りの人は、聖なる熱意に燃えて出て行き、神から与えられる言葉を宣言せざるをえ

なくなる。バビロンの罪は暴露される。教会の法令を政権によって強制することの恐るべき結果、心霊術の侵入、法王権のひそかではあるが急速な発展などが、みな暴露される。これらの厳粛な警告によって、人々は動かされる。こうした言葉を聞いたことのない者が、幾千となく耳を傾ける。バビロンとは、その誤りと罪のために、また、天からの真理を拒んだために倒れた教会である、ということを聞いて、彼らは驚くのである。人々が、彼らのかつての教師たちのところへ行って、これらのことは真実であるかと、熱心に尋ねるときに、牧師たちは、作り話を語り、耳ざわりの良いことを予言し、彼らの恐怖と目ざめた良心をしずめようとする。しかし、多くの人々は、単なる人間の権威に満足せずに、はっきりした『主はこう言われる』という言葉を要求するので、一般教会の牧師たちは、昔のパリサイ人のように、自分たちの権威が疑われたことを怒って、そのメッセージはサタンから出たものであると非難し、罪を愛する群衆を煽動して、その宣布者たちをあざけり、迫害するのである。」各時代の大争闘下376

それは一体何であろうか？　黙示録 18:1 の全地を照らす「**大いなる叫び**」である。

地球最後の天下分け目の大決戦

「彼ら（悪の勢力）は心をひとつにしている。そして、自分たちの力と権威とを獣（ローマ法王教）に与える。彼らは小羊（キリスト）に戦いをいどんでくるが、小羊は、主の主、王の王であるから、彼らにうち勝つ。また、小羊と共にいる召された、選ばれた、忠実な者たちも、勝利を得る。」黙示録17:14

もうすぐ最後の戦いに突入する！

もうすぐ神の民の最後の勝利が来る！

もうすぐ愛する救い主にお目にかかれる！

「この幻はなお定められたときを待ち、終りをさして急いでいる。それは偽りではない。もしおそければ待っておれ。それは必ず臨む。滞りはしない。」　ハバクク2:3

この世界二大勢力、ローマ法王教とイスラムには非常に不思議なつながりがある。「カトリックがイスラムを作った？」そんなことがあり得るだろうか？ダニエル 11 章に出てくるシリア王朝と南のエジプト王朝は、実はギリシャから分かれたものであった。

終わりの時の「北の王」と「南の王」はどんな関係にあるのだろうか？ローマ法王教の高度な陰謀があるのだろうか？追究するに値するテーマである。

サンライズミニストリーウェブサイトをご活用ください！

www.srministry.com

- オンラインメッセージのページでは、説教内容が動画放送で視聴できます。またMP３（音声のみ）や、説教シラバスもダウンロード出来ます。
- アンカー誌の創刊号からのバックナンバーが観覧できます。
- セミナーの案内、セミナー収録の一部も公開しています。
- サンライズミニストリーの書籍がインターネットから注文することが出来ます。

STUDY

ダニエル11章40節～12章1節の研究

「終わりの時」の諸事件

橋川 真理（在米日系人）

ダニエル11:40-12:1が解読される時が来た:

この研究は、ダニエル書 11 章 40 節から 12 章の 1 節までです。この預言解釈は、ずっと封じられたままでした。セブンスデー教会が行っている伝道集会，講演会あるいはセミナー等に出席してもこの個所については語られてきませんでした。ダニエル書に書かれている他の表現は全てウイリアム・ミラーや他のパイオニヤ時代の人々を通して神は解き明かされました。彼らは熱心に聖書のあちこちを探り調べ知識が増しました。これはダニエル 12 章 3 節にもしるされています。

では現代終わりに来ている我々はどうなのでしょうか、ご存知のように 12:1 節はミカエル、すなわちキリストが立ち上がる光景です。つまり、恩恵期間の終わりです。ということは、11 章の終りの 6 節はこの恩恵期間が終わる直前におこる出来事が記されているということです。我々はこのように終わりの時代に最も大切な預言を封じられたまま、或いは理解できないまま悩みの時を迎えてしまうのでしょうか。いいえ、神は決してそのようなことはされません。神ははっきりと我々に光を照らしておられます。ただ、パイオニヤ時代の人々と同じように熱心に聖書のあちこちを探り調べないといけません。

有名な神学者マーヴィン・マックスウエル博士が書いた本があります。この本は聖書研究者が参考書の一つとしてよく用いている本ですが、この本にはダニエル書 11 章の 40-45 節に関してこのように記されています：「ここに書かれている預言が成就され始める時まで、分からないであろう。」

この本は 30 年前ころに出版されたものです。今日は皆さんとご一緒にパイオニヤ時代の人たちと同じようにあちこちを探り調べたいと思います。それには最初にもう既に与えられた光をもとにして、勉強を始めないといけません。

11:40の背景：預言解釈の原則

既に与えられた光から前進

ダニエル書の他の預言に関しては、もう既に我々は光を与えられています。ご存知のようにダニエル書には 4 つの預言が記されています。

第一の預言は第 2 章、大いなる像、これはバビロンから始まりメドペルシャ、ギリシャ、ローマへというふうに解釈されています。

第 2 の預言は 7 章に記されています。これは第 2 章と同じようにバビロンから始まり、メドペルシャ、ギリシャ、そして異教のローマ法王制と続きます。繰り返して国々が出てきますが、それと同時にもっと詳しい説明、詳しい知識が加えられています。

第 3 の預言は 8 章、バビロンはもう、去ったあとですので、メドペルシャから始まり、ギリシャ、法王制ローマと続きます。

そして最後の第 4 の預言は 11 章、今日勉強する 11 章に書かれていますがこれも 8 章の繰り返しメドペルシャから始まりギリシャ、異教ローマ法王制と解釈されております。4 つの預言の中でも最も詳しい情報が書かれていて獣、或いは角のような象徴的なシンボルは使わず、直接王或いは国が登場しそれらの歴史がずっと描かれています。

繰り返すのはなぜでしょうか。神はそこに示されている真理の重大さを強調されたいからです。そのために神は繰り返されます。そして繰り返す

度に神はもっと詳しい説明をされ知識を増し加えて、我々が少しずつ理解できるよう光を徐々に与えて下さっているわけです。Ⅱペテロ 1:20 には聖書の解釈は全て「自分かってに解釈すべきでないことをまず第 1 に知るべきである」と書かれています。例えば、ダニエル書 8:3 節には一匹の雄羊、二つの角を持った雄羊が登場します。同じダニエル書 8:20 にはこれは古代のメディアとペルシャであるとはっきり説明されています。しかしある人は、新聞の記事を見ながらこれは現代のイランとイラクであると、自分かってに解釈する人もいます。新しい光は既に与えられた古い光を基にして理解できるということを我々はよく覚えていなければいけません。新しい光はつねに古い光と一致します。そうでないといろんな解釈が生まれてきます。イエス・キリストも同じような方法で弟子たちに教えました。

ルカ 24:27 には、「モーセや全ての預言者からはじめて、聖書全体にわたり、ご自身についてしるされていることどもを解き明かされた」とあります。即ちイエス様は既に示されている古い光―旧約聖書に書かれている古い光を基にして弟子たちに自分のことについての預言を教えられたということです。このイエスが我々に模範として示して下さった方法に従わないと、いろんな解釈が生まれいろんな危険も生じるわけです。ここでもう一つイエスのおっしゃったこと、これは使徒行伝の 1:6 節と 7 節を見るとわかります。6 節には弟子たちがある質問をいたします「主よ、イスラエルのために国を復興なさるのはこの時なのですか。」その答えとしてイエスは時期や場合、この日本語の「場合」は、欽定訳では「季節」と書いてあります。つまり「これは時期や季節は父がご自分の権威によって定めておられるのであって、あなたがたの知るかぎりではない」とおっしゃいました。これはイエスが天に昇られる直前におっしゃった最後の言葉です。我々も弟子達のように将来が知りたいという好奇心を持っています。試験の日の前の日に一夜づけでもして勉強したという経験をもっているかたもいらっしゃる。その時がわかっていても準備を怠っていて、ぎりぎりまでやらないという人間の性質を神は良くご存知です。そのために再臨の時、いろんな時はあなたがたの知るかぎりではないとイエス様は弟子たちにおっしゃったわけです。

預言の期間の計算

ここで 11 章の研究に入る前にもう一つイエス様がおっしゃったことに関して説明をしたいと思いますが、時に関する預言には二通りあります。一つ目は文字通り、つまり一日は一日、一年は一年と解釈する時に関する預言です。例としてノアの洪水前、120 年間、ノアは伝道いたしました。あとはもう一つイスラエルの民がバビロンに捕らわれた 70 年間の捕囚、これも文字通りの預言ですね。70 年は 70 年間これが一つ目の時に関する預言です。二つ目は、1 日を一年とする預言の時、例としては、2300 年の夕と朝、或いは 1260 年間の暗黒時代、法王至上権時代の預言です。このように時に関する預言には二通りあります。そこでホワイト夫人の書物の中から紹介したいと思います。

バイブルコメンタリーの 7 巻 971 ページにこういうことが書かれています：

「天使が厳粛な誓いをもって宣言しているこの時というのは、この世界歴史や恵みの時の終わりではなく、預言的時の終わりのことであり、それは主の再臨に先行するものである。つまり、人々は特定の時について別の使命を持たないであろう」つまり、1844 年以降は定められた時、数字で表す事が出来るような定められた時にもとづくメッセージはもう我々に与えられないということです。

定められた時さきほども申しあげたように、時に関する預言は二通りあります。①一日を一日とする解釈文字通りの預言、②あるいは一日を一年とする預言の時、両方とも 1844 年以降、神様は我々に与えられていないということです。ということは現代の我々にとって再臨までの主な出来事は預言に記されていますが、それらの出来事がいつ起こるか或いはどのくらいの期間にわたって起こるか数字で表すことができるようなメッセージを示されていないということです。

例えば日曜休業令から再臨まで 1260 日間ありますよ、或いはこの出来事からこの出来事までは 1290 日間さらにこの出来事からまたさらに 1335 日間ありますよ、または 2000 何年にこのような出来事がおこりますよ、そのような預言のメッセージ、前もってわかる預言のメッセージはないということです。

※　このことに関しては、アンカーと必ずしも意見が一致していません。「特定の時＝ definite time」というのは、何年、何月、何日という時のことで、預言的期間（タイムライン）を言っているのではないと信じています。我々は、ダニエル 12 章は未来に関する預言であり、未来であるならその預言の期間は、字義通

りの期間であると信じています。預言的時―1日を1年と数える時はもうないはずです。

時が近いということは、神様は、我々に何度も何度も強調して教えておられますが、それ以上の事、数字で表すことができるような定められた時にもとづくメッセージは我々にお与えになっておられません。これは大変危険な惑わしでもあります。そのことをよく覚えて預言の勉強をしないといけないということです。では今からダニエル11章に入ります。

11章の研究

実は、ダニエル11章は10章から12章まで続いた一つの幻の中の一部分であります。天使ガブリエルがダニエルに今まで示された幻について、更に詳しい説明が10章から12章まで続いています。11章は全部で45節ありますが、古代メディヤとペルシャの時代から始まり、ずっとキリストの再臨までなんと約2500年もの歴史を物語っています。時間の関係で一節から39節までの詳しい解釈の勉強はしませんが、ここで、大きな流れを説明します。11章全体のひとつの大きな絵を描いて、それから40から45節までの説明をしたいと思います。

まず1節から29節まではメデイヤとペルシャ、ギリシャ、そしてローマ帝国が登場し、それらの国々の浮き沈みが描かれています。これらの国々は全て異教の国家でした。この異教という言葉ですが一般的にはキリスト教以外の宗教、ある人は偶像礼拝を含む多神教とも言っております。それが異教という意味です。この異教の国々の間で起こった権力の争いや戦争、それについて1節から29節まで語っています。この地球上で戦われている大争闘、サタンとキリストの大争闘、殆どの場合、サタンは自らは登場しません。そのかわり、いろいろな代理人を巧みに使い、神とその民に対して攻撃をしてくるのです。1節―29節までは、異教の国々を代理人として使ってサタンは攻撃したということです。

そして30節-31節までは、異教ローマから法王制ローマへの移行期間についての個所です。そのあと32節から45節までの主役はあくまでも法王制ローマがサタンの代理人として用いられます。異教の国々は、直接神とその民に対して攻撃をし、全滅させようとしました。しかし法王制ローマ（反キリスト）はヨハネ第1などに「反キリスト」としてでてきますが、そのほんとうの意味「**神の代わり**」ということです。神に反する、という意味ではなくキリストに代わってという意味、つまり神の代理者として神の座を奪い、みせかけのキリストとして神の民を全滅させようとたくらむわけです。そして、迫害だけではなく惑わしを用いて神の民を攻撃しようとする、これが法王制の権力です。

ダニエル書に登場するサタン的権力はつまり二通りあるということです。一つは異教の権力、そして二つ目が法王制の権力です。この権力が二つの迫害する者、二つの荒らすものとなってこの地球上で神の働きに対して権力を振うものとして語られています。これがダニエル書に出てくる預言で、ユライヤ・スミスの書いた「ダニエルと黙示録」という本などを読むと詳しく書かれております。彼の解釈は全部は当たっておりません。しかし大きな部分はとても勉強になります。ホワイト夫人もユライヤ・スミスの「ダニエルと黙示録」の本を神の手助けというふうに言っておられます。

この11章16節以降を勉強してきますとジュリアス・シーザー或いはクレオパトラ、初代皇帝アクタビアヌス、アウグトス、それからルカの3章に登場する皇帝テベリオなど、これは世界史でも有名な人物が次々と登場いたします。何故でしょう。これは異教ローマの時代だとすぐわかるように、たとえば聖書をよく知らない人でもわかるような人物が登場します。神は人々が混乱しないように今、預言的な歴史のどの辺を歩んでいるか明確に記すため、そして大争闘のクライマックス再臨に向けて希望を与えて下さるために、このように11章に詳しい情報をお与えになったということです。

では次に同じくホワイト夫人の書物から一つの興味深い文章を紹介したいと思います：

「我々には浪費する時はない。苦難の時が目前に迫っている。世界は戦争の精神でわき立っている。ダニエル11章の預言は、ほとんど完全な成就をみている。まもなく、この預言に告げられている苦難の光景が起こるであろう。この預言の成就として起こった多くの歴史が繰り返されるであろう。30節に「彼に立ち向かって来るので、彼は脅かされて帰り、聖なる契約に対して憤り、事を行うでしょう。彼は**帰っていって（戻ってきて）**、聖なる契約を捨てる者を顧み用いるでしょう（彼帰りゆき、聖約を捨つる者と相謀らん―明治訳、文語体）。彼は落胆して引き返し、聖なる契約にいきりたち、ほしいままにふるまう。　彼から軍勢

が起って、神殿と城郭を汚し、**常供**を取り除き、**荒す憎むべきもの**を立てるでしょう。(31-36引用)。

「これらの言葉に描写されている同じような光景が起こるであろう。我々は神を恐れない者たちの心を支配しようとしてサタンが急いでいる証拠を見る。すべての者はこの書の預言を理解しようではないか。」Manuscript Releases, Volume 13, page 394 (Letter 103, 1904).

そして更にホワイト夫人は12章の1節から4節までを引用しております。簡単に言えば、ダニエル書11章の歴史的な出来事は、ほぼ成就されました。でも完全には成就されていませんが歴史的なできごとをよく読み理解しなさい、その理由は既に成就された出来事の多くが繰り返されるからということです。ここに描かれている似たような光景が起こるでしょう。それでこの預言を読み理解しなければならないとおっしゃっておられるのです。さきほども申しあげたように11章の30節と31節は異教のローマから法王制のローマへの移行期間について語っています。

次の32節から35節までは1260年間の暗国時代、法王至上権の迫害があった時代についていろいろと描かれています。35節には「また、賢い者のうちのある者は終わりの時まで自分を練り、清め白くするために倒れるでしょう。終わりはなお定まった時が来るまで来ないからです」と書いてあります。

35節の終わりの時、定まった時はいつだったのでしょうか。時に関する預言の期間の終わり、538年から始まった1260年の暗国時代の終りを示しています。つまり1260年間続いた法王制至上権時代は1798年に終わりました。これは既に預言で定まっていた時で、ナポレオンの軍隊が法王を捕えてしまったという出来事がおこりました。その1798年が終わりの時です。

11:40から「終わりの時」に関する諸事件

その前後関係を保ちながら終わりの時の勉強をします。40節は終わりの時という言葉で始まっています。40節の前半に「終わりの時になって南の王は彼と戦います」。つまり終わりの時は1798年ですが、12章の4節にも終わりの時という言葉が出てきます。この終わりの時は、1798年と我々は解釈しております。

12章の1節は再臨の直前に起こる恩恵期間の終わりです。つまり再臨の直前にある恩恵期間の終わりまでに起こる出来事が書かれているその部分を今日勉強します。

では、40節初めの部分に戻ります。終わりの時になって、つまり1798年になって南の王は彼と戦います。彼は北の王です。11章の初めの所に出てくる5節あたりから南の王、北の王との戦いが示されています。預言に書かれている国々は、神の民、つまりイスラエルとなんらかの関係をもったときに初めてステージに登場します。あくまでも主役は神の民イスラエルです。多くの場合、直接イスラエルという名前でステージには出てきません。つまりステージ裏で出番を待っているような状態ですが、預言に出てくる国々は、イスラエルとなんらかの関係をもって登場するわけです。北の王、北の国は、イスラエルの北にあった国を示しています。古代イスラエルの場合はシリヤ、その後バビロンにバトンタッチされます。けれども北の王＝北の国は、シリヤ、そしてバビロンの王を示しています。そして南の王、南の国は、イスラエルの南のエジプトを示しています。今から説明することも大切なことです。預言に出てくる国々の中には、イスラエルやエジプトのように今でも存在する国もでてきます。けれども他には、バビロンやエドムやモアブなど今では存在しない国々や部族も登場致します。その時にとても大切なことを覚えていなければいけません。ルイス・ウエアーという牧師が書いた本で、「聖書解釈の原則」というとても有名な本があります。

この本を勉強して、私なりにわかりやすくまとめてみました。国、部族、地域などの名前或いは名称が、預言に登場した時に、その登場した預言が十字架の前の歴史を物語っている場合は、文字通りに解釈をする。しかし、国々の名前などが十字架の後に登場した場合は、その国々の名前は象徴的です。何故でしょうか、十字架の前はあくまでもイスラエルは、古代イスラエルでした。それでイスラエルの周りにあった国々、バビロンは同じく古代バビロン、エジプトは同じ古代エジプトとして解釈いたします。しかし十字架の後は、古代イスラエルの恩恵期間が終わりキリスト教会と

なりました。つまり霊的なイスラエルです。その周りにいる国々バビロンは同じく霊的なバビロン、エジプトも同じく霊的なエジプトとして象徴的に解釈しないといけないということです。

このことを考慮しないと大変危険な解釈が生まれてしまいます。例えば黙示録の 14 章 1 節にはシオンの山が出てきます。これは文字通りのエルサレムと解釈してしまってそのために実際にエルサレムに行ってしまったセブンスデーのグループもあります。かってに都合の良い時だけ、文字通りに、あるいは象徴的に解釈することは大変危険だということです。今存在するイスラエルやエジプトは文字通りに解釈して、存在しないバビロンとかエドム、モアブは象徴的に解釈する、そういうかってな解釈をしてはいけないのです。一貫して解釈しないといけないということです。

それと同時にダニエル書と黙示録は一つで調和があるはずです。これは預言を勉強する上での大切なルール、原則です。ダニエル書と黙示録は一つである。このことは今から勉強するいろんなことの中にも何度かでてきます。

40 節にもどります。前半、これは終わりの時即ち 1798 年の出来事です。ここの「北の王」は、十字架のずっとあとですから霊的バビロンの王、つまり法王制ローマを示しています。では「南の王」、これも象徴的なエジプト、霊的なエジプトを示しています。ではエジプトという国は、何を象徴しているのでしょうか。これは無神論、聖書の出エジプト記 5 章の 2 節に書いてあります。「パロは言った『主とはいったい何者か私は主を知らない。』」これは各時代の大争闘上 344, 345 ページに書かれていますが、1790 年頃の無神論の国は、フランスであったとはっきり書かれています。1789 年に始まったフランス革命で聖書が焼かれ、何万人もの人々が殺害されました。そして同じく各時代の大争闘上、340, 341 ページには、ナポレオンの軍によって法王は捕らえられ、そして後に死んだ。つまり、ダニエル書 11 章 40 節の前半は黙示録 13 章の 3 節と同じ出来事を物語っているということです。

13 章の 3 節は獣、法王制ローマです。法王制ローマは死ぬほどの傷を受けた、と書いてあります。その死ぬほどの傷を受けたのが 1798 年、法王制ローマは、政治的な権力を失ってしまいました。それが致命的な傷です。フランスの軍隊に捕らわれてしまって政治的な権力を失いました。

そしてその法王制ローマが、致命的な傷が癒やされ、そして、政治的な権力が復活し、最後のスーパーパワーとして登場する様子を描いた個所が、ダニエル 11 章の 40 節から 45 節なのです。再臨の前、この世の終わりを生き抜く人々にとってここで与えられている光はとても貴重なものです。いろいろな惑わしのある中でこの真理を正しく理解することは、重要であるとイエスさまもおっしゃいました。マタイ 24:15 節でこのダニエル書に関して「読者よ悟れ」とおっしゃいました。

「ローマ」ということは預言の中に何度も何度も出てきます。ここで大切なことを皆さんに強調したいのですが、三つのローマが登場いたします。一つ目は異教ローマ、2 番目は法王制ローマ、三つ目は最終時代のローマ。ホワイト夫人は「歴史は繰り返す」と言われました。過去のパターンを見つけると将来にあてはめることが出来ます。また黙示録の 17 章の聖書研究でこのパターンが出てきますけれども、異教ローマと法王制ローマの歴史からこのパターンを見つけたいと思います。

繰り返される三つのパターン

第一のパターン障害物を取り除く

11 章の歴史から浮き上がるパターンは三つあります。まずその一つ目の異教ローマが権力を増し、その当時の世界を支配するためには、まずその前に立ちはだかる三つの障害物或いは邪魔ものを克服しなければなりませんでした。そして法王制ローマも同じようにその権力を増し、その当時の世界を支配するためにはその前にたちはだかる三つの障害物あるいは邪魔ものを克服しなければならなかったということが聖書から浮き上がってきます。

まず一つ目、異教ローマを見てみましょう。ダニエル書 8 章の 9 節。これは異教ローマの角のうちから小さい角が出てきて南に向かい東に向かい麗しい地に向かってはなはだしく大きくなりと書いてあります。これは一つ目の異教ローマの図です。三つの地域即ち南、これはローマの南の国エジプトそして次、東、これはローマの東に当たるシリヤ、そして麗しい地、イスラエルです。神の民です。三つ目のイスラエルの民を克服した後、はなはだ大きくなったと書いてあります。キリストの初臨の時代は異教ローマの時代でした。それで、ローマの兵隊たちがイエスを十字架にはりつけたわけです。これが異教ローマの歴史から見るパターン、はなはだしく大きくなる前には三つの邪魔ものを克服しなければいけなかった。

では次のローマ法王制ローマの歴史を見てみま

しょう。これはダニエル書7章の8節を見るとわかります。一つの小さい角が登場しますが、これは法王制ローマ、西側です。「わたしがその角を注意して見ているとその中にまた一つの小さい角が出てきたが、この小さい角のために先の角のうち三つがその根から抜け落ちた。見よこの小さい角には人の目のような目があり、又大きなことを語る口があった」としるされています。これは法王制ローマの図です。少し前の7節には十の角が登場いたします。十の角のうち三つがその根から抜け落ちた後に、法王制ローマは力を増すわけですが、この三つの角は、ヘルライ、バンダル、オストロゴス、この三つの国々が克服されたということです。

この三の国々はアリウス主義者でした。アリウス主義というのは、キリストは神に造られたもので、神と同等ではないという教えです。現在もエホバの証人などに受け継がれている教理で、法王制ローマにとってこれらの三つのアリウス主義者、ヘルライ、バンダル、オストルゴスは異端者であり、邪魔ものであったわけです。権力を増しながら支配を拡大するためには三つの角を全滅させなければいけなかった。それが全滅した後に、1260年間法王制ローマは支配したのです。

この預言的なパターンも最後の時代のローマによって繰り返されます。致命的な傷を負わされたローマは、三つの障害物、三つの邪魔ものを克服しながらその傷を癒やしていく、そして、完全に傷が治った時、最後の時代のローマとして世界の頂点に再び立つ。この蘇る様子がダニエル書11章の40節から45節までのできごととして描かれています。ではどのような障害物をどのように克服していくのでしょうか。そこに今から入っていきます。

終りの時に法王制ローマが至上権を復活するために

三つの預言的パターンが11章にあります。第一のパターンは、三つの障害物を克服するということです。

第二のパターン：宗教と国家権力が結合すると新しい宗教が作られる。

第二のパターンは、大争闘上を読むと分かると思いますが、異教ローマから法王制ローマへ移行する時、キリスト教会と国家が手を組み結果として新しい宗教が形成されました。つまり初代のキリスト教会―宗教の力、異教ローマ―国家の政治力、つまり宗教の力と政治力が手を組みその結果新しい宗教、カトリック教という宗教が生まれました。キリスト教と異教ローマが手を組んだために偶像礼拝や、日曜礼拝など偽りの教えがキリスト教会に入ってきて、新しい宗教が形成されたということです。これが第二のパターン。

第三のパターン：敵同士協力して共通の目的を果たす

第三のパターンですが、以前は敵どうしであったものがお互いに協力して共通の目的をはたす、これが第三のパターンです。キリスト教と敵であるはずの異教ローマがお互いに協力して共通の目的を果たす、共通の目的はアリウス主義の国々を滅ぼすということです。異教ローマ帝国は各地に勢力をのばしていきましたが、ゲルマン民族の三つの国、アリウス主義の三つの国が最後まで言うことを聞かなかったわけです。ですから異教ローマにとってもこの三つの国は邪魔ものでした。それと同じように法王制ローマにとっても、アリウス主義は邪魔ものでした。この三つの国々を全滅させることは、お互いにとって利益になることで、敵同士が協力しあったということです。異教ローマの支配下におかれていたヨーロッパの諸国、つまり十の角のうち三つの角は滅ぼされました。アリウス主義以外の七つの国々がそれぞれ法王制ローマに対し軍事力と経済力を提供してこの残ったアリウス主義の三つの国々をことごとく滅ぼしたということです。フランスのクロービス王からイギリスのアーサー王、全ての七つのヨーロッパの諸国がカトリック教となりました。その結果として、法皇制のローマが当時の世界の頂点に登りつめて1260年間ヨーロッパを支配しました。

これが歴史に見ることができるパターンですが、これを11章の40節に戻って、終わりの時代のローマに当てはめてみたいと思います。40節前半は北の王すなわち法王制ローマが、南の王―無神論の国フランスによって致命的な傷を受けた、これが1798年に起こったできごとです。

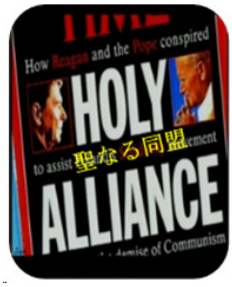
その後どうなるでしょう？　40節の後半にいきます。北の王は、戦車と騎兵と多くの船をもってつむじ風のように彼をせめ、国々に入って行ってみなぎりあふれ、通り過ぎるでしょう。

つまり40節の後半は、北の王が南の王に対して報復するできごとが描かれています。1798年以降、

フランスで生まれた無神論は共産主義となり世界へ広まっていきました。

無神論-共産主義の崩壊

1917年にロシヤ革命が興り、南の王という肩書は、ロシヤにバトンタッチされ、その後第二次世界大戦の後ソビエトユニオンに受け継がれていきました。この40節に出てくる南の王はソ連であります。北の王は法王制ローマが40節の前半で致命的な傷を負いますが、その傷を癒やしながらカムバックする最後の時代のローマとして再登場する、それが北の王だということです。そして南の王、ソ連に対して最後の時代のローマは報復するわけです。この40節を見ますと戦車と騎兵と船をもってと書かれています。これは聖書では軍事力を象徴しております。列王記の上1の5節、20章の1節を読むと分かりますが、聖書時代には、馬、馬が引く2輪車の戦車、騎兵などを用いて戦争が行われました。これは軍事力をあらわしています。船は経済力を象徴。詩篇107編23節あるいは、黙示録18章の17節を見ますと船はビジネスや貿易に使われました。つまり最後の時代のローマは、軍事力、経済力を用いてソ連に対して報復をするということです。歴史ではヨーロッパの諸国フランスやイギリスの諸国は、法王制ローマに対して軍事力と経済力を提供してアリウス主義であった三つの国々をほろぼしました。



この40節後半によると、最後の時代のローマがソ連に対して戦うわけですが、軍事力と経済力を最後の時代のローマに提供した国は、どの国でしょうか。もちろんそれはアメリカです。両方の共通の目的は共産主義を倒すことでした。歴史でも分かりますように敵同士であったものが互いに協力して共通の目的を果たすのです。アメリカと法王制ローマは、敵同士でありました。アメリカはプロテスタントの国です。プロテスタントというのは、カトリックに対して対抗するという意味です。敵同士が手を組んで共産主義を倒す、このパターンがここで見られます。1984年にアメリカは初めてバチカンに大使を送りました。そしてその後ベルリンの壁の崩壊、これは大変大きな象徴的なできごとでした。やがてその後ソビエト連邦の崩壊にもつながっていきます。全世界が注目したベルリンの壁崩壊、そして共産主義の崩壊の始まりとなりました。この出来事は40節の後半に書かれています。

この預言は成就しました。今でもロシヤや中国では共産主義をかかげていますが、実態は昔の共産主義ではありません。敵どうしであったカトリック教会とプロテスタントのアメリカ政府が手を組んで共有している目的、共産主義を倒すということで一緒になしとげました。このパターンがここで見られます。

もうひとつのパターンは、歴史では初代キリスト教会と異教ローマ帝国が手を組んだ結果、新しい宗教が生まれたということを学びました。40節では、アメリカプロテスタントの国がカトリック教会と手を組んで真のプロテスタントではなく、背教のプロテスタントという新しい宗教がここで形成されました。黙示録16章の13節には偽預言者が登場します。これはアメリカを示していますが、このアメリカがカトリックと手を組んだ時から偽預言者として預言的な役を演じ始めたということです。

さらに黙示録の13章の11節では小羊のような二つの角を持った獣が登場しますが、これもアメリカを象徴しています。その二つの角は共和政体とプロテスタント主義を示しています。その獣が龍のようにものを言い始めたということもこの40節の後半で見られます。ダニエル書と黙示録はあくまでも一つであり、一つの書物であります。

黙示録の16章13節には、世の終わりのクライマックスに登場する神とその民に対する敵がしるされています。その敵は三人の役者、龍と獣と偽預言者、であると黙示録16章13節には書かれていますがその三人の役者も同じようにダニエル書に登場しないといけないということです。獣、法王制ローマは、北の王という名で11章の40節に登場しました。偽預言者のアメリカは40節ではまだ舞台裏です。世の終わりのローマに軍事力と経済力を提供し、サポート役として舞台裏におります。第2部ではいよいよステージに登場いたします。またもう一つの龍もいよいよステージに登場いたします。この第一部でたった一節、40節を勉強いたしましたが、この第一部が終わる前にここで一

つのおもしろい記事を紹介致したいと思います。

これはアメリカの有名な雑誌ニューズウイーク、12 月 25 日 1989 年に書かれた記事、タイトルは「つむじ風の日々」ですが、ここにはベルリンの壁崩壊までの過去一年間の記録が詳しく記されています。ポーランドから始まりハンガリー、チエコへ広まって行った反共産主義の運動、その速さとすさまじい勢いはまるで「つむじ風のようであった」とこの記事にかかれています。40 節の後半、北の王は南の王に攻めていきますが、「つむじ風のように彼を攻め」と書いてあります。同じ言葉「つむじ風」というふうにここに書かれています。何千年も前に書かれた預言、神は全てご存知でした。ほんとにすごいと思いませんか。さらに「つむじ風のように彼を攻め、国々に入って行って通りすぎるでしょう」。このスピードと勢いをここで表しております。

もう一つの雑誌、これはライフ誌です。これも同じく 1989 年の 12 月に出版されたものですが、タイトルは「ヨハネポーロ 2 世の勝利」です。そして「自由という時代の潮の流れは、東ヨーロッパの国々に入って行き、あふれ流れた。さらに自由は枯れ草を焼き尽くす炎のように通り過ぎた」と書かれています。先ほど読んだ 40 節の個所「つむじ風のように入って行ってみなぎり溢れ通り過ぎるでしょう」と、まったく同じ表現で書かれています。

たった 20 年前に終末に関する重要な預言が成就されました。これこそ現代の真理です。遠い未来や遠い過去でもない、今、我々にとって封じられていた預言が、神はこの世の中のメデイヤ，すなわち叫ぶ石を通してこの預言に記された出来事を我々に知らせようとしたわけです。言葉では言い表せないような素晴らしいことだと思います。さらに去年 11 月この出来事の 20 周期年をお祝いするために再び石が叫んでいました。

しかしセブンスデー教会は眠っているため、まだ理解できていない状態が今でも続いております。この出来事を理解していてもそれはどんな意味なのでしょうか。最後の時代のパターンは前に起こった各時代のパターンを繰り返しております。ノアの時代、キリストの時代、パイオニヤ時代のパターンを繰り返すのです。

このパイオニヤ時代に戻ります。

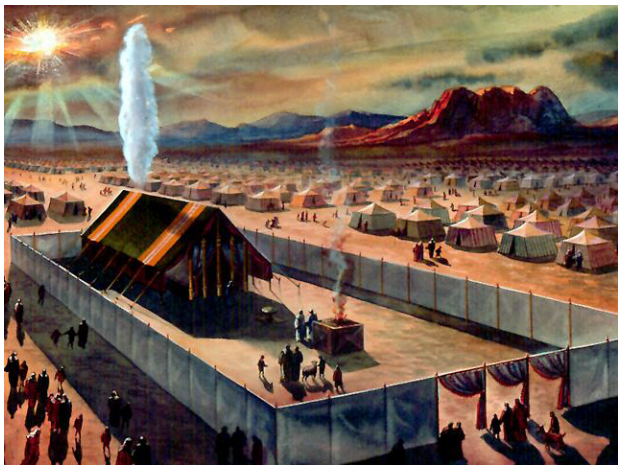
これは大争闘の下 23 ページから 24 ページをお読みになると詳しいことが書かれております。オスマン帝国の崩壊についてジョサイヤ・リッチという牧師は、黙示録 9 章の解釈を発行いたしました。1840 年 8 月中にオスマン帝国が崩壊するという預言が成就するということを発行致しました。その発行したのは 2 年前 1840 年前の 2 年前に発行したわけですけれども、この預言は、黙示録の 9 章 15 節、その時、その日、その年、という預言を 391 年と 15 日とジョサイヤリッチは計算しその預言が成就する少し前に 391 年と 15 日の期間は 1840 年の 8 月 11 日に終了すると発表したわけです。そのとおりトルコは大使を通じてヨーロッパのキリスト教諸国の支配の下に置かれました。その意味は預言の時は 1 年を 1 日と解釈する預言の解釈が認められた、というのがこの当時の預言の成就の意味でした。

この原則が認められたために、ミラーたちが述べ伝えていた第一天使のメッセージは更に力を増し、これまで講演会に数百人しか出席していなかった人々がこの後何千人も増えていったという歴史があります。そのパイオニヤ時代のパターンの繰り返しとして我々は、この終わりの時代にダニエル書 11 章の 40 節が示している深い意味があります。オスマン帝国の崩壊と同じように、ソビエト帝国の崩壊の預言が成就したというのは、神の計画、神の意図ではないでしょうか。終わりの時代に三天使のメッセージが力を増し最後の再臨運動がさらに勢いよく促進されるようにお与えになった個所がこのダニエル書 11 章 40 節後半だということです。もちろんオスマン帝国の崩壊の時のように、我々は前もって預言するということは神はゆるされませんでした。この 11 章 40 節は成就するまで神は封じておられました。しかし、20 年以上も経った現代、終りの時がもう既に来ているのです。パイオニヤ時代には 1798 年が終わりの時でした。パターンと同じように現在の我々にとっては、ソビエト帝国の崩壊が終わりでありますよ、という預言の成就のしるしであるということを神は我々にお示しになりたかったのではないでしょうか。これがダニエル書 11 章 40 節の深い意味です。これを悟らないといけないということです。再臨までの時はほんとうに近い、我々が思っている以上に近いですよということです。今我々は聖書のあちこちを探り調べ知識をパイオニヤ時代の人々のように探り調べ、ダニエル書 11 章の終りの 6 節を理解しないといけませんよというメッセージが 40 節にふくまれています。たったの一節ですが約、二百年もの歴史の流れ、預言が詰まっています。なんとすばらしい光でしょうか。

セブンスデー・アドベンチストの存在理由
―最後の贖い―

Amazing Facts　リバイバルスピーカー デニス・プリビーの講演より
井上 千里 訳

シナイの荒野において、奴隷から解放された一団のために、神様は独自のプログラムを始められました。それは聖所の制度と呼ばれ、イスラエルの人々に、神様が罪や罪人に対してどのように関わるのかということを教えるために考案されたものでした。けれどもこの聖所は、天にある本物の聖所と比べると子供の模型のようなものでした。ヘブル書を通して、天の聖所がどのようなものであるのかを僅かに垣間見ることができます。そしてヘブル書９：２３、２４でその中心点に至ります。「このように天にあるもののひな型は、これらのものできよめられる必要があるが、天にあるものは、これらより更にすぐれたいけにえできよめられねばならない。ところが、キリストは、ほんものの模型にすぎない手で造った聖所にはいらないで、上なる天にはいり、今やわたしたちのために、神のみまえに出てくださったのである」。



地上の聖所は、特定の動物の血によって罪から清められましたが、天の聖所は、キリストの贖いによって清められ、罪人のためのキリストの働きが中心になっています。私たちに必要なのは、今、この天の聖所で何が起こっていて、私たちとどのような関係があるのかという事を学ぶことです。この宇宙の王の前で、全ての天使が仕えている天の聖所が本当はどのようなものであるのか、私たちのだれもが全く考えも及ばないことだと思います。地上の聖所は、天の本物の聖所で、神様が罪や罪人をどのように扱われるのかということを、ただ実例によって教えるためのものでした。この地球の歴史、また将来に関する重要な事柄の全てが聖所に啓示されていると言っても決して過言ではありません。それと同じように真実な事は、何がアドベンチストをユニークな存在とし、そしてこの地球の歴史の中でどのような役割を果たすのかというアドベンチストの存在理由も、聖所の中心思想であるのです。

最後の贖い

人類のあけぼの上 422 ～ 423 ページに重要なことが述べられています：

「キリストの血は悔い改めた罪人を律法の宣告か

ら解放したが、しかし、それは罪を消し去るものではなかった。罪は最終的な贖罪の日まで、聖所の記録に残るのである」。

殆どのクリスチャンは、罪が許された瞬間、同時にその罪は消されてしまうと信じています。けれども聖所は、罪人が罪悪感や有罪宣告から解放されている間、罪の記録はただちに聖所に移され、「最後の贖い」と呼ばれる時が来るまでそこに留まっていると教えています。それは、罪人が律法の宣告から解放されたとしても、罪自体は、そのように簡単には処分されることができないということです。本質的にイエス様は私たちの罪の責任を取ってこられました。つまり聖なる神の律法が破られ、イエス様はそのために死んでくださいました。けれどもこれは罪の問題に対しての解決が終わったのではありません。

「この時、真に悔い改めたすべての者の罪は、キリストの贖罪の血によって天の書物から消される。こうして聖所から罪の記録が除かれ、きよめられるのである。象徴においては、この大いなる贖罪のみわざ、つまり罪を消し去ることは、贖罪の日のつとめによってあらわされた。すなわち、地上の聖所を汚していた罪を除いてきよめることは、罪祭の血によってなしとげられた」。

約2000年前、犠牲の贖い（十字架）が成されたことを、私は心の底から感謝しています。それがなかったならば、罪の許し、救い、そして永遠の命もなかったからです。けれども贖罪のプロセス（過程）は犠牲の贖いで終わったのではありません。まだ成し遂げられていない事があるのです。それは旧約聖書では「贖罪の日」、またホワイト夫人が「最後の贖い」または「特別の贖い」と言っているものです。これらの概念が明確に理解できないならば、なぜセブンスデー・アドベンチスト教会が存在しているのかということを理解することはできません。よく考えてみてください、この教会が存在するまでの約1800年間も犠牲の贖いは世界中に伝えられてきました。なぜセブンスデー・アドベンチスト教会が起こされたのかというのは、最後の贖いが始まったからなのです。私たちがこの最後の贖いという概念を見失ってしまっている間、もっぱら犠牲の贖いに焦点を置く一般キリスト教会に加わることは魅力的なことのように思えます。けれども犠牲の贖いがずっと伝えられてきたように、最後の贖いも人々に伝えられ、理解されるべき重要な事柄なのです。この最後の贖いなしには、つまり犠牲の贖いだけでは、罪と罪人に対する贖いを完成させることはできません。このキリストの贖罪の二段階は、宇宙から最終的に罪を取り除くためには両方が重要不可欠です。

最後の贖いは、天にあるすべての罪の記録の除去に関することですが、罪は、最後の贖いの間にとても重要なことが起こるまで、記録に留まっていなければなりません。一年に一度、贖いの日の間、イスラエルの人々は、宇宙が永久に罪や罪人からきよめられる時、つまりキリストとサタンの大争闘が終結するこの日を待ちわびていました。今、私たちは地球歴史の最後の時代、最終的に罪が根絶される時に来ています。

今、天の聖所で何が起こっているのかということに私たちの思いを向けることができるように、ホワイト夫人は次の言葉を書いています。

「**このメッセージを信じるすべてのものの心は至聖所に向けられる**。イエスはそこで箱の前に立って恵みがなお与えられているすべての人々と、知らずして神の戒めを破った人々のために最後の仲保をしておられるのである」（初代文集414）。

「今、キリストは天の聖所におられる。そして何をしておられるのであろうか。われわれのための贖いの働き、人々の罪から聖所をきよめる働きををしておられる。それゆえ、われわれは信仰によって彼と共に聖所に入らなければならない。われわれの魂の中の聖所の働きからはじめられなければならない。」（Manuscript 8,1888）。

キリストの最終的な仲保の働きは 「贖いをする」と呼ばれ、すべての罪から聖所をきよめることに関してですが、覚えていただきたいことは、最後の贖いと私たちとの関係は、私たち自身の魂

をきよめる働きを伴うということです。

「贖い（atonement）」という言葉は、ひとつになる（at-one-ment）という意味があり、それらの単語が組み合わされたものから来ているというのは意義深いことです。それは離れていたものをまたひとつにする、裂かれていた者との結合を回復するということです。十字架上でイエス様は、このひとつになる（at-one-ment）ことの土台を築かれました。なぜなら十字架なしに和解は不可能だったからです。けれども、まだ聖なる神様と堕落した人類の間の完全な一致をもたらすための何かが完了していません。

私たちは「最後の贖い」という言葉に、何らかの恐れを感じるようになってしまいました。なぜなら十字架の栄光や完結を損なうという非難の声が聞こえてくるからです。ここで私たちが明確にしておかなければならないことは、最後の贖いは、新しい犠牲のことではなく、また、キリストの犠牲が十分でなかったという意味でもありません。キリストの犠牲は十分かつ完全でした。それはもちろん決して再び起こることではありません。けれども贖いのプロセスが、十字架での批准では完了していないということです。大争闘における重要なことはまだ決定されていません。罪の記録は未だに天の聖所に留まっています。完全な一致はまだ完了していません。

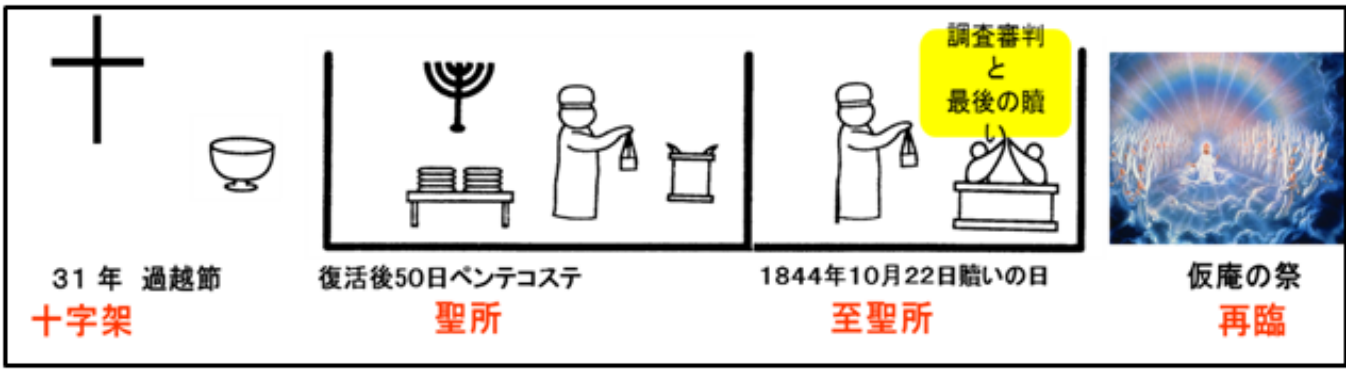
この「最後の贖い」は、アドベンチスト教会がキリスト教神学に貢献したただ一つのものと言っても過言ではありません。その他の教えのすべては、教会の伝統や誤りによって埋もれてしまっていたものを取り戻したにすぎないのです。今、私たちはこの独自の教えを恥じるようになってしまったのでしょうか。現在多くの人々が、神の民はキリストの御再臨まで罪のない状態になることはないと信じています。けれどもこの教えの結果は、天の聖所の清めという教理を投げ捨て、至聖所における最後の贖いを拒否し、１４万４千人の心の内におこる特別な印の重要性を取り除いてしまうという結果になるのです。私たちはかつてなかったほどに最後の贖いということに思いを集中させる必要があります。

過去の教会指導者からの声

１９世紀の前半、Ｍ．Ｌ．アンドレアセンは多くの書物を書きましたが、以下の記事はその中の一つである「聖所の奉仕」を参考にしています。引用文は記載がない限り 299 ～ 321 ページからのものです：

> 「福音は人の内に、人のために何ができるかという最終的デモンストレーションはこれからなされる。キリストはその方法を示された。彼は人間の肉体を取り、その肉体にあって神の力をデモンストレーションされた。人々は彼の模範に倣い、神がキリストになされた事は、すべての人類が神に屈服する時に成すことができるということを証明した。世界はこのデモンストレーションを待望している（ローマ８:１９）。これが成し遂げられる時、終わりが来るのである。神はご計画を成就される。彼は、彼御自身は正しく、サタンは偽り者であることを示される。神の統治は擁護される。」

現在、神の統治権は、キリストの受肉という絶大なことが成し遂げられたにもかかわらず完全に擁護されていません。キリストの内に福音の完全な力を見ました。けれども罪深い人間の内にはまだその力が見られません。福音の力はまだ完全にデモンストレーションされていません。私たちは、クリスチャンの歴史において、忠実な人々の内に



この力をかすかに見たにすぎません。この宇宙は、人間の心の中の完全な恵みの力をまだ見ていません。福音、つまり救いの御計画が完全にデモンストレーションされた時、それから、そしてそれだけが、神の統治権がサタンの譴責から完全に擁護され、確立されることができるのです。

完全な回復が福音

「救いの計画は、罪のゆるしだけではなく、完全な回復を伴うことが必要不可欠である。罪からの救いは、罪のゆるし以上のものである。なぜならゆるしというのは、罪の存在、そして戒めを破るという条件があることが前提になるが、清めは罪からの離別、そして罪の力からの解放、勝利を示す。ゆるしは罪の結果を無効にする手段であるが、清めは完全な勝利のための力を回復するということである。」

愛と恵みのすべてであるゆるしというのは、ただ私たちの過去の罪の結果に対処する方法にすぎないということを理解しているでしょうか。それは神のみ前に潔白な者として立つことができるために罪や罪悪感を取り除きます。けれどもこのゆるしによって私たちの心が根本的に変化しているでしょうか、また私たちの好ましくない習慣やライフスタイルが変えられているでしょうか。神様に対するサタンの最大の主張は次のようなものです。「神よ、確かにあなたは罪人をおゆるしになることができます。そしてこのように言われます。『これ以上あなたに責任を負わせない。イエスがあなたの身代わりになって死んだ。あなたはもう罪人ではない』と。一体これの何が公平なんですか？！

それならなぜ私をゆるしてくださらないのですか？私は以前、天での地位をもう一度戻して欲しいと申し上げました。もしあなたがこんなに恐ろしいことをしてきた罪人をゆるしてあなたの家族に受け入れたのでしたら私もそうしてください！そうしたらまた天に帰れるのですから！」

神様は、このようなサタンの言い分を簡単に払いのける事はできません。なぜ神様はただ単に人々の罪をゆるし、天国に連れて行かないのでしょうか。なぜなら救いとは罪のゆるし以上の意味があるからです。神に反抗心を持っていた古い人は、愛し与える心を持つ新しい人に変えられ、自己愛は自己否定と自己犠牲、そして隣人を愛する心に変えられなければならないのです。その時にはじめて神の恵みと義が明らかにされるのです。**つまり福音というのは、ゆるしときよめです。**

「したがって、この地上に最後の世代の人々が存在することになる。**彼らを通して神が何をなさることができるのかという最後のデモンストレーション**をなさる。神は、祖先の罪を身に負っている弱い者の中の最も弱い者を用いられ、そして神の力を彼らの中に現される。彼らはあらゆる誘惑にさらされる。けれどもそれに屈することはない。彼らは世が期待し、そして神が用意を整えてこられた本当の証明、つまり罪のない生活をすることが可能だということを証明する。福音が本当に人をきわみまで救うことができるということが、すべての人々に明らかになる。神の言われることが真実であることが証明される」。

神様が真実なお方であることが証明されるのは、神様が罪人をおゆるしになる時でしょうか。又は、神様のゆるしが罪の勝利をもたらすということが明らかにされる時でしょうか。それは一番弱い者に罪の勝利をもたらすことができた神のゆるしは適切なものだったと明らかにされる時であり、そしてその時に、神様のデモンストレーションは効果のあるものになるのです。わずかな信仰の英雄が存在しているこの世にあって、私たちは何も特別なものを持っていないただのクリスチャンで、まさに弱い者の中の最も弱い者です。

「この地上に住む最後の世代の人々の内に聖化の神の力が完全に現れる。そしてこの神の力によるデモンストレーションが、神の正当性を証明する。サタンが神に対してなしてきたすべての譴責から神は潔白になる。最後の世代を通して神は擁護され、サタンは敗北する。」

神の御品性の擁護は どのように？

さて、ここからは最後の贖いの中心点です。サタンは、神様が罪人を喜んでゆるされ、あわれみ深いお方ではあるけれども、結局それは律法は守れないものだと神様御自身が認めている事になり、律法を無効にしている。そしてこれからも、神様は戒めを犯す罪人をただゆるし続けるだけだと

ずっと論じてきました。サタンは言います。「神様、あなたの戒めはそのままで結構ですが、だれも天国に入れないか、又は、あなたのあわれみによってすべての人が天国へ行けるようにしてください。それはもちろん私を含めてです。恵みと戒めの両方はお持ちになれません。それらは一致しません。あなたは恵みまたは義のどちらかをお選びください。両方を同時に保つことはできません！」 安全で調和のある宇宙を永遠に保つために、正義とあわれみは一致し、恵みと戒めも互いに口づけし、共に相働くということを立証することは、神にとってたやすいことではないということを理解することは重要です。反逆しただれかが、いつかどこかで再び罪を試みるかもしれないおそれから、ゆるしと恵みは宇宙を守ることになるということをどのようにして宇宙の者たちに納得させることができるのでしょうか。神の被造物が再び同じことを繰り返し、おそらく将来それが数え切れない程であっても、神様は再びゆるしを与えなければならないことになるのでしょうか。

神のゆるしの中には、またそれ自体は、神の御品性を決して擁護することはできません。なぜならそれは、神は愛とあわれみのお方であるということだけを示すにすぎないからです。ゆるしは、私たちを罪の奴隷から解放するプロセスの丁度中間地点であり、本当の解放は、ここではまだ可能性の段階であるのです。もし神のゆるしの恵みを、罪に勝利できる力を与えてくださる恵みに変えられるならば、ゆるしの恵みが不要になる時が来るのです。

> 「神の恵みを通して、人々は神のご性質にあずかる者となる. . . 我々に勝利を与えてくださるのは神である」(letter44,1903)。

罪に勝利するための恵みはゆるしの恵みの必要性を取り除き、そして神様は罪人を愛するだけでなく、彼らを全く変えることができるということを証明できます。そして彼らが完全に変えられた時に、再び罪を試みるのではないかと恐れることなく、罪のない世界に安心して入れることができるのです。

実際問題として、神様が罪人をおゆるしになることによって、御自身を大変な危険の中に置かれたことになります。なぜなら私たちが、同じ事を何度も何度も繰り返すときに、神様は数え切れないほどゆるし続けなければならず、事実上、神の戒めに服従することは全く不可能に見え、この宇宙は、罪の致命的な影響から完璧に安全になることはないのです。けれども、もしきよい完全な環境の中にいる天使ではなく、また、エノク、ヨハネ、パウロだけでもなく、サタンの支配している世で生活しなければならず、罪によって堕落した性質を受け継ぎ、生きている間中、悪習慣に悩まされ、苦しめられ、何も優れたものを持っていないただの罪人が、ゆるしの恵みの必要性がなくなり、罪に勝利するための恵みに変えることができる時、サタンの次の言葉が誤りであることを立証することができるのです。「神よ、あなたは彼らの罪をゆるすことはできます。けれども彼らが罪を犯し続けることに対しては何もおできになりません。彼らはこれからもあなたに不服従を続けることでしょう！」

恵みと戒めが一致し、あわれみと義が相働くことが証明される時、神の統治と、彼の救いのご計画は擁護されますが、ここで重要なことは、ゆるしの恵みは永久に終わり、罪に勝利するための恵みに変えられた時に、**神の救いの計画は成立した**、ということを全宇宙がはっきりと知る時が必ず来なければならないということです。それを明らかに示すことのできるただ一つの方法は、イエスの仲保の働きが終了する恩恵期間終了後の神の民のためのある一定の期間に、罪に勝利する恵みが神の民を完全に支配する時にどのようなことが起こるのかということを、宇宙が目撃しなければなりません。ゆるしの恵みはもうありません。宇宙のすべての住民が、われわれの大祭司がその役目を永遠に終わり退かれるのを見ます。大祭司の仕事を終えられたしるしとして、ゆるしの香炉を投げ落とされるのを見ます。そして彼らは天からの罪に勝利するための恵みのみの時に、人々がどのようになるのかを見ます。神様は宇宙に再び罪が入ってくることがないように御自分の務めを安全に終わらせたでしょうか。これらのデモンストレーションは、このように劇的でそして全宇宙が理解しなければならないものなのです。今日、私たちは、まだゆるしの恵みと、罪に勝利するための恵みも共に効果のある時に生活しています。けれどもこの世代は終わり、デモンストレーションは必ずな

されなければならないのです。そしてこれが最後の贖いということなのです。

「神がこの世代になそうとしておられるデモンストレーションは、人々と神の両方にとって大きな意味がある。神の律法は本当に守れるものなのであろうか。これは大変重要な問題である。多くの人はそれが可能であることを否定する。また他の人々は、真の意味を考えずに可能であると言う。律法遵守に関するすべてを考慮する時に、それは広い分野に及ぶことがわかる。神の戒めは心の中の思いや意図までも測られるきわめて広範囲なものである。それは行いと同じようにその動機、言葉と同じように思考まで審査されるのである。律法を守るというのは完全な聖化、つまり清められた生活、正しいことに対する不動の忠誠、罪から完全に離れ勝利するということである。当然、ここで多くの死すべき人間は大声で叫ぶ。『だれがこれに値するのか！』と。しかしながら、律法を守ることのできる人を作るのは、神が御自分の仕事として定めておられ、それを当然なさるおつもりでいらっしゃるのである。サタンによる挑戦の言葉が申し立てられる。『だれも律法を守ることはできない、それは不可能だ、もしできる人がいるのなら見せたまえ。いったい戒めを守ることのできる人はどこにいるというのだ！』そこで神は静かに答えられる、『ここにいる』と。『ここに、神の戒めを守り、**イエスの信仰**を持ちつづける聖徒の忍耐がある』（黙示録14:12下線部英文訳）。」

この時点に至るまで、神様はこの答えをサタンに言うことはできません。つまり最後の贖いが完全に成し終えるまでは、この答えを言うことはできないのです。都合のよいときだけ戒めに従うのではなく、いかなる状況の時でも常に戒めに服従する完全な最後の世代ができるのです。戒めを守るというのは、外面的な行いだけではなく、動機、感情という心の中のすべてに及びます。これは堕落した性質と弱められた意思を受け継いでいる人間には全く不可能なことです。けれどもこれは神様のなさる事で、神様だけがそれをなさる事ができるのです。私たちに必要なのは、喜んでこの偉大なデモンストレーションのためのパートナーになることです。私たちは神様がなさろうとしておられる働きを、障壁を設けたり、合理化（ここではそれ自体間違っていることに良い理由や目的を適用しようとすること）によって阻止することがないようにしなければなりません。

「神が人間に律法を守るように命じられた時、それが守れるということを示すことができるわずかな人がいればよいと神が考えられたのでは目的に適っていない。偉大な目標を持ち、強靭なトレーニングを積んだきわめて立派な人々だけを通して神は何がおできになるかというデモンストレーションをなさるのは、神の御品性には一致しない。神の御計画のために求められることは、弱い者の中の最も弱い者たちでも失敗することがないという事の方が（神の御品性に）調和しており、それゆえに、神の要求されることは、ほんの少数の人にしかできない事だとだれも決して言うことはできない。このような理由でこの偉大なデモンストレーションを最後の世代まで保留しておられるのである。この世代は、積もり積もった罪の影響を背負っている。弱い者は誰かといったらそれは彼らである。誰が遺伝的な罪の性質を受け継ぎ苦しんでいるかといったらそれは彼らである。あらゆる種類の弱さを受け継いでいるのはまさしく彼らである。それゆえ彼らが戒めを守ることができるのなら、どの世代の人々も、それは不可能だと言い訳をすることはできない」。

私たちの世代はテクノロジーが進歩し、知的で洗練されているとだれもが考えています。けれども、この文明社会を表面的に覆っているものを少し取り除いて見るときに、顔をそむけたくなるような現実に直面しなければなりません。そこには増し加わる怒りと暴力、貪欲、冷淡、快楽の追求、不道徳、そして人類の歴史が始まって以来なかったほどの利己主義が見られます。私たちの心も、一番暗かった暗黒時代にも増して様々な惑わしによって曇らされています。私たちはまさに弱い者の中の最も弱い者です。神様はこのような全く見込みがないように見えるこの世代をお用いになって証明をなさるだけではなく、外見上は不可能に見える人々に働かれることはこの上ない喜びなのです。

「神は挑戦に用意ができている。彼はこの時を待ってこられた。最高の展示(公開)は、最後の戦いまで保留しておられる。最終世代の中から、神は彼の民を抜てきする。強くも有能でもなく、栄誉も富もなく、賢さも才能もない平凡な人々を通して神のデモンストレーションがなされる。サタンは、従来神に仕えてきた人々を神が特別に保護してこられたので、彼らに自由に近づくことができず、また彼らは報酬目当ての動機で仕えてき

たのだと主張する。もし、彼らを自由に攻撃できる許可が得られていたならば自分は彼らに勝てたであろう。けれど神は恐れてそうはさせてくれないだろうと訴える。『でも神よ、公平な機会を与えたまえ、そうすれば私は勝てるであろう！』とサタンは言う。このようなサタンの言い分を永遠に鎮めるためには、神の民が神に仕えるのは、報酬に関係なく、不正と独断の告発から神のみ名と御品性を潔白にしたいという、正しい動機と忠誠からであり、最大の失意と逆境の中にあっても、一番弱い人間によって神の戒めを守ることができることを天使と人々に証明することによってである。神はサタンに、最後の世代の人々に、究極の試みが臨むことを許される。彼らは脅迫され、苦しめられ、迫害される。そして獣とその像とを拝む法令が出されることによって生命の危機に直面する（黙示録13:25）。けれども彼らは屈しない。彼らは罪を犯すよりは、喜んで死を選ぶ。神は御自身を隠される。天の聖所は閉じられた。聖徒は日夜神の救出を呼び求める。しかし神にはその声が聞こえていないように見える。神の選ばれた民は、ゲッセマネを通過する。彼らはキリストの十字架上での最後の3時間を僅かに味わう。彼らはたった一人でその戦いを戦わなければならないように思える。彼らは仲保者なしで聖なる神の御前で生きなければならない。しかし、キリストはとりなしの働きを終えられたが、聖徒は未だ神の愛と保護の対象である。聖天使は彼らを見守っている。神は敵からの隠れ家を与えられる。彼らは食物を与えられ保護されきよい生活のための恵みと力を供給される（詩篇91編）。しかし、彼らはまだこの世にいる。まだ誘惑され、苦しめられ。悩まされる。」

私たちは、天国という報酬を得たいためではなく、神の御品性を擁護することが何よりも重要であるがゆえに服従するという気持を持っているでしょうか。これがモーセの歌と子羊の歌なのです。モーセとキリストは神様を心から愛し、彼ら自身の将来よりも、大争闘における神の勝利を何よりも気遣い憂慮していたからこそ神に仕え服従したのです。神のみ名以外、彼らにとって何も重要なものはありませんでした。私たちもその歌を学ぶ必要があります。私たちは天国という報酬に関係なく神様にお仕えします。私たちが服従するのは、ただ天国に行きたいためではありません。神に敵する者が持ち込んだ不正と独断の告発から神のみ名と御品性を潔白にしたいからなのです。それゆえに、神様はサタンに、強力で圧倒的な惑わしと、最大限の圧力で神の民を苦しめ迫害することができる自由を与えられるのです。神様がサタンに与えた制限や束縛が不公平だというサタンの訴えは二度とできなくなるのです。サタンは力の及ぶ限り、あらゆる方向から、あらゆる手段と惑わしと脅迫を用いて、神は約束を果たせないということを証明しようとするのです。

「彼らはこのテストに堅く立つであろうか。人間の目からみたら全く不可能のようである。ただ神が助けに来てくだされば すべては解決するだろう。けれども彼らは悪に抵抗することを心に定めている。必要ならば死もいとわないが、罪に屈することはない。サタンは力がなく、彼らに罪を犯させることはできない。彼は誘惑し、欺き、脅迫する。けれども強要することはできない。そしてこの時、一番弱い者を通してなされた神のデモンストレーションによってだれも罪の言い訳はなくなる。もし、最後の世代にいる人々が、ありとあらゆる不利な条件を背負い、そして聖所が閉じられても、サタンの攻撃を確かに撃退できたのなら、人間が罪を犯すことに、何の口実がありえようか？」

このような理由で、この地上の歴史が終わる前に、天の聖所でのキリストのゆるしの奉仕は、終わらなければならないのです。サタンの最後の最大の攻撃と、キリストのゆるしの恵みの選択がなくなった後の、罪に勝利する力を与えてくださる恵みは、必ず同時におこらなければなりません。福音は本当に効果があるのでしょうか。神の恵みはサタンの惑わしよりももっと力強いものでしょうか。宇宙の将来は反逆者から安全になったでしょうか。

「宇宙において最高に重要なことーそれは重要に思えないが一人間の救いではない。最も重要なことは、サタンによってなされてきた偽りの譴責から神のみ名を潔白にすることである。大争闘は終わろうとしている。神は最後の戦いに、ご自分の民を用意しておられる。サタンも用意している。我々の前に置かれている問題は、神の民の生き方にかかっている。神はヨブにそうであったように、我々に依存しておられるのである。神のこの信頼は、確かなところに置かれているであろうか。神のための証し人になるということを許されていることはすばらしいことである。決して忘れてはならないことは、この証は我々の生き様であって言葉だけではない。キリストの人生が光であったように、我々の人生も光でなければならな

い。人々に光を与えるということは、ただトラクトを手渡す以上のことである。我々の生活が光である。我々の生き方によって、他の人々に光を与える。この生きた光なしに、言葉だけでは何も意味がない。しかし我々の生き方が光になる時、我々の言葉は効果のあるものとなる。我々の人生は神のための証でなければならない。」

最終時代において唯一の重要なことは、神のみ名です。これが地上歴史の最後に生きる人々の動機の要因なのです。私たちの任務は、サタンの偽りの譴責を永遠に終わらせることですが、これができるただ一つの方法は、私たちの人生を完全に神の力に明け渡すこと、つまり全的な降伏です。私たちの言葉に何か意味があるのかということを証することができるのは、私たちの生き方です。私たちの言葉と生活が一致する時、私たちの証は効果があるものとなるのです。

「これらすべてのことが贖いの日の働きと密接な関係があるのである。贖いの日に、昔のイスラエルは、罪を告白し、完全にきよめられた。彼らはすでにゆるされてはいた。今や彼らは罪から解放されていた。彼らは清く非の打ちどころのない者となっていた。イスラエルのキャンプは清くなっていた。我々は今、聖所の清めの大いなる実体の時に生存している。すべての罪は、告白と悔い改めによって、信仰によって先立って裁きの座に行かなければならない。大祭司が至聖所におられるのであるから、神の民は、今、顔と顔とを合わせて神の前に立つのである。彼らのすべての罪は告白されており、悪のしみは残されていないということを知る必要がある。天の聖所の清めは、地上の神の民の清めにかかっている。それならば、神の民が清く、責められることのない状態になるということはなんと重要なことであろう！彼らの中にあるすべての罪は焼き尽くされていなければならない。それによって彼らは、聖なる神の御前で焼き尽くされる事なく立つことが出来、滅ぼし尽くす炎の中でも生きるのである。」

天の聖所の清めと地上の神の民の清め

私たちは、１８４４年以降、天の聖所でのキリストの働き、アドベンチストの先駆者たちが築いたその預言的な証拠を何度も学んできたかもしれません。けれども、**天の聖所の清めと同時に行われる私たちの心の清めの働きについては殆ど聞かれなくなってしまいました**。おそらくアンデレアセン長老の最も大切な訴えは、次の言葉だと思います：

「天の聖所の清めは、地上の神の民の清めにかかっている。」321

私たちの心が罪から清められなければ、天の聖所も清めることができない？その通りなのです！

私とあなたの心の最後の贖いの働きが完了するまでは、天の神の聖所の大いなる清めは完了することができないのです。私の心にある罪の泉から湧き出るものがあり、ゆるしを絶えず必要としている限りイエス様はあわれみのゆえに天の聖所に留まり、ゆるしの恵みを注ぐ働きを続けなければならないのです。一人でも滅びることなく、すべての人が悔い改めに導かれるように望まれるイエス様は長く忍耐されます。けれどもこの意味は、神の民が神のゆるしの恵みが不要になり、罪に勝利する恵みを受ける用意ができるまで神の御計画を遅らせなければならないということです。私たちの心から、罪の流れを止めることができると最後の贖いが示す時だけ、神様は天の聖所から私たちの罪を正当に取り除くことができるのです。私の心から継続的に流れ出てくる罪のためにゆるしが必要であるのに、聖所は清められ、天のすべての罪の記録を除去するということを、神様は何の目的があってなさるでしょうか。そしてサタンは、神ができることのすべては、ただ罪をゆるし続けるだけで、人間の心からすべての罪をきよめることは不可能であり、やはり彼の言い分は正しいのだと誇らしげに言うでしょう。けれども、もし心の聖所の源泉がきよめられ、反逆と利己心がこれ以上流れ出ることがなくなった時、天の聖所は効果的、合法的に清められることができるのです。ただこの方法だけが、サタンの言い分に対しての有効な答えなのです。罪に勝利する力を与えてくださる恵みは、ゆるしの恵みの必要性を取り除きます。これは神様がはるか遠く離れた聖所で勝手になさっている働きではなく、恵みによって救われた罪人の心の中で、神様がなしてくださることなのです。そしてこの方法によってのみ大争闘を終結させることができ、罪の問題に対処する神の方法の正当性が証明されます。ホワイト夫人はこれらのことをとても簡潔に述べています。

「キリストの天における聖所のきよめと調和して、この地上においての魂のきよめがなされなければならない」(Maranatha249)。

さて、では最後の贖いとは何でしょうか。神様がゆるしの恵みを罪に勝利する力を与えてくださる恵みに替えてくださると同時に起こる天の聖所におけるキリストの恵みの奉仕です。それは一つになる（at-one-ment）ことの神の最終的な方法です。私は聖霊によって保つことができる神との持続的なつながりを時々さえぎってしまい、この宇宙はまだ安全なところにはなっていません。キリストは一致（at-one-ment）のプロセスが完全になされることをデモンストレーションされなければなりません。これはただ単に神様が、「この人の罪を消した」と宣言することではなく、サタンが絶対に起こり得ないと言っている驚くべきことをデモンストレーションされるのです。最後の贖いは、これ以上ゆるしを必要としない罪に勝利する力が私たちの人生にあらわされるキリストの血による奉仕なのです。

贖いの日

これらのすべてのことは、旧約聖書に書かれている贖いの日の間のできごとの予型です。「これは、あなたがたが永久に守るべき定めである。すなわち七月になって、その月の十日にあなたがたは魂を悩まし何の仕事もしてはならない。この国に生まれた者も、あなたがたのうちに宿っている寄留者もそうしなければならない。この日にあなたがたのため、あなたがたを清めるために贖いがなされ、あなたがたは、主の前にもろもろの罪が清められるからである。これはあなたがたの全き休みの安息日であって、あなたがたは、魂を悩まさなければならない。これは永久に守るべき定めである」（レビ記 16:29 ～ 31 下線部英文訳）。私たちはこの日の本当の意味を理解しているでしょうか。一年を通じて贖いの犠牲、つまりゆるしがなされてきました。けれどもこの日は何か違いました。それは「主の前にもろもろの罪がきよめられる」という最終的な結果を伴う日でした。特に注目すべき事は、この特別な日の民の態度は、彼らの魂を悩ますことでした。これはまだ勝利のセレブレーションではなく、神の民にとってとても重大で厳粛な日だったのです。この旧約時代のできごとは、現在の私たちにとって何か教訓があるのでしょうか。

「われわれは大いなる贖いの日に生存している。現在、天の聖所で行われている神の民のためのキリストの神聖な働きは、われわれの絶えざる学びでなければならない。われわれの子供たちに、贖罪の日の型が何を示していたのか、それは神のみ前における大いなるへりくだりと罪の告白の期間であったということを教えなければならない。実体としての贖罪の日も、同じ性質のものである」(5T520)。

私たちは、この日の重要性を若者たちに教えているでしょうか。しばしばこのような質問に直面します。「なぜこんなことをするんだ？」「どうしてこれをしたらいけないんだ？」「これの何が悪い？」そして私たちは、幾つかの答えになるような聖句を見つけようと努力します。けれども私たちは今まで次のように言ったことがあるでしょうか。「これをするのは私たちが贖いの日に生活しているから」。決して忘れてはならないことは、この日は神のみ前に心からのへりくだりと罪の告白をする日であったということです。

「真理を信じると主張し、神の戒めを擁護し守る教会は、すべての不義から離れなければならない。教会員のひとりびとりは、悪を行い罪にふける誘惑を退けよう。教会は悔い改めと謙遜、深く心を探ることによって、神のみ前における清めの働きを始めよう。なぜならわれわれは贖罪の実体の日、つまり永遠の結果を伴う厳粛な日にいるからである」(2SM378)。

贖いの日というのは、清めに関してであり、すべての不義から離れることです。私はここで、神の民と称する人々が、かつてなかったほどの最高の標準に対する服従と忠誠を表すことを申し上げたいと思います。時に人々は、なぜセブンスデー・アドベンチストは、聖書に見られる標準よりもさらに高いもの、たとえば菜食主義や、ダンスや装身具を慎むこと、またアルコールの拒否などといったものを持っているのかと驚かれることがあります。これらは、ただ古い昔からの伝統で、このような時代遅れの標準は捨ててしまうべきでしょうか。事実を言うならば、聖書を注意深く調べるこ

とによって、神様が人間の無知や盲目のゆえにあわれみによってお許しになっている幾つかの事柄を見る事ができます。神様は、神の民に、理想のご意思を持っておられましたが、神の民が生活しているその時の状態に合わせておられました。簡単に言うならば、今日の私たちが受け入れ難いような事もお許しになっていたということです。

神様は、旧約聖書の時代、一夫多妻制度をお許しになるだけでなく、祝福さえなさいました。実際のところ、選ばれた国民の十二部族は、一夫多妻の婚姻によって構成されたものでした。また、同じ旧約聖書の時代、奴隷を使う事に対する許可と掟さえもお与えになっていました。今日、私たちの社会は、道徳的悪として奴隷制度を嫌悪していますが、イスラエルの人々は、日常的に奴隷を使っていました。また神様は、イスラエルの軍隊に血生臭い戦いに従事することを許されるばかりでなく、奨励しました。時には人間ばかりでなく家畜に至るまで完全に滅ぼす事をお命じになりました。もし、私たちがこれらの証拠となる聖句を見つけたいならば、簡単に見つけることができます。けれどもただひとつ私たちが知っていることは、聖書全体の原則を学ぶ事によって、特に新約聖書においては、これらの事は、神様の理想ではなかったということです。神様は、神の民を彼らの居る場所で用いられます。そして、少しずつ理想としているところまで導かれるのです。神の民が新しい真理を理解し、応答することができる時だけそれを示され従うように命じられます。現在、神のご意思が以前にも増して明らかにされているのを無視して、人間の心のかたくなさのゆえに神様が許可されていたことを基準にしようとすることははなはだしい誤りです。それゆえに、私たちは一夫多妻や奴隷制度、また戦争を正当化しようとは決して考えません。これらの理由から、神様がある場合においては、肉食、飲酒、ダンス、装身具等を身につけることなどを許される証拠となる聖句を見つけることができます。けれどもまた、これらの事は神様の理想ではなかったという証拠も見つけることができますが、しばしば人々が、教会が持っている基準に反した特定のことをしたいときにこれらの聖句を無視してしまうのです。

贖罪の日に住む
神の民の生き方

今日、私たちのライフスタイルを選択する原則となるものは、贖いの日の原則です。この一番重要な日々に生活している私たちは、何が許されているのかと問うのでしょうか。クリスチャンという名を保ち続けるために最小限にするべきことは何かと問うのでしょうか。私たちは、無知と未熟な信仰の古い時代に戻って、私たちの人生の在り方を決定するのでしょうか。それとも神の理想に到達するために自分にできる最大限のことは何かと問うているでしょうか。この罪の世界に生活していても、やがて神の完全な天で生活することができるように、今、自分のすべての能力を尽くしてそれに近く生活することを求めているでしょうか。

伝道の書３：１－４に重要なことが書かれています。

「天が下のすべての事には季節があり、すべてのわざには時がある。生るるに時があり、死ぬるに時があり、植えるに時があり、植えたものを抜くに時があり、殺すに時があり、いやすに時があり、こわすに時があり、建てるに時があり、泣くに時があり、笑うに時があり、悲しむに時があり、踊るに時があり、」

殺した時があり、こわした時がありましたが、今は、いやしと建て直しの時です。現在、神のみ名、そして彼の統治権などのすべてが危険にさらされているのに、私たちは笑って踊る時なのでしょうか。大争闘の終結が近づき、サタンによって持ち込まれてきた様々な偽りによって神が論駁されている時に、このような行動は適切でしょうか。ガラスの海の上で、楽しく笑いながら踊る事ができる時間は限りなくあることでしょう。けれどもそれは今ではありません。これはとても単純なことですが、われわれセブンスデー・アドベンチストにとって何が時機にかなった適切な事なのかということです。贖いの日は、罪を告白し、神のみ前に心を低くするという魂を悩ます時でした。笑いや踊りをするよりも霊的に悲しみ、泣くことの方がもっとふさわしい態度ではないでしょうか。私

たちはキリストの御再臨を100年以上も遅らせてきました。これが何か喜ぶべきことでしょうか。神様がお考えになっていた以上にこの地上の苦難の歴史を続けてきてしまいました。ラオデキヤの無気力、冷淡な状態によって、私たちは死の強制収容所におけるユダヤ人の大量虐殺に貢献してしまったことになるのです。これが本当に今、セレブレーションの時なのでしょうか。また、アドベンチストは世界中ですばらしい偉大な働きをしていると我々自身を賞賛し、また過去において教会が成し遂げてきた事を、自惚れて振り返るべき時なのでしょうか。それとも神の御計画を遅延させている者の一人としての責任を感じ、神のみ前に悲しむべき時でしょうか。

これらの問題に対して私たちの果たすべき役割は、自分を鞭打って苦行するような無益なことをすることではありません。それは、私たちの心が、すべての罪から本当に清められているのか確かめる時なのです。そして、神様が私たちを通して、神が統治されるというのはどのようなことなのかということをこの世に示す時なのです。私は決して陰気な顔つきをして生活する事を奨励しているのではなく、告白と悔い改めの時だと申し上げたいのです。もし私たちが、罪を深く悔い、神の御前に心を低くするならば、セブンスデー・アドベンチストとしてなすべきことを行っています。今は贖いの日です。私たちは、人類に対する神の理想のご意思を宇宙に証する神の最終的なデモンストレーションの一員です。私たちはこれらのことを理解し、これを若者たちに教えているでしょうか。表面的な答えはこれ以上通用しません。大争闘における神の最終的な勝利という本当の問題に向き合おうではありませんか。

われわれの存在理由

贖いの日、そして最後の贖いがセブンスデー・アドベンチストの存在理由です。神の恵みによって、如何なる時でも、疑いを抱かず、躊躇せず、そして言い訳や、合理化をしない神を完全に愛する人々を生じさせる事がデモンストレーションされる時まで神のみ名は危険にさらされています。彼らは、神がはじめに彼らを愛してくだっさたゆえにただ神を愛するのです。そしてその神の愛はいつでも服従を生み出し、この愛と服従が継続することを毅然と証明します。サタンは、完全な服従は不可能だという証拠として私たちの不服従を絶えず神の顔に投げつけています。けれどもこれは必ず最後が来なければならないのです。この最後の贖いは、サタンの偽りを破壊する神の方法です。はじめに神は、私たちの魂の宮を清められます。そしてそれから罪によって汚された天の宮を清められます。これが成し遂げられた時、アドベンチズムは「任務を終了」させ、皆そろって天に行くことができるのです。サタンはすべてのアドベンチストの心からこの概念を取り除くために激しい戦いをしています。なぜならもしサタンがこの概念を破壊することができるのなら、１５０年前に神がこの教会を立ち上げられたことを無効にすることができ、そしてキリストの御再臨を更に長引かせることができるのです。私たちは、サタンが相当な程度に成功してきたことを認めざるをえません。サタンはあなたの心の中で成功を収めるでしょうか？サタンはあなたの意識からこの概念を取り去ってしまうでしょうか？またはサタンの言葉―律法に服従しようとするな、それは律法主義だ、救いはイエスの十字架をただ信じさえすれば得られるのだ、なぜなら再臨の時に品性が変えられる―には耳を貸さず、最後の贖いをあなたの学びの中心とし、今からイエス様が再び来れらる時まで、あなたがなすすべてのことがこの概念の真髄に基づいたものになるでしょうか。

時に人々は、最後の悩みの時を恐れます。けれども、神様はその危機の時を信頼して通過させる人々を生じさせることが出来なければ、それを起こされることはありません。ところでなぜ、最近自然災害の頻度と激しさが増してきているのでしょうか。そうです。それは世の終わりの徴ですが、またそれは最後の世代の人々が出来上がりつつあるということなのです。あなたは今、あなたのすべてを神様に明け渡し、子羊の行く所はどこへでもついていくそのグループの一員になることを心から望んでいらっしゃいますか。

聖なる御言葉の歴史と移行

教会の中に背教？ 教会の背教？

Keep the Faith　ハル・メイヤー牧師

あなたは、もしイエス様が２千年前になさったように、今日の人々の間で歩まれるために来たなら、どういったことが起こるであろうかと考えたことがあるだろうか。彼は何を話されるだろうか。今日のSDA教会について、イエス様の時代にヘブルの教会にしたような同じようなことを語られるだろうか。彼は我々が天から是認されていると言われるであろうか。それとも、彼は我々が哀れでみじめで、貧しくて、盲目で裸であると言われるであろうか。黙示録３：17。

彼は巨大な組織や、クリスチャンテレビ番組、若者のロックコンサート、大教会、病院や学校のゆえに我々を褒めるであろうか。それとも教会を通じて御言葉から組織的に離反していることをごらんになって頭を横に振られるだろうか。彼は我々のバプテスマ数の多いことを褒めるであろうか。それともユダヤ人教会に言ったように「見よ、おまえたちの家は見捨てられてしまう」と言われるであろうか（マタイ23:38）。 このことは非常に重要な問題である。神は、神の教会が最終的に世に従うことを選ぶ出来事においてどうされるだろうか。この最終時代のご自身の民を清めるために何をなさるおつもりだろうか。神はご自分の真理の御言葉の保管所（教会）を地球にまだ持っておられるだろうか。

あなたは誰かが「セブンスデーの世界総会はいまや背教しているのでバビロンである、その上、もはや神の真理の保管所ではない。そして、今出てどこかへ行くべき時である」と言うのを聞いたことがあるだろうか。また次のような逆の考えを聞いたことがあるだろうか。「教会のことは心配しないで下さい。私達はただ、私達の指導者たちを信頼しなくてはいけない。神様が彼らと教会を守って下さる」。言い換えると、「沈黙を保ちなさい、誰のじゃまもしてはいけない。現状（体制）について行こう、神はご自身の御手の内にたずなを取られる。」聖書と証の書には後者について多くの例と訓戒があり、なぜ忠実な魂が公然とした罪と背信に抗議する声を上げるべきかを示している。

どのようにして教会が神の教会であることを知るか？

しかしどの様にしてSDA教会がまだ神の教会であるかを、そしてまだ聖なる御言葉の保管所であるかを知ることが出来るのだろうか。SDA教団の状況を理解する為に、我々は過去に戻って、その時に神がどの様に彼の教会に託された聖なる御言葉を扱われたかを再考しなくてはならない。

聖なる御言葉は、世代から世代へ伝えられた、神についての教義と解釈、目に見えない超自然の現実である。そしてそれらは続く各世代に霊的な導きとなるものを提供する。聖なる御言葉は、礼拝と信仰と日ごとの生活に助言を与えてくれるものである。さらに、未来の預言的啓示を与えてくれ、しばしば、人間と組織の性質を明らかにする。霊的活力は聖なる御言葉がどの様に取り扱われているかにかかっているのである。もしそれが尊ばれ守られているなら、そこに成長がある。もしそれが尊ばれずにいるなら、そこには霊的力の欠如がある。あなたは神が彼の残りの民に与えられた聖なる御言葉を尊ぶだろうか？

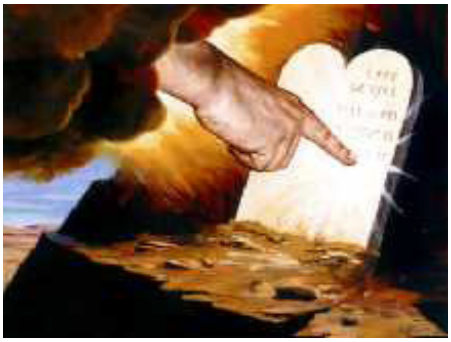
歴史上の全ての宗教は、独自の聖なる御言葉というものを持っている。異教の神の託宣は通例、神秘主義的な話や女神に関する伝説であった。これらの伝説は世の中についての彼ら自身の考えや、宇宙や目に見えないものを表現した。礼拝は儀式を中心とした礼拝―神をなだめるか、あるいは神々が礼拝者に迎合するような儀式に集中している。 神の託宣は紙面に書かれなくとも人々はうやうやしくみなし、従い、守った。異教の神の託宣は、真の神の礼拝とはまったく反対である。なぜなら、それらは単に人間の心の考えであるからである。神の教会を通して神の御言葉と接触したとき、彼らは争いと対決を起こした。ネロの時代のローマ人によるクリスチャンの迫害、パウロがエペソにいた時、エペソ人は彼に耳を傾けた。しかし異教の迷信によって利益を得ていた銀細工師はパウロの教えに脅えて騒動を起こした。彼らはダイアナ女神を含め彼らの異教神を守るために人々を奮起させた(使徒行伝 19 章参照)。

イスラムもまたコーランと呼ばれるイスラムの聖典を持っている。コーランはイスラムの人々の生活の手引きと礼拝に関わることを教えている。コーランもまた神の聖なる御言葉と対立する。またそれと接触したとき争いを引き起こす。イスラムはキリスト教を軽蔑しており、キリスト教を悟りと礼拝に関して無知なシステムであると考えている。イスラムの国々におけるクリスチャンの迫害と圧制は、ほとんどすべての人に知られている。

これらはすべて偽物である。神はご自身の知恵のうちに、ご自分の民に真の聖なる御言葉を提供された。それらは人間の考えではなく、神の知性から創られたものである。彼は民にアダムとエバを与えられた。そして後継者の子どもたちに、またその子どもたちに父祖アブラハムからイサク、ヤコブそしてモーセへと口頭で伝えられた。どのように神を理解し礼拝するかの指示を与えた。これらの聖なる御言葉は尊ばれるもので、それらの指示に従うことによりうやうやしく扱われた。

イスラエルに聖なる御言葉

イスラエルがエジプトの地で偉大な国民となった時、神は力あるみ手で彼らを連れだし聖なる御言葉を与え、特にシナイ山で彼の律法を再び繰り返した。これらの律法は石板に書かれ、守られるべきもので、啓示され、あがめられ、そして従われていた。モーセは、また神とイスラエル人との関係である聖なる歴史の 5 つの本を書いた。これらは聖なる御言葉の一部となった。また預言者の書きものとなり、後の旧約聖書の残りとなった。ヘブルの聖書（トーラー）はある期間を経て発展した。ラビはこれらの聖なる御言葉を守るために細心の注意を払った。そして腐敗しないように扱った。彼らはこれらの聖なる御言葉を忠実に保護する様に教えられた。イスラエル人はそれに従うように要求された。どんな誤りも損傷もないようにするために、非常な注意をもって彼らはヘブル語のテキストを写し保護してきた。しかし、イスラエルは神の現わしたご意思からはずれたのである。初めに、ある特定の指導者や教会員により**教会内の背教が発展**した。しかしついには王たちが次々に全イスラエルを罪と深い偶像崇拝に導いた。それは広範囲に広まり、**教会全体が背教の中にあった**。



神はついにはイスラエルの全国家をバビロンの捕虜とすることによって罰せられた。その捕虜の中にある間も、イスラエルはまだ神の教会、すなわち聖なる御言葉の保管者であった。それはバビロンにはならなかったのである。もちろん、中にはバビロンの中で安楽を得、そしてバビロンの考えや原則を吸収さえする者もあった。彼らはバビロンの一部となったのだった。しかし神が彼の教会にバビロンから出でよ、エルサレムを立て直せとおっしゃられた時、彼は彼ら自身がバビロンから分離することを要求しておられたのである。しかし幾人かのものは出ることを拒否し、そのためにバビロンの一部になったのだった。神は彼の教会を拒絶したからではなく、改心させるためにバビロンに送られたのであった。神は彼の民に聖なる御言葉に忠実に従うもう一つのチャンスを与えるための時が来

たときに教会を呼び出した。

あなたは、我々も霊的にこの世にあって心地がよく、出てくることも分離することもない者の中にいるだろうと思うだろうか。神はあなたや私を聖で特殊な民であるように召されているのである。非常に多くのアドベンチストが荒野に捕らわれ、バビロンの魔法に魅了されていることはなんと痛ましいことだろうか。

はっきりと区別がなされなければならないことがある。聖なる御言葉を拒否する者（カインやニムロデやバベルの塔の建設者など）と、罪と戦い、彼らの誤った品性の特質を克服しようとする者との間には違いがあるのである。もし教会の指導者が管理上何かの過ちを起こすとしたら、それは背教ではない。もし彼があからさまに罪を犯し、堕落しても、もし彼がその罪を悔いあらためるなら背信とはみなされない。彼がその罪の生活を聖書に反して公然と拒み続けた時、我々はその人を背教したとみなすのである。または、彼が持続的に聖書にないことを説教し教え、聖書の中の事をゆがめ、人々を誤って導く時、これは背教した者である。

「教会の中にある背教」と「教会が背教している」の違い

では教会が背教の中にあるとどうして言えるであろうか。「**教会の中に背教がある**」ということと「**教会が背教している**」ということとの間にどのような違いがあるだろうか。教会の指導の地位にありながら、敬神の模範的生活をせず、あるいはその指導者がある個人をまたは、ある教会の機関を神の真理とその原則から引き離す場合は、教会の中に背教があると言える。教会はもし実行しようと思うなら、教会の中の背教に対処する良い方法がある。ある個人あるいはわずかな人々が背教に関与している場合は、教会全体が背教しているとは言えない。そういう場合は、教会に背教があると言えるだけである。

しかし、指導者と信徒の大半が教会の機関、教育機関であろうが、健康機関であろうが、出版機関であろうが、あるいは伝道機関であろうが迷い出て、多くの人々を、神の明確な啓示された御旨からすべての機関が実質的に、ある長い期間にわたってはずれた方向にある場合は、教会自体が背教にあると言えよう。委員会や理事会が決定する時に神の言葉に背くということが絶えず続くとき、あるいは、神の聖なる御言葉を明らかに無視し、絶えず自分たちの考えに従って決定していくとき、教会は背教していると言えよう。

しかし、覚えていただきたい。指導者のある人が、あるいは信徒のある人が誤り、罪を犯すなら、この場合は教会の背教とは言えない。教会の中に背教があると言うのである。多くの人がこの点について混乱している。機関の指導者、あるいは牧師が忠実ではあるが、ただ誤りを犯している場合、それは非難すべきではない。

しかし、指導者が神の勧告に従うことを拒み、無視し、自分の方法に歩み、偽りの教えに導くなら、それを指摘し、改めることを懇願するのは、非難ではない。

ジョン・ハーヴィー・ケロッグの件について考えてみよう。彼は単に誤りを犯したのではない。バトルクリークの病院の火事の後、彼はE.G. ホワイトの小さいサナトリウムを建て、中央集権を止め、全国にサナトリウムを分散するようにとの勧告を拒んでしまった。彼は故意に勧告を拒み、以前よりも大きな病院を建てることを選んだ。今日の我々の病院のように。そしてついにバトルクリークを背教に導き、神の教会から引き離してしまった。今日、我々の教会の病院のシステムはだいたいこの「良き」伝統に従ってきた。そして今や、ある我々の病院は経済的破綻を逃れるために、カトリックの病院、また、バプテストの病院と連結する結果になった。

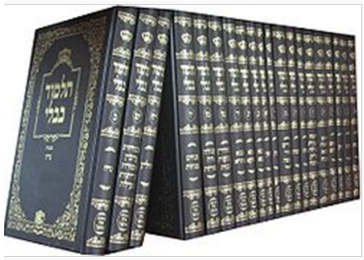
このような同盟にまきこまれて、一体どうして最後の警告のメッセージを伝える立場に我々が置かれていると言えようか。そんなことはあり得ないはずだ。そういうことが教会の中の背教ということだ。彼らはアドベンチストという名を負ってはならないはずだ。我々の教会もしかり、出版所もしかり、伝道の機関もしかり。これらは聖なる御言葉に従おうとしているのだろうか？本末転倒だ。それはただの誤りではな

い。それは全教会を破滅に追い込む方向にあるのだからさらに悪い。我々の愛する教会の中に背教があるというのだろうか、それとも教会は背教しているというのだろうか。

ところで、**背教しているということは、バビロンとなるということと同じではない**。この点においてもまた多くの者が間違った考えを持つ。これらのことは全く違ったことである。教会は非常な反逆的幕屋にあるかもしれない。しかし、古代イスラエルのようにバビロンとなったのではない。

神が聖なる御言葉を他の教会に移されるのでなければ、好むと好まざるとにかかわらず、それはなおも真理の保管所である。聖なる御言葉に人々が忠実であるようにさせるのが神の目的である。神は我々に強制はなさらない。神は長く忍耐なさる。感謝しようではないか！教会が悔い改めて変わるようにあらゆる機会を与えられるまで教会を拒否されることはない。ご自分の民が長い背教と対決することをお許しなる。イライラさせられることもあろう。神は人間の時間の数え方とは違うことを覚えよう。神の民は、誤った教え、標準を下げることに対して声を上げ抗議することによって主を助けなければならない。彼らは背教と対決する道具となるのである。しかし、沈黙を保つなら、背教を長引かせるだけである。ヨナのようになって、神の期待を裏切って神を怒らせないようにしよう。

バビロンから帰還したヘブル人は、二度とまわりの国の神々をしたってさ迷わないように決心した。が、教会の指導者たちは周りの国々から教会を隔てさせた。彼らは証をしなくなった。彼らは、あまりにも多くの規制とラビのおきてをつくり、ついには彼らの教会指針を持つようになった。彼らの聖なる御言葉はトーラーあるいは旧約聖書であった。しかし、彼らの教会指針はミシュナであった。**ミシュナ**の重要性と権威を高く上げればあげるほど彼らは、聖なるトーラーを低くし、ついには律法とトーラーの影響が少なくなっていった。



バビロニア・タルムード全巻

ミシュナは、ユダヤの口伝、ゲマラは解説書。タルムードという言葉はミシュナとゲマラを併せた全体のことを指す言葉

聖書より**教会指針**を高く置くと、このようなことはいつも起こる。我々もこのような危険はないだろうか？ヘブル人は、トーラーのイエスの来臨に関する預言を間違って適用した。メシアが来たときには、彼らは認知することができなくなっていた。キリストの時には、ユダヤ人たちは、**ミシュナ教会指針**が神の権威であると思うほど混乱していて、ラビたちは、神の御言葉、トーラーより権威があると思い込んでいた。イエスは、混乱をなくすために人間の書き物と聖なる御言葉の区別をなさるために来られたのであった。イエスの言葉を覚えているだろうか？「父または母を敬わなくてもよろしい』と言っている。こうしてあなたがたは自分たちの言伝えによって、神の言を無にしている。偽善者たちよ、イザヤがあなたがたについて、こういう適切な預言をしている；

『この民は、口さきではわたしを敬うが、その心はわたしから遠く離れている。人間のいましめを教として教え、無意味にわたしを拝んでいる』」（マタイ15:6-9）。

また言われた：

「昔の人々に『殺すな。殺す者は裁判を受けねばならない』と言われていたことは、あなたがたの聞いているところである。しかし、わたしはあなたがたに言う。兄弟に対して怒る者は、だれでも裁判を受けねばならない。兄弟にむかって愚か者と言う者は、議会に引きわたされるであろう。また、ばか者と言う者は、地獄の火に投げ込まれるであろう」（マタイ5:21,22）。

「『隣り人を愛し、敵を憎め』と言われていたことは、あなたがたの聞いているところである。しかし、わたしはあなたがたに言う。敵を愛し、迫害する者のために祈れ」（マタイ5:42,43）。

これらの言葉に、イエスと教会指導者の長い間持ち続けた格言との間に矛盾が見られた。彼らがイエスとその自給伝道の働きを喜んだと思

うか。E.G. ホワイトの言葉を聞いていただきたい：

「ところが、ユダヤ人は、形式と儀式を重んじるのみで、その目的を見失っていた。伝説や言い伝え、人間の作った戒めなどは、神が人に伝えようと意図された教訓を人々から隠した。これらの格言と伝説は、真の宗教の理解と実行を妨げるものになった。そして、実在者なる神がキリストとなってこられた時、人々は、彼こそすべての典型の成就であり、すべての影の実体であることを認めなかった」実物11-12.

我々も聖書の権威よりも教会指針を高めることによって、聖霊のかたちをとおして働かれるキリストを認知しないという危険がないだろうか？

ここに重要な引用文がある：

「与えられた光に従って行動する者だけが、より大きな光を受ける。活動的クリスチャンの徳の模範を示すことにおいて日々前進していなければ、我々は後の雨の聖霊のあらわれを認めることはないであろう。後の雨が我々の周りのすべての人々の心に注がれていても、それを認識することも、受けることもないであろう」TM 507。

光の通路である聖なる巻物を軽視し、無視しながら、どのように我々はすべての光に生きることができるであろうか？キリストが来られた時、彼を認めなかったユダヤ人のように、我々は、聖霊を認知し損なうことがありうる。

神の言よりも、我々の意見を上に置くなら、我々は神の要求を満たす必要はないと思いはじめる。するとまもなく、神の要求について我々自らの曲がった考えを持つ。すると、後の雨を受けるに必要な品性を備えないで後の雨を受け損じてしまうであろう。

キリストは、我々の代わりに服従されたから、キリストの恵みによって罪に勝利することは重要でないと教える者は、後の雨を受け損じる最上の方法を教えていることになる。

我々は、歌って踊って、いわゆる「聖霊」の集まり、セレブレーション礼拝、カリスマ説教、異言のプログラムに熱中して、聖霊が共におられると思い込む危険はないだろうか？「聖会のため悲しむ」（ゼパニヤ 3:18 欽定訳）「廊と祭壇との間で泣」く者（ヨエル 2:15）たちに聖霊が表される時に、真の聖霊を認識し損なう危険がないだろうか？

教会の中で失われている魂、また教会に飛び回っている反逆と背教のために重荷を負っていないなら、神の民の罪のために嘆くことをしないなら、我々は後の雨にあずかることはできないであろう。教会の背教に心を痛め怒っている人々のために祈ろう。

貴方の義務を怠ってはならない。ニコデモのような人がいるかもしれない。後の雨の時になって多くの「祭司たち」が信仰に忠実に立つかもしれない。あなたは、彼らのセレブレーション、あるいはロックの音楽会に出席できないであろう。彼らの背教した礼拝や、キャンプ・ミーティングに出席はしないであろう。しかし、あなたは「廊と祭壇との間で泣」かなければならない。「教会で行われている憎むべきことについて嘆き悲し」まなければならない。さもなければ、自らの魂を印されない危険に置くことになる。エゼキエル 9:4 を注意深く読んで頂きたい。嘆き悲しむべ者だけが印されることに留意してほしい。

E.G. ホワイトはこの聖句について驚くべきことを言っている：

「信心のパン種は全く光の力を失ってはいない。教会の危機と沈下が最高の時、光に立っている小さな仲間たち（コンパニー）は地に行われている憎むべき事柄に対して嘆き悲しむであろう。しかし、教会員が世の方法に従っているので、彼らの祈りは特に教会のためにたち上るであろう]5T209.

教会の中で教会員のために嘆き悲しむのである。

「特に教会の最後の働きにおいて、神のみ座の前で傷のないものとして立つ144,000が印される時に彼らは神の民と自称している民の悪を最も深く感じる。これは殺す武器を手に持つ者たちによってなされる最後の働きが預言者のたとえ(エゼキエル9章)で強烈に描写されている。エルサレム(神の教会)で行われている悪を嘆き悲しむ人々の額にしるしが与えられるのである。」3T266-267

あなたは、教会の罪を嘆いているか？　神の教会に何か悪を見るときに、嘆き悲しむか？それとも兄弟姉妹の落ちかかるのを見て喜ぶか？消極的と言われるかもしれない。しかし、他のために嘆き悲しむ経験をしていないと、後の雨を受け損じる準備をしているのである。

教会が教会指針の権威を高める時はいつでも聖書の権威が自然に低められてくる。ローマ・カトリック教会は、神の言葉の代わりに伝説に頼る習慣がある。彼らは、伝説を聖書と同等の権威に置く。しかし、実際は、聖書の上に置いているのである。セブンスデー・アドベンチストにも神の言葉の代わりに人間の規則の権威を高めるという危険があると思われるか？確かにある。教会指針を決定と計画の基準とするなら、我々は、聖霊の働きを制限することになるのだ。徐々に教会指針を教会の行政、運営の権威とすることによって、徐々に聖書の権威を低めるようにし、気づかないうちに聖書の言葉を人間の考えや計画に取り換えてしまうようになるのだ。

E.G. ホワイトは興味深いことを言っておられる：

「聖書の一文は人間の考えまた、議論の10倍よりももっと価値がある」7T71。

もう一度繰り返したい：「聖書の一文は人間の考えまた、議論の10倍よりももっと価値がある」。ちょっと考えていただきたい。あなたにとって何が最も重要か？神の言葉か？それとも他の人が何を言っているかがもっと気になるか？あなたは聖書の原則に従いたいと望んでいるか？それともまずは人間の教え、計画に、また、誤り多い人間の考案にどう従うかを最初に考えるか？神の言葉をその通りに受け入れよう。そして神の言葉に示されている神の道にゆだねよう。もちろん、他を真理に導くことにおいて、忠実な人々と協力すべきである。

イエスが地上におられる時、彼はしばしば、ミシュナ（ユダヤ人の口伝で，タルムードを構成する）を無視された。そしてご自分の言葉でトーラー（聖書特にモーセの五書）をその正しい位置に高められた。そうすることによって、人々が彼を認めることを助けるのであった。それはラビや教会の指導者を怒らせることになった。しかし、聖書を当然の権威の位置に置くためにはそうしなければならなかった。

「キリストがお語りになった譬を通して、役人たちに警告することと、よろこんで教えを受ける民衆に教えることとが、キリストの目的であった。しかしもっとはっきり語る必要があった。言い伝えに対する尊敬と、堕落した祭司制度に対する盲目的な信仰によって、人々はとりこにされていた。そのような鎖をキリストはたち切っておしまいにならねばならない。祭司たち、役人たち、パリサイ人たちの性格をもっと十分にばくろしなければならない」3希望62。

我々もそうしなければならないと思わないだろうか？教理と行動において誤りがあるのを支持することはできない。それは悪いことである。もし、我々がイエスのように、それに対して声をあげるなら、イエスが取り扱われたように、我々も取り扱われるであろう。神の言葉に対する急激な反抗の連発に反対する者は、実際に同じことが起こる。イエスは、彼に起こったことは、彼に従う者たちにもそうなるであろうと言われた。「わたしがあなたがたに『僕はその主人にまさるものではない』と言ったことを、おぼえていなさい。もし人々がわたしを迫害したなら、あなたがたをも迫害するであろう。また、もし彼らがわたしの言葉を守っていたなら、あなたがたの言葉をも守るであろう」（ヨハネ 15:20）。ルカ 6:22 も見ていただきたい。

キリストの時代には、ユダヤ教会が聖なる御言葉の保管所であった。後にそうではなくなるが、なおも真理を委託された教会であった。…. イエスは人々を悔い改めに導くために教会の指導者たちに機会をお与えになっていた。なおも、彼をメシアとして受け入れるように選ぶ機会を与えておられた。しかし、ついに彼らはキリストを拒むことによって彼らの運命を定める結果を招いた。そして神の聖なる御言葉の保管所としての役割を取り除かれることになった。彼らはもはや神の教会で

はなくなった。

では、イスラエルから、それが取り除かれたら、神はどの教会を真理の保管所とされただろうか？誰か、個人にその御言葉をお与えになっただろうか？　否。個人は神の真の教会の一部である。また個人は真理の言葉に個人として応答して神の勧告を実行したが、神はいつもご自分の教会として御言葉を保管する団体を持っておられた。それは、いつも少数の人々で構成されていた。あるときには、2,3 人ということもあった。「ふたりまたは三人が、わたしの名によって集まっている所には、わたしもその中にいるのである」ヨハネ 18:20。イエスは、ご自分の聖なる御言葉を選ばれた新しい体―教会―保管所に委託された。使徒行伝を読むと、彼はどのように、新しい教会を始められたかを読むことができる。

しかし、たとい、御言葉が新しい「教派」に移されたとしても、使徒パウロ、ペテロまたその他の者も背教し捨てられた教会に無関心ではなかった。彼らは、「そのまま放置しておけ、彼らは偶像礼拝にくみしたのだから」とは言わなかった。かえって彼らのために祈られたのである。真理に彼らを勝ち取るためにその集会に出た。なお組織にある者たちを無視しなかった。彼らの魂のために大きな重荷を負った。パウロは、愛していたヘブルのクリスチャに書いた。そしてある程度成功した。

ある教会が拒否されると、必ず新しい教会が興るのであった。聖なる御言葉を保管する新しい保管所が必要となった。興味深いことに、神が教会を変えられる時には、いつも教会から教会へと聖なる御言葉を移された。新しい教派が発展するためにはいくつかの重要な条件があった。キリスト教会の初めころも、セブンスデー・アドベンチスト教会が始まるときもそうであった。今日の教会に何をしておられるかを理解するためには、過去にどうされたかを見る必要がある。

神が教会を変えられた時に、存在した条件を歴史のある時期に見てみよう。例えば、暗黒時代。ローマ・カトリックがこの地上の見える教会として支配権を持つにいたったとき、神の真の教会は、「荒野へ」逃げて隠れた。黙示録 12:13-14 を見よう：

「龍は、自分が地上に投げ落されたと知ると、男子を産んだ女を追いかけた。しかし、女は自分の場所である荒野に飛んで行くために、大きなわしの二つの翼を与えられた。そしてそこでへびからのがれて、一年、二年、また、半年の間、養われることになっていた」。

ローマ・カトリック教会は、たとい彼らが神の真の教会と公言しても、そんなことは決してあり得なかった。神の教会は、ローマ・カトリック至上権時代には身を隠していた。またご自分の聖なる御言葉を保管なさる神は、ローマ・カトリック教会を真理の保管所とすることを決してなさらなかった。それはワルデンセスや「ワルデンセスの教会」として知られているその他の信仰深いグループの人たちに保管されていたのである。それゆえにプロテスタントは、教会自体がカトリックからプロテスタントへと変化したものとされることはできないのである。プロテスタントは、聖書に従う忠実なカトリック信者が彼女から出てきて、何年もの間荒野に隠されてきた真の教会に連なった結果であった。宗教改革は、世界に広がったローマ・カトリック教会の権力を砕き、宗教の自由をもたらす神の計画の一部であった。さもなければローマ・カトリックの支配下で幾百万もの人々が永遠に失われてしまったであろう。

新しい教会が興るときの特徴

我々は新しく興る教会に確信を持ち、真理を持つ教会を間違わないために、使徒時代の教会において、神がどのように働かれたかを理解する必要がある。神はそれを明確にされたので、混乱は生じなかった。事実、それは非常に明白であったので、忠実な魂はそれを間違えたり、困惑することはなかった。

第一の特徴

第一に、それは先の雨によって使徒たちに奇跡の力が伴っていた。一日に何千もの人々が改宗し、回心者は山火事のように広がっていった。この明らかな奇跡の力なくしては、当時の人々を古い教会から新しい教会へと確信をもって移

行させはしなかったであろう。新しい教会となるために、そこに人々の関心を引き寄せるために、神は奇跡的力をお与えになった。使徒時代にはいやしがなされ、語る舌が与えられ（あらゆる言語で）、幻、死人がよみがえらされることさえもあった。これらの奇跡の現れは、この新しく興った「教派」は神からのものであると、人々を納得させた。

第二の特徴

第二に、保管所の変更に伴って、深い霊的献身と、お互いの愛と、聖霊による改変された男女が現れねばならなかった。ペンテコステの日に何が起こったか覚えておられるだろうか。彼らは一つ所に集まって皆で共に祈り、お互いに対する過ちを告白しあい、互いに対する愛情も深まっていった。そうしたときに聖霊の明らかな霊的力が注がれた。すべての議論はわきへ置かれた。すべての内部抗争やささいな妬みは明け渡された。すべてのプライド、利己主義は捨て去られた。そこには何一つとして兄弟間、姉妹間で立ちはだかるものはなかった。神の聖霊が御心のままに自由に支配することが出来た。敬神深い、清められ真面目な人たちの特質を持ったこの運動は、真の心を持った人々の確信を得ることができた。神は12使徒をこのような特質を持つように訓練し、その基礎を築かれた。

第三の特徴

保管者が変わるための必要な第三の条件は、神の御言葉の深い研究があった。初代教会において、メシヤに関する預言の意味をより理解するために、旧約聖書のキリストの働きと生涯の研究がなされた。後の雨に備える今日の我々にとって、このことはいかに重要なことであろう！我々はどれほどしばしば聖書の研究に時間を取り、主の真理が個人的に示され、品性の完成と後の雨に備えようとする主に懇願しているだろうか。私は真理を信じる我々の間でさえも悲しいかな、このことに関しておろそかにされてはいないだろうかと恐れる者である。もし我々が必要な準備をしないならば、後の雨に備えられることは決してないだろう。我々の周りにすべて降ってきたとしても、そのことにさえも気づかないであろう。私は、セブンスデー・アドベンチストへの信仰を告白する保守派について言っているのである。我々はきっと聖霊を悪霊の仕業だと思うであろう。ふたたび霊感の筆からの声明を聞いていただきたい。

> 「彼らの持っている光に従って生きる者たちだけが、大きな光を受けるであろう。我々はクリスチャンの徳を生き生きと表すことに、日ごとに前進しなければ、後の雨が降っても聖霊の現れに気づくことはないであろう。それは我々の周りのすべての心に降るかもしれないが、我々はそれを識別したり、あるいはそれを受けることはないであろう。」TM507

個人的に深く聖書研究することは、保管所（教会）の変更において極めて重要である。それなしには、新しい教会はその使命と任務のために確かな根拠を持てないであろう。

第四の特徴

新しい教会が興る第四の必要な基準は、神の真理の保管所としての教会が神に拒絶されるに先立って、神の民の背教との長期にわたる対決がある。神がご自分の民として彼らを最終的に拒絶なさる前に、神はイスラエルに対して警告するという段階をいくつか踏まれた。預言的警告が頻繁に繰り返された。たとえば、カルメル山のエリヤの対決があった。また、しばらくの間捕虜となって、バビロンに引いて行かれ、ついにはローマの隷属となった。またキリストの現れと使徒たちの驚くべき働きがあった。これらすべては、真理の保管所であったヘブルの教会に対して立ち返って改革するようにとの神の嘆願であった。

第五の特徴

神が教会を替えられ、神の真理の保管所としてキリスト教会を興されたとき、もう一つ重要な特徴が示された。使徒時代までさかのぼるが、その当時聖典は難解な旧約聖書のみであった。モーセの五書に加えて、預言者や王たちによって書かれた本があった。しかし新たな教会が興されるとき、また聖書の大きな拡大があった。

新しい環境のもとに、新しく誕生した教会が現在の必要とやりがいのある仕事と向き合うために、預言的啓発と指導し激励する必要があったために、聖なる御言葉の追加があった。これは新しい組織において正しい方向に彼らを向けさせ、神の真の人々の確信を大いに増大させることであろう。なぜそれは現存する霊感の書に加えてそんなにも重要だったのであろうか。

使徒はすでに確立されていた旧約聖書の目標として、キリストを指し示した。それは現存する神の言葉に対する彼らの忠誠の証拠となった。しかし霊感のガイドなしには、独特の立場にあるこの新しい教会はつまずき、任務は明確ではなかったであろう。新しい保管所（教会）に対して信者が信頼できる、聖なる御言葉の追加が与えられ、彼ら自身が真理に確立される助けとなる錨が必要だった。使徒たちが諸教会に手紙や福音を送ったとき、教会はそれらを神からの教えとして保管し尊重した。なぜだろうか。使徒たちは非常に明らかにはっきりと神の力に支配されていたので、教会員たちはこれから直面する試練の苦しい体験に備えて、彼らを強めるために宛てられた、これらの手紙を神の霊感の御言葉として受け取った。

新しい教派はこれらの聖なる御言葉が与えられてこなかったユダヤ教会から新しい教会を識別する特殊性霊感の特別な勧告もまた必要だった。後に迫害が起きたとき、これらの手紙は苦難に遭い、生命を落さねばならない時の信仰の錨となるのであった。これらの新しい聖なる御言葉は、保護され、人生における神の目的と福音の原則を理解する助けとなるために、安息日ごとに教会で研究し読まれた。

ところで、ローマ・カトリックは、彼らの野望的な計画を成し遂げるために聖なる御言葉を曲げることによって支配権を取得した。真の教会は荒野に逃げていかねばならず、その混ぜ物なしの真理を持って荒野に隠れていた。

では、ミラーたちの再臨運動とSDA教会の興りを見ていきたいと思う。19世紀に神は教会を変更なさった。神はプロテスタント教会を離れ、ご自分の真理を中心としたセブンスデー・アドベンチスト教会を御言葉の新しい保管所となさった。神はアナバプテスト（再洗礼派）、ピューリタン、ウェスレイやその他の者たち、またミラー派の働きによって、プロテスタント教会の背教と対抗させられた。そして多くの他の方法で、彼らに光の中を雄々しく歩み、働きを前進させる機会をお与えになった。しかし彼らは停滞することを選び、前進した真理に進もうとはしなかった。ついに、神は彼らをなすがままにされた。

そこで再び、新しく興った教会に人々が信頼を置けるようにとの特徴を神は与えて発展させた。そこには聖霊の大いなる顕示があった。まるで使徒時代のように、説教には力があり、癒しが行われ、預言的幻とその他にも、神がこの運動の背後におられるという、明らかな証拠があった。再びこの運動を指導する男女の霊的巨人たちが現れた。彼らはお互いに自分たちの間違いを認め、議論と不一致を放棄した。彼らは魂のための真面目な愛情を持っていた。彼らは共に近づき合ったので、神はこの運動を指揮なさり、ご自分の御目にふさわしい者として彼らをお用いになることができた。そこには深くまじめな御言葉の研究があった。

初代教会において、強調された事柄は、キリストの初臨に関する預言の成就であった。ミラーたちの場合はキリストの再臨に関する預言的成就が強調された。これらの男女は聖書を深く学ぶ生徒であり、彼らの霊的経験には円熟さが現れていた。彼らは自分たちがどこに立っているかを知っており、聖書によってそれを立証した。

我々は、聖句から自分が残りの民の一部であると証明できるだろうか。聖書から、どのように自分の教会が真理をもっているか、そしてその他の教会が残りの民を構成するのではなく、また彼らは現代の真理を持っていないということを示すことができるだろうか。ついに、再臨

運動は神からのものであったという揺るがない確信に至った。再び真理の聖なる御言葉の追加があった。神の恵みにより、主はエレン・ホワイトを立てられ、この新しい教派の必要と時代に合った、預言的洞察と霊感の指導を提供された。それは他のすべての教会と区別される特徴が与えられ、真理の保管所とされた。

それ以上にどんな良い贈り物を天は与えることができたであろうか。エレン・ホワイトの書き物は聖なる御言葉の拡大であり、忠実な者を導き、教え、啓発してくれる、すばらしい源が提供されたのであった。

エレン・ホワイトの勧告を拒絶することによって、我々の間の自由主義派（リベラル派）は、つまるところ、神の聖なる御言葉の保管所であるセブンスデー・アドベンチストが何のために立てられたかという理由の一つを拒否しているのである。だからこそなんとしばしば、これらの者たちは、預言の霊を拒絶し、最後にはこの使命から去っていくのである。天はどれほどの大きなエネルギーと源泉がご自分の教会に投入されたか。預言の霊を拒絶することについて、神はどのように感じられるかを、想像することができるだろうか。何という悲劇であろう。過去において神は教会を変えてこられるたびに、新しい教会に注意が引き寄せられ、それに対する信頼が確立されるために、顕著な特徴を与えられた。

神は後の雨の前に、イエスの再臨の前にもう一つの教会を興されるであろうか。もし神がそうされるならば、神は何らかの方法で新しい教会組織を忠実な者たちが確信を持てる特徴を示されるであろうか。神はお互いの魂のための真剣な愛を持った男女によって、それを興されるであろう。聖書を深く学ぶ生徒が出現するであろう。神は明らかな超自然的出来事によって新しい教派を興されるであろう。この運動は、その源が神であるという明らかな証拠を持つので、識別するのにいかなる混乱も起こらないであろう。奇跡、幻、いやし、そしてそのほかの奇跡の形態で介入することはないであろうか。もちろん、その時の特別な必要に対応した、新しい教会組織の洞察と勧告、霊感の勧告の拡張、聖なる御言葉、ガイドという最も重要なものがあるであろう。

過去の「新しい教派」（新しい真理の保管所）を拒否し、自分たちの古い宗教に固執しよとする者は、神の御霊の障害となる二つのものを克服しなければならない。

第一に彼らは、明らかな聖書研究に基づく現代の真理を拒否しなければならない。第二に明らかな聖霊の顕現を偽のものとして拒否しなければならない。

今日もなおそのようなことをして、セブンスデー・アドベンチストの人々に託された神の真理の言葉を拒否する者がいるだろうか？私はあるとき、アドベンチストの大学の指導者の集まりに出席したことがある。そこでの話し合いにびっくりした。彼らはセブンスデー・アドベンチストが聖書預言の残りの民と考えていることをあざ笑っていたのである。なんと悲惨な事か！我々の大学生たちは、今や彼らの属する教会は、残りの教会ではないと学んでいるのは真実だろうか？我々は民としてのアイデンティティー（特殊性）を見失ってしまったのだろうか？このエキュメニカル（教会一致運動）の時代で、我々の働きを見失っているのだろうか？ある指導者たちは、セブンスデー・アドベンチストが真理を持っているという考えをあざ笑っていた。

私は、神は教会を変えておいでになるという証拠なしにまたもや教会を変えてしまったとある者たちが主張しているのを見て困惑する。もし、神が教会を変えたなら、聖なる御言葉の保管所となったのはどこだろうか？神はどこか他にそれを委託されなければならない。ある個人にそれを与えるはずがない。ご自身の体である教会を通してなさるという神の計画に沿わないことになる。ある人たちは、独立教会が聖なる御言葉の保管所とでも言おうとしているのだろうか？もしそうであるなら、どこに今まで聖なる御言葉の保管所を変えられる時に現された超自然的な力の証拠があるだろうか？どこに権力や内部抗争に巻き込まれない献身した男女がいるだろうか？　神はSDA教団組織にいつも悔い改めて立ち返る機会を与えてこられたということをどうして知ることができるだろうか？神は教会を変えられたと主張するなら、彼らのどこに新しい教派としての証拠となるような預言の賜物を持って、直接神とのコミュニケーションをした証拠があるだろうか？そして新しい教派

が興される時に見られる聖なる天からの御言葉の追加が見られるだろうか？　神がもう教会を新しく変えられたと言って人々を説得させようとする代わりに、眠れるSDAに迫りくる危機に覚醒するように助ける働きにその同じ時間を費やした方が賢いと思わないだろうか？セブンスデー・アドベンチスト教会から彼らに保管所が変えられたと主張する者たちは、以前に新しい教会に変えられるときと同じ特徴を実演する大きな責任がある。

では、このSDAという組織はどうなるのであろうか？詳しいことは、御言葉に明瞭にされていないが、一つ確かなことがある。神は忠実な者たちに憐れみ深い関心を持っておいでになり、指導と慰めのないままに放っておかれることはない。SDAの組織はどうなるのだということを推測はしないが、劇的な変化、神の計画と働きに調和する変化がやってくるのは確かである。ある時期が来ると、もう組織は機能しないであろう。しかし、神が与えた光に真実に、熱心に歩んでいる者たちによってのみご自分の働きを完成なさるということもまた同じく確かである。神は真理を妥協させない指導者を興されるであろう。エレミヤ23:4には、背教した指導者のことに言及した後でこのように言われている：「わたしはこれを養う牧者をその上に立てる、彼らは再び恐れることなく、またおののくことなく、いなくなることもないと、主は言われる」と。何と素晴らしい約束であろう。我々の教会の指導者の多くの者が最後の危機の時にそのような備えができているとお思いだろうか？責任ある地位にある人々のどれくらいの者が初代の使徒たちのように準備をしていると思うだろうか？それとも彼らは、盲人が盲人を導く指導者、学者、パリサイ人のようであろうか？罪に勝利する者はどれくらいいるだろうか？どれくらい不和を捨て、世俗に背を向けているだろうか？　SDAでない教育機関の博士号にあこがれる代わりに、聖書の真理を熟知することを求める者たちがどれくらいいるであろうか？彼らは、セレブレーション礼拝、ロック音楽、安息日に対する不敬、罪に勝利を与えない福音を奨励している。しかし、神は、舞台裏で御業を完成する質のいい指導者となるべき世代を準備しておられる。聖書の人、真理に通じている者、祭壇から取り出された火で温かい心を持つ者たちを備えておいでになる。キリストに内なる魂を清めていただき、義に飢え渇き、教会でなされている悪に対して嘆き悲しむ者たちが用いられるのである。彼らは今は指導者の立場にいないかもしれない。彼らは博士号を持っていないかもしれない。しかし、聖霊の支配下にあるのである。

> 「第三天使の使命も、このようにして宣布される。それが非常な力で伝えられる時が来るならば、主は謙遜な器を通して働かれ、主の奉仕に献身した人々の心を導かれる。働き人は、学歴ではなくて、聖霊を注がれることによって資格を与えられる。信仰と祈りの人は、聖なる熱意に燃えて出て行き、神から与えられる言葉を宣言せざるをえなくなる。バビロンの罪は暴露される。教会の法令を政権によって強制することの恐るべき結果、心霊術の侵入、法王権のひそかではあるが急速な発展などが、みな暴露される」　大争闘下376。

御業を完成するのは、学歴を持っている人々ではないということに留意されたい。それは、真理の経験を持つものであり、キリストの学校で訓練を受けた者たちである。経験的知識を持つことがどんなに重要であろう。どうして神の方法と聖なる御言葉から現代の真理を教えない学校に青年たちを送るこができるであろうか。

なぜ、あまりにも多くのアドベンチストの青年たちが神の働きにたずさわっていないのだろうか？名前だけがアドベンチストになっている学校に彼らを送って懐疑主義者となり、重要な真理に関して経験を与えないからなのだろうか？我々の大学は、来たるべき危機に教会を備えさせる使命を与えているだろうか。教会の中で嘆き悲しむ者たちに加わろう。「廊と祭壇との間で泣」く者に加わろう。他の者たちの危険を警告するためにできるだけのことをしよう。神ご自身がたづなを取って、義をもってすみやかにご自身の働きを完成してくださるように懇願しよう。たとい教団組織から外されても、家の教会、自給教会として賢く運営する方法がある。またSDA教団組織はバビロンとなったと言って自給教会を正当づける必要もない。最も大事なことは、組織体制が崩れ、機能しなくなる時、霊的に成熟し、神が危機の時に用いられるよう準備することである。真理を掲げ、背教に抵抗するためにできるだけのことをしようではないか！

ケロッグ博士の歴史「背教のアルファ」

金城 マーク N.D.自然療法医

過去の歴史における教訓

初めに歴代志下20章の22節を見てみたい。皆さんはヨシャパテ王の物語を覚えているだろうか。歴代志下20章に書かれている話である。外国から大軍が押し寄せてきて、イスラエルを攻めようとして来ていた。

ヨシャパテ王は敬神深い人物であり、その危機的状況の時に神に助けを求めた。神は預言者をヨシャパテのもとにつかわして、彼を励ました。15節で預言者はこのように言った。「恐れてはいけません。これはあなたがたの戦いではなく、主の戦いだからである。」

勇気を得たヨシャパテ王は朝、人々に次のような言葉を語った。20節の後半に有名な言葉がある。「あなたがたの神、主を信じなさい。そうすればあなたがたは堅く立つことができる。主の預言者を信じなさい。そうすればあなたがたは成功するでしょう。」21節を見ると、歌を歌う人たちを定めて、「主に向かって歌をうたい、かつさんびさせ、『主に感謝せよ、そのいつくしみはとこしえに絶えることがない』と言わせた」とある。22節を見ると、「彼らが歌をうたい、さんびし始めた時、主は伏兵を設け、かのユダに攻めてきたアンモン、モアブ、セイル山の人々に向かわせられたので、彼らは打ち敗られた」とある。

このように、私たちの人生に直面しているありとあらゆる敵を、私たちが賛美するときに神が、打ち破ってくださることを願うものである。

ここで、セブンスデー・アドベンチストの初期の歴史から、共に学んでいきたいと思う。スペインの有名な哲学者が「歴史から学ぶことをしない人は歴史を繰り返すことが運命づけられている」と言っている。ホワイト夫人もこれと似たようなことを言われた。「主がこれまで私たちを導かれたことと、過去の歴史における主の与えてくださった教訓を忘れない限り、私たちは将来について恐れることは何もない」と。

アドベンチストの初期頃に、我々の教会、特に医事伝道の分野に入り込んできた致命的な教え、異端について少し学んでいきたいと思う。ホワイト夫人はこれを指して「背教のアルファ」と言った。「私たちの前に今背教のアルファがやって来ている。オメガの危険もさらに続くであろう。オメガが驚くべき性質のものとしてやってくるであろう」と。これは1904年にホワイト夫人が言われた言葉である。

ケロッグ医師

この時代の歴史の背景をまず見ていきたいと思うが、右の写真はジョン・ハービー・ケロッグという医者である。アメリカでケロッグという名前を出したら、誰もが知っている。ただしこの人物ではなく、「ケロッグ」というコーンフレークやシリアルの会社の名前であるが。ケロッグ医師の弟であるジョン・ウィリアム・ケロッグがそのシリアルの会社を設立した。一方、ケロッグ医師はアドベンチスト初期頃の著名なセブンスデーの医者であった。彼はバトルクリーク・サニタリアムという医療施設を経営していた。それはアメリカのミシガン州にあって、世界的に有名な施設であった。ケロッグ医師は当時、セブンスデー・アドベンチスト教会全体の医事伝道の働

きを取り仕切っているような立場の人であった。

最初、セブンスデー・アドベンチスト教会における健康事業の始まりはきわめて単純なものであった。下はセブンスデー・アドベンチスト教会が経営していた初期の診療所、サニタリアムである。一般の自宅を改装してサニタリアムに作り替えたものであった。このような状態で 1866 年から 1877 年までサニタリアムは運営されていた。そこでは単純なプログラムが行われていた。しかしそこでなされていた教えは、当時一般にみられていた医療の方法とはかなり違うものであった。

当時の医療知識

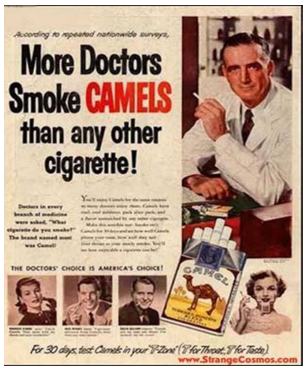
当時、一般に行われていた医療とはどのようなものであったかを見てみよう。当時人気があった、家庭でできる治療薬があった。歯が痛いときによく使われていたドロップ、キャンディーのようなもので、その主な材料はコカインという物質であった。それは今日、非常に危険視されている麻薬の一つである。確かに、これを口に入れると歯の痛みはなくなるが、極めて中毒性の強い薬物であった。

当時、一般に行われていた別の治療法には、ぜんそくなど気管支の病気のために使われていた蒸発性の薬があったが、当時の薬には多くのアルコール分が含まれていた。またその中にはアヘンも含まれていた。確かに、こういったものを使うと咳はおさまり、気分もよくなる。しかし、これも極めて中毒性の強い薬物なのである。裏に書かれている服用方法には、大人は一日に小さじ一杯と書かれている。覚えていてほしい。これにはアルコール分、アヘンまで入っているのである。そして生後五日しかたっていない乳児には、五滴だけ与えるようにと書いてある。生まれたばかりの赤ん坊にも、このような薬が使われていたことが分かる。当時、子供の歯が生え始めるときの様々な症状に使われていた薬があるが、これも痛みなどを抑える薬であり、アヘンが入っていた。今日、麻薬として見なされている薬物の多くが、当時は子供用の薬のなかに含まれていた。

アメリカ合衆国の初代大統領は、ご存じのとおりジョージ・ワシントンという人であった。彼は背が高く、頑丈な人であった。彼は政界から引退した後に、広い農場を経営した。毎日彼の農場では奴隷たちが働いていたが、彼は毎日農場に出て行って、ちゃんと仕事がなされているか監督していた。そして冬のある日、農場を見に行ったとき、嵐に見舞われた。雪がたくさん降ってきて、冷たい雪にさらされて体中びしょびしょになって、寒い思いをして家に戻ってきた。生涯ほとんど病気にかかったことのなかった人だったので、たいしたことないだろうと、さほど気にも留めなかった。翌日、彼はまた外に出て、更なる仕事に従事した。ところが夕方頃、のどの調子がおかしくなってきて呼吸困難を覚えた。医者を呼ばせたが、近くにいなかったので、医者が駆けつける前に、助手に命じて血を抜かせた。当時、血を抜く治療が一般に広く行われていて、たとえば熱が出ると、頭にうっ血があるから血を抜きましょうといって、体の血を抜いていたのである。

ワシントンの助手はちょっと傷をつけて、腕から血を抜いたのであるが、「これじゃ足りん。もっと大きく傷をつけろ」といってたくさん血を抜かせたそうだ。そして二人の医者が駆け付けて、「血を抜いてますね。良い処方です」と言ったそうである。それから医者がさらに血を抜く作業にかかった。またほかにもいろんな治療を施したけれど、効果がない。呼吸困難を覚えていたので、カブトムシのような虫をつぶしたものを湿布にしてのど

にあてた。それをあてると炎症が起こって皮膚のところが赤くなるそうである。当時はそのような治療がなされていた。当然、うまくいかなかった。さらに年の若い医者が呼ばれて、呼吸困難があったので、気管切開をすべきだと言ったそうである。しかし年配の医者は「それは過激な方法だからやめなさい」と反対した。気管切開は過激な方法だからやめなさいと言いながら、二人で血を抜く作業をやり続けたそうである。そしてとうとう、ワシントンの体から半分くらいの量の血液を抜いてしまったそうだ。今日誰もが、彼がその時亡くなった原因は、病気によってではなく、治療によって殺されたということが分かる。「まぁそれは100年、150年前のことだから」というわけである。



しかし、現在はどうであろうか。1960年代にアメリカでこのような広告が出回っていた。ある煙草を医者たちが推薦しているという宣伝であった。50年代60年代ではよくそういうことが行われていた。アドベンチスト教会の初期頃、ある先駆者の一人が肺の病気にかかった時に、当時の医者がその肺の治療法として、煙草を吸うように勧めたそうだ。だから当時は、セブンスデー・アドベンチスト教会の人たちであっても、この健康に関して、医学に関しての知識はかなり乏しかったということが言える。その頃神は、セブンスデー・アドベンチスト教会に健康のメッセージ、その光をお与えになった。イザヤ60章の1節から読んでみたい。「起きよ、光を放て。あなたの光が臨み、主の栄光があなたの上にのぼったから。(2節) 見よ、暗きは地をおおい、やみはもろもろの民をおおう。しかし、あなたの上には主が朝日のごとくのぼられ、主の栄光があなたの上にあらわれる。(3節) もろもろの国は、あなたの光に来、もろもろの王は、のぼるあなたの輝きに来る。」

セブンスデー・アドベンチストの健康改革メッセージ

当時セブンスデー・アドベンチスト教会の健康事業において、ここで描写されているようなことが文字通り起こった。当時の医療、医学界の暗闇に覆われた状態にあって、神は健康改革メッセージという、輝かしい光をセブンスデー・アドベンチスト教会にエレン・G・ホワイトを通してお与えになった。1863年に、神は初めてホワイト夫人に健康改革の幻をお与えになった。さらにジョン・ハービー・ケロッグという人物が現れ、初期のアドベンチスト教会において医事伝道の事業をけん引した。彼がまだ若かった頃、彼の実家はホワイト夫妻の家の近くにあった。その頃、ジェームス・ホワイトの出版事業をよく手伝ったことがあった。そしてジェームスとエレン・ホワイト夫妻は、この青年が勤勉に働く、将来有望な若者であると感じた。

ホワイト夫妻は、彼に医者になるように勧めた。ホワイト夫妻は彼の学費も援助して、医学校を卒業できるように手伝ってあげた。医学校を卒業してからバトルクリークに戻ってきたケロッグは、セブンスデー・アドベンチスト教会の医事伝道事業の指導者の一人になるように任命された。彼はエネルギーにあふれる知識に富んだ人物だったので、サニタリアムはどんどん成長していった。間もなくミシガン州、米国全土において、このバトルクリーク・サニタリアムの名が知れわたるようになっていった。そしてバトルクリークを通して神の光がありとあらゆる場所に輝いていた。当時、数人の歴代大統領もバトルクリーク・サニタリアムを訪れて治療を受けたことがあった。アメリカ中の有名人もそこに足を運び、さらにヨーロッパの貴族階級もどんどんアメリカにやって来て、このバトルクリーク・サニタリアムで治療を受けた。

このジョン・ハービー・ケロッグという人物について、手短に語るのは非常に困難であるが、彼はたぐいまれな人物であったといえる。それは、彼が秘書と一緒に仕事をしている写真である。この頃も、彼は精力的にたくさんの人たちと手紙でやり取りをしていた。毎日25人に宛てて手紙を書いていたそうだ。それは単なる手短な1ページくらいのものではなくて、それぞれが小冊子くらいの厚さの手紙であった。自分で書いたわ

けではなかったが、同時に7人から8人もの秘書を使って、忙しくこれらの手紙を書かせた。まず、一人の秘書に手紙の内容を口頭で伝える。そしてこれを書いている人が少し遅れ気味になってくると、次の秘書のところに行って、さらに別の手紙を口頭で伝える。そうやって7、8人の秘書に同時に7、8種類の手紙を書かせるという離れ業をやってのけた。再び最初の秘書のところに戻ってくると、「どこまで書いたっけ？」と聞くまでもなく、中断した箇所を正確に覚えていて、その続きをまた口頭で伝えたそうである。

彼は、自分が教えていることを自ら実践している人であった。彼は毎日、運動のために自宅からサニタリアムまで自転車で通っていた。通勤中も、彼は一時の時間も無駄にしなかった。毎日自転車で通勤しているときに、秘書をつけて、その秘書は走りながら彼についていった。そして秘書にその日一日の予定を口頭で伝える。秘書は、走りながら彼の言ったことを書き留めねばならなかった。本当に、一時も無駄にしない人であった。

毎日夕方の時間に、彼はサニタリアムで講義をした。サニタリアム利用者たちの間で、もっとも人気のある時間だった。講義を終えると、決まって質疑応答の時間を設けた。これだけの人であるから、敵もいる。彼の働きをつぶそうと企んでいる連中がサニタリアムに忍び込んできていて、利用者に交じって質問の時間に彼が答えられないような難しい質問をぶつけたことがあった。しかしどんな難しい科学的な質問でも、専門的な医学的な質問でも、ケロッグ医師が答えられない質問はなかったというのである。

さらに彼は国のあちらこちらに電車で出かけて行った。汽車に乗っている間は、執筆活動に没頭するのだが、今まで自分が学んだ医学書とか科学書の内容を全部覚えていて、それらの文献を参照しなくても、一度吸収した情報を正確に書き記すことが出来たそうである。驚くべき才能にあふれた人物であった。

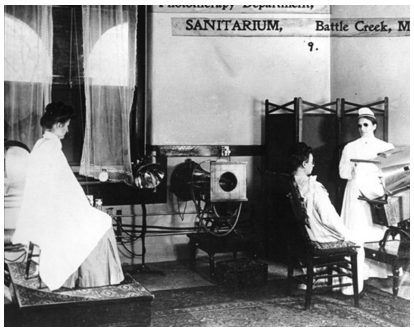
彼はまた好奇心が人一倍強く、いろんなものを発明した。もっとも有名なものがコーンフレークである。彼は医学生のころから、あまり時間をかけないで簡単に栄養を補給できる食品を作れないだろうかと考えていた。彼のサニタリアムではそういった実験を行う厨房もあって、彼は弟と一緒に様々な食品を作るための実験を行っていた。グラノーラ、コーンフレーク、ピーナッツバターなどの食品が発明された。

彼は太っ腹な人物で、コーンフレークなどを発明しても、特許を取ろうとしなかった。弟の方が「特許取らないとほかの人が作って売り出してしまうよ」と兄に訴えた。言われた兄は「それはいいことじゃないか！いいものがひろがるわけだから」と答えるのだった。そのサニタリアム利用者の一人に、C．W．ポストという人がいて、そこで彼はシリアルの作り方を学び、今日でも有名なシリアル会社を設立した。弟のウィリアムも自分でコーンフレークの会社を設立し、今日よく知られている。

ケロッグ博士には実子がいなかった。しかし彼は非常に大きな家に住んでいて、たくさ

んの子供を養子にして育てたそうである。

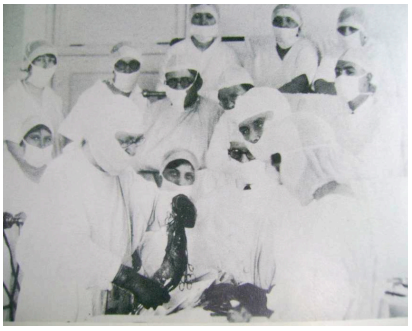
ある時、光線治療に興味を持った彼は、それをサニタリアムで取り入れた。ミシガン州は北国なので、冬場の日光が不足しがちであった。証の書を読んで、日光が健康にどれほど重要であるかを知り、この足りない日光の栄養を補うためにさまざまな実験を行い、どの光が一番日光の代わりになるだろうかと試行錯誤した。当時の医学界において、彼の医療は世のそれと比べてはるかに先を行っていた。初期のころ、彼はそういった業績のすべての栄光を神に帰した。彼は別の医者との会話の中で、「どうして今アメリカにおいてこのバトルクリーク・サニタリアムが一般の施設よりも5年以上も先に進んでいると評されている理由を知っているか?」と尋ねた。「それはなぜかというと、いろんなアイデアが浮かんで新しい方法が見出される度に、私はすぐに聖書と証の書に戻って、それが御言葉にかなったものかどうか確かめるんだよ。そしてもし聖書と証の書の原則に矛盾しないものであれば、さらに研究を進め、問題がなければすぐに自分の治療に取り入れるんだ。そして御言葉の原則にそぐわないものを見つけたら、たといそれが些細なものであっても、私はすぐにそれを排除するんだ」と言った。他の医者たちがどうしたらいいか、これはいいものだろうか、そうでないかと考えている間に、彼はすぐに御言葉に尋ねて、どんどん前に進んでいくことが出来たわけである。



タイタニック号という有名な船があったが、これはその船に設けられていた運動室の写真である。ここに見られる運動器具の多くが、ケロッグによって発明されたものだった。

音楽を使って運動する、たとえば日本ではラジオ体操が有名だが、音楽を使って体操するのを始めたのもケロッグだった。

彼は、非常に優秀な外科医でもあった。ちょっと見にくいかもしれないが、彼が75歳の誕生日に行った手術の様子である。彼が卓越した技術をもっていたということは、広く知れ渡っていた。そのことについてホワイト夫人が述べている個所がある。「神が天使をあなたのそばに送って、やるべきことを指導してくれています。天使の手があなたの手に置かれています。そしてあなたではなくイエスがあなたの道具をどのように動かすべきかを教えてくださっています」と。別の個所でホワイト夫人は次のように言っている。「重大な手術を行っているとき、あなたが神に助けを求めたときに、天使があなたのそばに立ち、彼の手が手術を執刀しているあなたの手の上に置かれているのが見えました。そしてこの手術を見ていた人たちは、あまりにも正確に手が動いて執刀しているのに驚いた。」



メイヨー・クリニックというアメリカで有名な施設があるが、メイヨーという二人の兄弟によって設立されたクリニックであった。彼らは当時、世界的に有名な人たちだった。ある日、この二人のうちの一人のもとに患者がやって来て、メイヨー医師がいろんな診察をした。その患者のおなかの方に手術の跡

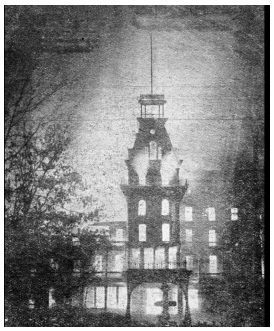
がみられた。「あぁ、これはケロッグ先生が執刀された手術でしょう」と言った。患者は非常に驚いた。その手術についてはまだ何も話していなかったからだ。「どうしてそれがわかったのですか？」「手術の跡が非常に細かく、正確になされているというのが手術の跡をみたらわかる。あたかもケロッグ先生が自分のサインを書いたかのようにみえますよ」と答えた。ジョン・ホプキンス病院というのもまた有名で、この病院の有名なお医者さんがある日、バトルクリーク・サニタリアムをおとずれた。そのときに、ケロッグ医師がいくつかの手術を同時に行っているのを見た。大体6時間くらいでいくつかの手術を終えたそうだが、それを見た後で、ホプキンズ病院の医者が「生まれてこのかた、こんなに驚くべきことは見たことがない」と言った。神の祝福を受けたこのバトルクリーク・サニタリアムの華々しい繁栄を見たのである。

証の書に対する疑い

しかし、すべてがうまくいったわけではなかった。1800年代の終わり頃、そして1900年代初期頃に、ジョン・ハービー・ケロッグと教会の関係がおかしくなっていった。そしてその頃、ケロッグ医師は証の書の信憑性について疑問を抱くようになっていった。当時世界総会の総理であったG.I.バトラーという人が、興味深いことを述べている。「ほとんどすべての人は証の書が彼らの考えに沿っているときには、証の書に好意的になり、強く支持する。ところが証の書に自分たちの行為、生活をけん責するような言葉があると、多くの人たちは証の書に対して疑問を抱くようになる。」これは大事な点である。もちろん証の書に書かれていることに同意できる人は、証の書を信じることが出来る。しかし自分自身の生活の欠点とかを示されたり、けん責されたりしたら、多くの人が「ホワイト夫人は本当に預言者だったのだろうか」と疑問を持つようになるというのだ。そういった疑いに至るように、私たちも誘惑されることがあるのではないだろうか。

後にケロッグ医師は次のような証をしている。ホワイト夫人の息子であるW.C.ホワイトに向かって次のようなことを言った。「あなたの母上の教えに対する私の信仰は、何に基づいているかというと、彼女が基礎的な原則において正しいことを教えているからであって、それは彼女が超自然的な性質で光を与えているからではない。」私が彼女を受け入れていたのは、神が不思議な超自然的な方法で、彼女に幻や夢を与えたからではなく、彼女が正しいことを教えていたからなのだ、と。彼がそういう立場をとっているということが、どんどん明らかとなっていった。

何年も後にホワイト夫人は、「バトルクリーク・サニタリアムは、大きくなりすぎました」と訴えた。ホワイト夫人は「多くの都市において、小さなサニタリアム、診療所をつくりなさい」と勧告していた。さらに、このようなことも語っていた。「一人の人物が、医事伝道の働き全体を牛耳ってはならない」と。そして当時、セブンスデー・アドベンチスト教会の医事伝道事業全体を牛耳ろうとケロッグは望んでいた。その結果、ケロッグ医師と教会、ケロッグ医師とホワイト夫人の間で様々な問題が起こっていった。



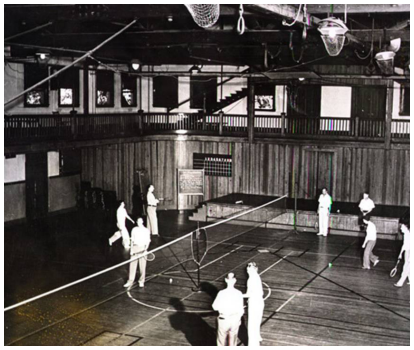
そしてついに、1902年の2月18日にバトルクリーク・サニタリアムは火事で焼け落ちた。幸いなことに、その火事による死傷者は出なかった。医師や看護士たちが建物の中にいた患者全員を外に連れ出した。ところが、医師と看護士が協力してすべての患者を建物から外に連れだしたのだが、患者の中に、いつも自分のカバンの中に財産を入れて持ち歩く人がいた。全員が救出されて、建物の外に出された後、彼はこっそり建物の中に入って行った。おそらく自分の財産を取りに戻ったのであろう。彼だけがこの火事で帰らぬ人となった。

ケロッグ医師は、アメリカの西海岸の方から汽車でバトルクリークに戻っていく途中で、この火事についての知らせを聞いた。彼はすぐに紙とペンを用意させ、テーブルの上で新しいサニタリアムの図面を描き始めた。ホワイト夫人も当時の世界総会も、新しいサニタリアムを小さいものにするようにと訴えた。ケロッグは「あぁ、わかってます、かわってます」と答えたものの、新しいサニタリアムの青写真は彼自身が持っていて、他の誰にも見せていなかった。そしてサニタリアムが焼け落ちてか

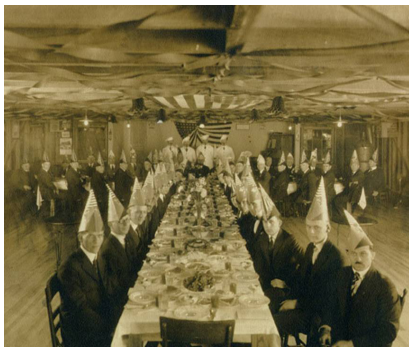
ら、三か月後の5月に、新しいサニタリアムの起工式が行われた。

新しいサニタリアム

この式典に参列した世界総会の代表者は、そこで焼け落ちたサニタリアムよりもさらに大きなサニタリアムが建設されようとしているということを知り、愕然とした。当然、この新しいサニタリアムに費やされる費用は多額なものであった。6000坪ぐらいの広さの大理石が敷かれた。建築の監督は特別にイタリアから招かれた。そしてニューヨークの有名なデザイナーによってサニタリアムで使われる家具や調度品がつくられた。出来上がった時に、ミシガン州で最も美しい建物だと評されたほどだった。1929年にそのサニタリアムが増築された。大きな塔が新たにつくられた。そしてまたもイタリアから大きな大理石が輸入された。ヨーロッパから水晶のシャンデリアが輸入された。これが新しいサニタリアムの食堂風景であるが、この食堂の中に大理石の噴水があったそうである。この噴水も、ヨーロッパから輸入されたものであった。この新しいサニタリアムは、以前とは全く違ったものであったが。健康の原則を確かにいくつか実践していたが、屋外で運動するという健康の法則にかなった方法が、別の方法に変えられた。運動の時間がダンスパーティーのような風景に変わっていった。ホワイト夫人によると、「病気の患者さんを外に連れて行って、新鮮な空気にさらしなさい。それ自体が効果があるのである」と語っていた。その教えを曲解して、ヨーロッパのリゾート施設のようなものを作った。さらに裕福な人が利用者として入ってきた。「屋外で運動するように、そして実用的な仕事に携わり、そういった方法で運動するように」とホワイト夫人は勧めた。しかしそれよりも多くのスポーツがここで行われるようになった。ある患者にビリヤード室も作ってくれませんかと頼まれると、その要求にもこたえ、ありとあらゆる妥協に妥協を重ねた。



バトルクリーク・サニタリアムの「メンズクラブ」なるものが結成された。これはバトルクリーク・サニタリアムの働き人たちで組織されたクラブだったそうだが、最初この写真を見たとき、フリーメイソンか KKK の集まりかと思ったほどである。このサニタリアムの中で、1900年代になってから、いろんな奇妙なことが行われるようになっていった。ホワイト夫人はこの頃ずっとケロッグ医師に働きかけ訴え続けた。息子のように思っていたので、彼にたくさんの手紙を書いた。「あなたのことで私は心を悩ましています。あなたは自分の奇妙な道を自分でつくって行って、正しい道から他の人をもそらせてしまっています」と言った。



ケロッグ医師とホワイト夫人

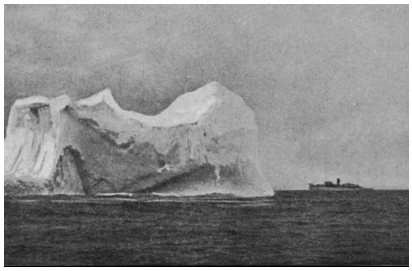
新しいサニタリアムは多額の資金を使って建てたので、その結果借金に陥った。ケロッグ医師は多くの本も執筆していて、有名になって行ったのであるが、この借金を抱えたときに本を書いてそれを売って、儲けたお金をすべてそのサニタリアムの

借金に埋めます、と言った。そして世界総会はそれを喜んだのであるが、ところがその結果、彼は「生ける宮」という本を執筆した。執筆後、下刷りが回ってきて、世界総会のスタッフが回し読みをした。ほとんどの人が「いい本ですね」と言った。ところがインドから戻ってきたばかりの一人の牧師が、その本を読んで、「この本の中には危険がありますよ」と警告した。「ケロッグ医師はこの本で汎神論を説いています。」教会でこのことをめぐって大議論が交わされた。しかしその議論が行われていた間、しばらくの間ホワイト夫人は口を閉ざしていた。この辺りの歴史は非常に複雑であるが、ここで私たちが学ぶべき重要な教訓がある。神はとても忍耐強くケロッグ医師に働きかけられた。ホワイト夫人は幻を通して、ケロッグ医師が危険な道に入って行っていると何度も何度も見せられた。世界総会のある人たちは、ケロッグ医師に関して、大きな懸念を覚えていた。ホワイト夫人が彼のやっていることは危険だと言っているのだから、教会の人たちにも警告すべきだという人がいた。しかし、当時ホワイト夫人はカリフォルニアにいたが、世界総会に宛てて手紙を書いて、今はその時ではないと言った。今は沈黙していなさいというわけである。そしてその当時経験したことを記録した世界総会の人がいて、この歴史の中で危険なこの時期に沈黙を保たなければならないのかと、世界総会の人たちは感じたそうである。そして彼らの心の内を読んでいるかのごとく、ホワイト夫人は更なる手紙を世界総会の人たちに送ってきた。その手紙の中で、ホワイト夫人はルシファーが天で罪を犯して反逆に至った時に、彼は罪を犯した時すぐに天から追放されなかった点に言及した。ルシファーの思想が発展していってそれが明るみに出るまで神は時間をおかれ、ルシファーに対して長く忍耐されたと書かれていた。世界総会の責任者たちは、ホワイト夫人の二番目の手紙を見て納得した。しかし著名な牧師たち、伝道者たちが当時ケロッグ医師と喜んで一緒に働いていたので、多くの人たちは懸念し心を痛めていた。ジョーンズとワゴナーの二人も、当時ケロッグ医師と共に働いていた。

「その氷山に体当たりしなさい」

当時、事態を静観しているのは、世界総会の人たちにとってある意味で辛いことであった。それから間もなく、1904年にあることが起こった。

世界総会によって秋の定例総会が開かれ、事業に携わる人たち（代議員）が集まってきていた。バトルクリーク・サニタリアムについての議論が膨れ上がってしまっており、次にどのような手段を講じるべきかということが決められずにいた。ホワイト夫人は沈黙しなさいと言ったけれども、それ以外にどうしたらいいのか彼らは分からずにいた。すると、会議の最中にホワイト夫人からある小包が届いた。その中に、証の本がはいっており、そこに書かれていた言葉は、「今こそ私たちはこの危険に直面するときが来た」というものであった。カリフォルニア州でどういうことがあったかと言うと、ホワイト夫人はある幻を見せられて、彼女はこの幻の中で船に乗っていた。船に乗っていたら、その船の船員が「前方に氷山が見えます」と大きな声で叫んだのだった。すると、別の声が響き渡った。「その氷山に体当たりしなさい」と。



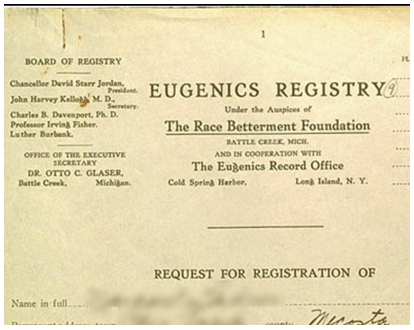
一時の躊躇も許されない、とっさの行動が求められる時だった。そして機関士は船を全速前進させて、舵を取る人もまっすぐに氷山に向かわせた。氷山に真っ向からぶつかったら、その氷山が粉々に砕けた。雷のような音をたてて、大小の氷の固まりが甲板に落ちてきた。船の客は、その衝突によって大きく激しく揺さぶられた。しかし誰も犠牲にはならなかった。船は傷ついたけれども、修復不能なほどではなかった。この衝撃によって船は大きくはねて生き物のように揺れた。しかしその後、船は前進し続けた。

この幻の意味をホワイト夫人は良く理解した。命令が下ったということだった。船の船長からの声のようにみ声を聞いた。「体当たりしなさい」という声であった。彼女は自分の義務をよくわきまえていたので、一時も無駄にしてはならないと認識していた。決定的な行動をとるべきときがやってきた。一時の遅れもなくこの命令に従わなければならない。その晩夜中の一時に目を覚まして、できるだけ早くペンを走らせて、そして次の日の

朝も早くから起きて遅くまで執筆をつづけた。教会に入ってきていた誤謬についての指示を人々に与えるためにこの証を書いた。これらの指示を書き終えたときに、特別に人を雇って特別便を送らせた。そしてその世界総会のその時に、本当に必要な時にその小包が届いたのだった。この時の経験を記録している世界総会のある人が、5000キロも離れたカリフォルニアにいるあの小柄な女性がどうやって知ったのだろう。ここ世界総会でなされていることを彼女がどうしてわかったのだろう。そしてその時に私たちが必要としているその言葉を、彼女はどうやって書くことが出来たのだろう。これは聖霊のわざ以外の何物でもないと彼は理解した。その時の出来事のゆえに、大きな危機的状況を避けることが出来たのだった。

ケロッグ医師の脱落

世界総会の働き人たちは、ホワイト夫人と協力してケロッグと彼の教え、その働きの危険にひるむことなく直面し、人々に危険を知らせたのだった。残念ながら、ケロッグという人物は教会の働きから脱落してしまった。彼の影響を通して、多くの大事な働き人たちも脱落してしまった。その後彼は、人種をさらに良くする何らかの協会を設立した。右の写真は1915年にパナマで開かれた万国博覧会おいて設けられたケロッグ医師の協会のブースである。ここに「無宗教の命を救う知識」に関する運動と書いてある。この協会が推奨した思想が、優生学（優秀な人の種だけを残そうという人類改造学）という哲学であった。この協会の秘書として、ジョン・ハービー・ケロッグの名前が出ている。この協会に入会した人は皿、自分自身のプロフィール、経歴、家族背景、病歴などを書くことが義務づけられた。その結果、膨大な個人情報をもとに、病気が遺伝しないような人と結婚するようにという教えが説かれた。これは、いいことのように聞こえるが、人間の真価を助ける自己指南のような、そういう教えであった。これに参加した著名人の中には、ルーズベルトやウッドロー・ウィルソンといった歴代大統領が名を連ねていた。有名な科学者たちも参加した。この優生学という教え（哲学）を熱心に実践しようとした一番の著名人は、アドルフ・ヒットラーである。彼は特殊な人種を作りだそうと考えていた。その思想が彼をして、ナチス・ドイツを作り出すという行動にまでかり立てた。医学界を先導するほどの優れた医師がどうしてこの恐ろしい運動に加わるに至ったのだろうか。マタイ6章23節にこう書かれている。「もしあなたのうちなる光が暗ければ、その暗さはどんなであろう」。


BOARD OF REGISTRY

Chancellor David Starr Jordan, President.
John Harvey Kellogg, M. D., Secretary.
Charles B. Davenport, Ph. D.
Professor Irving Fisher.
Luther Burbank.

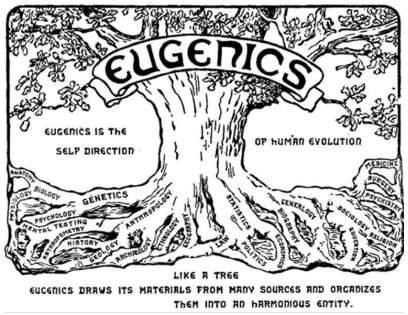
OFFICE OF THE EXECUTIVE SECRETARY
DR. OTTO C. GLASER,
Battle Creek, Michigan.

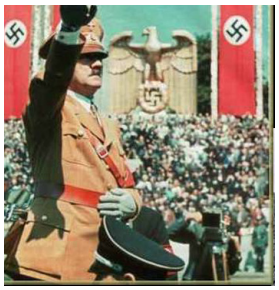
EUGENICS REGISTRY

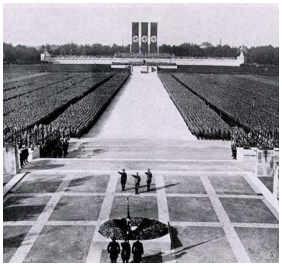
Under the Auspices of
The Race Betterment Foundation
BATTLE CREEK, MICH.
AND IN COOPERATION WITH
The Eugenics Record Office
Cold Spring Harbor, Long Island, N. Y.

REQUEST FOR REGISTRATION OF

Name in full







背教のアルファ

神がケロッグ医師に与えられた光は、実に大きなものだった。神は彼を祝福して、セブンスデー・アドベンチスト教会の医事伝道の働きを率先して牽引する人物として選ばれた。しかし彼がその光に背いた時に、大いなる闇へと落ちてしまったのであった。コリント人への第二の手紙11章の14節に、サタンも光の天使に偽装するのだから驚いてはならないという言葉がある。サタンを光の天使と思ってしまったケロッグは、サタンの欺瞞に陥ってしまった。光の天使のように美しい衣をまとった天使がケロッグ医師を伴って場所から場所へと連れて行き、神にとって不快となる傲慢な言葉を語らせた、とホワイト夫人は言った。サタンがケロッグ医師にその霊を吹き込むほどになっていた。ネブカデネザルは、「この偉大なるバビロンは、私が建てた物ではないか」と言った。ケロッグも、「この偉大なバトルクリーク・サニタリアムは、私が建てた物ではないか」と言ったのではないだろうか。

神が与えた光に基づいてこのような偉業を成し遂げたということを彼は忘れてしまったのであった。後に彼は、フロリダ州のマイアミというところへ行き、フロリダのバトルクリーク・サニタリアムというものを建てた。数年しか存続せず、大失敗であった。自分には力があると信じていたので、どこに行っても同じやり方をすれば通用すると思っていたのだった。しかしそれは間違いだった。

ここで申し上げたことが、背教のアルファの一部である。しかしホワイト夫人によると、背教のオメガは驚くべき性質を帯びてやってくるはずである。サタンの最後の欺瞞は、神の御霊の証を無効にすることであるとホワイト夫人は言った。証の書を通して、神の与えられた勧告に信頼して従っている限り、彼は安全だった。ところが証の書を疑い、かれは一歩一歩坂道を下るようにして、闇へ落ちて行った。ホワイト夫人によると、サタンの旗の下で自分たちの立場をとる者は、初めに神の御霊の証に含まれている警告やけん責に対する信仰を捨ててしまうであろう。どういうことかと言うと、終わりの時代に、セブンスデー・アドベンチストでありながら、サタンの旗の下で自分たちの立場をかかげる人達がいると言っているわけである。ホワイト夫人は、これは確かに起こると言った。そして彼らの最初の誤りは、神の御霊の証を疑うということだった。そして証の書を疑うと聖書を疑うようになり、神の存在そのものを疑うようになる。そういった形で坂道を転げ落ちるようにして闇へ落ちてしまうのである。最初に紹介した聖句だが、歴代志下の 20 章 20 節。「あなたがたの神主を信じなさい。そうすればあなたがたはかたく立つことが出来る。主の預言者を信じなさい。そうすれば、あなたがたは成功するでしょう。」

背教のオメガ

前半で背教のアルファについて話したが、背教のオメガについて証の書を見ると、三か所しか書かれていない。まず覚えておきたいのは、オメガが将来やってくるということ。ただしそれがなんであるか、ホワイト夫人は明言はしていない。ただし、背教のアルファについては、多くの情報を残した。だから私たちは、アルファをしっかり研究して、その時そこで何が起こったのか、どのようにしてその問題を乗り越えていったのかということを学ぶ必要があると思う。そうすることによって、私たちはオメガを識別することができるようになるわけである。その背教のオメガについてホワイト夫人が述べている三か所を見ていきたい。オメガは驚くべき性質を帯びているであろうとホワイト夫人は述べた。驚くべきというのは、人を驚かすわけだから、予想外のことだということが分かる。だから覚えていたいのは、どれほどオメガについて研究している人でも、実際にそれがやってきた時に、「ああ、びっくりしたなぁ、こんなことになるとは。このことにつては考えもしなかったなぁ」と言うようなことになるということである。次の箇所だが、証の書の言葉。「オメガが続いてやってくる、そしてそれを受け入れる人たちは、神がお与えになった警告に耳を傾けない、また傾けようとしない人達である」と言われている。神からの警告を受け入れようとしない人たちがオメガを歓迎すると言っている。神からの警告を受け入れたがらない人たち、受け入れないと決める人達が、オメガを受け入れるというのだ。神から警告を与えられ、そしてその背教に対して備えるように機会が与えられたにもかかわらず、その警告を退ける人達である。証の書を通して、警告はすでに私たちに与えられているのだ。この警告に耳を傾ける意思があるか否かなのである。ホワイト夫人がオメガについて述べたもう一カ所では、「しばらくしてオメガが続いてやってくるであろう。そして私はわが民のために震えた」と言われている。アルファの後にしばらくしてから、短期間の後にオメガがやってくると言っている。であるから、神の御霊の証によると、これが何十年、何百年も後の事ではないということである。そしてそのオメガがやってくることを見たときに、ホワイト夫人は民のために震えたと言ったわけである。終末の神の民にオメガの到来を幻で見せられたホワイト夫人は、どういうことになっていくかということを思った時に、本当に大変な時代がやってくると彼女は震えたわけである。背教のオメガについて彼女が述べた箇所は以上これらの 3 か所だけなのだけれども、アドベンチスト教会の中では、この背教のオメガがどういう形でやってくるのか、どういったものであるかということに様々な説がある。確かにこれについて研究し、オメガがどういうものであるかということを良く良く考

えてみるということはいいことだと思う。ただし、このオメガがどのようなものであるかということを前もって明確に知ること、また断言することはできないのである。ルイス・ウォルトンという人がオメガという本を書き、有名になった。彼の考察をいくつか見ていきたいのだが、ウォルトン氏によると、「アルファ、オメガ」と言うときに、ギリシャ語のアルファベットの最初と最後の文字を使っているわけだから、アルファもオメガも似通った出来事について示したものではないかとウォルトン氏は述べている。背教のアルファにおいて、ケロッグ医師が汎神論の背教に入って行った。その汎神論という教えは神がどこにでもいる、存在する。私のうちにも、木など、自然界のどこにでもいるという考えであるから、それと正反対の性質のものではないかとウォルトン氏は考えているのである。神学的に言えば、たとえば、デズモンド・フォードが提唱した神の御霊を全く無効にするような教え、特にキリストの至聖所での贖いが十字架で終わったと説き、1844年に始まることを否定するような教えではないかと考えている。ケロッグ医師は神が自分のうちにもいると考えた。デズモンド・フォードはもう神が2千年前に私の贖いの業を完成させて下さった、それだけが私に必要なものだと言った。私の内側で何が起ころうとも、神は私のためにもうすべてをして下さったというのがフォードの教えである。アルファとオメガ、こういった形で正反対の形で来るのではないかとウォルトン氏は考えているわけである。そうかも知れないが、断定することはできない。

また別の人によると、この背教のオメガは、神は決して殺すことをなさらないという教えだという。ケロッグ医師はこの汎神論の教えによって、神は私の内にいて、私にごく近い存在となっておられるという教えを説いていた。そして一方では、オメガはこういったものではないかと考える人は、私たちが死ぬときに、神は私たちのそういった死とは何のかかわりも持っておられないという考えなのである。神はいかなる理由をもってしても、人を殺すことはないという考えに基づいている。このような思想が、セブンスデー・アドベンチスト教会に入ってからもう何年も経っているが、たとえば、子供用の本を書いた著者で有名な、アーサー・マックスウェルという人がいるのだが、そのマックスウェル氏もこのような思想に陥っていたと言っている人がいる。いずれにしても、アルファは一方の極端であり、オメガはもう一方の極端な教えではないかと考える人達がいる。聖書はアルファとオメガについて何と言っているだろうか。アルファとオメガという言葉づかいは聖書に4回出てくる。すべて黙示録に出てくる。その二か所が黙示録1章に書かれている。黙示録の1章の8節と11節である。そして興味深いことに、あとの2か所は黙示録の最後の2章に記されている。21章の6節、それから22章の13節。であるから聖書の最後のところで、この黙示録の最初の方でアルファとオメガについて神は述べられ、そして黙示録の一番最後のところでキリストが、私はアルファでありオメガであると言っておられるのである。イエスさまがご自分について私はアルファであり、オメガであると述べられる時に、何か両極端の要素について述べておられるのだろうか。そうではなくて、かえって同様のものが何らかの成熟する過程を経ているということなのだ。ヘブル人への手紙12章の2節にこのようなことが述べられている。「信仰の導き手であり、またその完成者であるイエスを仰ぎつつ」とあるが、この導き手というところは創始者とも訳される。だからこの聖句はアルファとオメガの聖句と非常に似ているのではないだろうか。このような聖句もある。「私たちのうちに良き業を始められた方が、それを完成して下さる」。アルファで始まってオメガで完成するという過程について、聖書は述べているのではないだろうか。だから、このアルファとオメガが正反対の性質の背教ではなくて、ケロッグ医師によって始められたものが成長して成熟した過程を表現しているものであるとしたらどうだろうか。現在オメガが、どのようなものであるかというちゃんとした理論を持っているわけではない。ただ現在私は、このオメガがアルファと全く正反対のものではないのではないかと考えている。このアルファについて考えるときに、アルファはただ単に、神学的なものではなかったのだ。確かに神学的に見るならば、ケロッグ医師が汎神論を説いていたと言う見方が出来るのだけれども、ケロッグが行っていたことに伴って、他のさまざまなものが出てきた。たとえば教会の運営の問題、いわゆる当時、教会において、大きな権力闘争みたいなものがあった。ケロッグ医師は、王様のような権力を教会で保とうと努めていた。バトルクリークという町だけで、牧師とか他のさまざまな教会の働き人よりも、医療事業に関係している働き人の方が2倍も多かった。当時そういった中で、大きな権力闘争があった。もちろん、ケロッグ医師がもたらした背教の一つに、神の与えて下さった青写真から離れて医

事伝道を行ったというものがあった。このオメガを見定めるにあたって、これら3つの要素が関わってくるのではないかということが考えられるのだ。いずれにしても、この誤りの根底にあるものが神の代わりに自己を据えるということ、自分自身を神の地位に据えるということが問題なのだ。

ホワイト夫人は、サタンの最後の欺瞞は神の御霊の証を無効にすることと述べている。預言によると、この世界に起こる最後の最大の欺瞞はサタンが光の天使を装ってこの地上に現れるということである。ホワイト夫人はこのような興味深いことも言っておられる。サタンが光の天使を装って現れる時、彼はキリストだと自称し、偉大な医事伝道者を装うと。私はこれこそが、究極の背教のオメガであると考えている。サタン自身が偉大な医事伝道者であると自称するのである。医事伝道事業に関わらず、アドベンチスト教会には様々な背教が起こった。ケロッグ医師は彼の時代の医事伝道事業の中心的人物だったと言えるのだが、再び医療事業の何らかの著名な人、実力者、指導的立場にある人が、この教会の背教を牽引していくことになるのではないかとも考えられるわけである。そして医事伝道事業そのものが、背教へと向かってしまうことがあるのではないかと考えられるのである。なぜなら、神がホワイト夫人を通して与えられた青写真と現在教会でなされている医療事業が、かけ離れたものになってしまっているからである。何度も言うように、背教のオメガはこう言ったものであると断定することはできないのであるが、そのことについて研究を続け、そして眼を開き、様々なヒントを基に、それがやって来た時に、神がこれこそが背教のオメガであると私たちが見定める知恵を与えて下さると思うのである。教育の文に、「若者たちを、ただ単に人の意見を反映するのではなく、自ら考える者に訓練することこそ、真の教育である」とある。だから、他の人達が述べていることに従うことだけで満足してはいけないのである。神から助けを頂いて、自分自身で考えて行動していく者とならなければならない。

最後に、この闘いは私たちだけのものだけではなく、神のものであるということである。「静まって神の救いを見なさい」というみ言葉がある。

背教のオメガは、最後のキリストの贖いを無効にすることだと私は考えている。そして証の書を無効にすること。特にこの二点だと思う。

サンライズ・ミニストリー
スタッフからの挨拶

主にあって新年のご挨拶を申し上げます。

世界も、教会も容赦なく吹きまくる嵐に直面しようとしています。

「新しき地に踏みいだす…」という讃美歌がありますが、我々の前に横たわるのはあまりにも大きな領域です。清められたみ民イスラエルの栄光が全地を照らす日も非常に近づいていると思います。大きな働きの前に、小さな光を掲げて今年も励みたいと決心しております。

皆様の祈りとご支援をお願いします。

「今日まで守られ来たりし我が身、つゆだに憂えじ行く末などは
いかなるときにも愛なる神は、すべてのことをば良きにしたまわん」。

書籍案内

サタンのわな

サタンは特別会議を召集した。最後の選民を滅ぼすためにどのような戦略をその部下たちに命じたのだろうか？預言者に見せられたことが、どのようにわが教会に成就しつつあるだろうか？

価格：100円

セブンスデー・アドベンチストの教え 検証

セブンスデー・アドベンチストの教会で混乱させる教理の風が吹いている。どうしたら真偽を識別できるか。ただ、聖書と証の書ー霊感の書による以外はない。特に主に会う準備をさせる重要真理、現代の真理を明確に理解する必要がある。必ずしも、教会の公式の聖書理解ではなくても、一般にわが教会でよく聞かれる教えを検証してみた。

A4判84頁　価格：500円

再臨運動に対する神の目的

何百というキリスト教諸教派から、神は、なぜあえてセブンスデー・アドベンチストという教会を興されたのであろうか？人間を創造された目的とSDA教会に対する神の目的とが重なって見える。

価格：100円

讃美歌集ー田のしらさぎ

価格：500円

曲目：

1.天に宝
2.くだきたまえ
3. ゆるすためです
4.赤いかわら
5.主は私をうしろで助け
6.主のめぐみ語るはたのし
7.田のしらさぎ
8.いつくしみふかき

2010年秋のセミナー収録集

“聞け！終末のメッセージ” 金城マークN. D.

●CD 【19枚】価格：3,800円（音声）
●DVD 【17枚】価格：6,800円（動画）
●MP3 【DVD-DATA1枚】価格：1,520円（音声）
●カセットテープ 【19本】価格：5,700円（音声）

橋川真理さんのメッセージ（日本語） CD

◆ダニエル11章40～45節の研究 【2枚組】価格：400円
◆黙示録17章の研究 【2枚組】価格：400円
◆よみがえる記憶～マグダラのマリアの経験～ 価格：200円

日本人による日本人のための

やさしい基本教理の解説　上巻

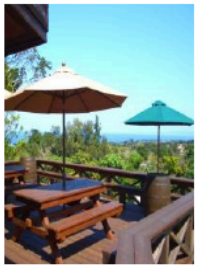
及川 吉四郎　著

キリスト教とセブンスデー・アドベンチストの教理を日本人に、初歩から理解できるように提示している。

B6判430頁
価格：1,200円

Vegetarian Restaurant HERB
菜食レストラン ハーブ

みなさまのお越しを
心よりお待ちしております。



OPEN AM11:00～PM 6:00
CLOSE 金・土
※春、秋に一週間ほどの臨時休業がございます。

http://herb.srministry.com/
沖縄県国頭郡今帰仁村今泊1471
TEL＆FAX 0980-56-5681

Anchor
www.srministry.com

サンライズ ミニストリー
〒905-0428 沖縄県国頭郡今帰仁村今泊1471
TEL 0980-56-2783　FAX 0980-56-2881
Email: contact@srministry.com
郵便振込番号：02080-0-12121 サンライズミニストリー

サンライズ・ミニストリー刊行誌　「アンカー」の目的と編集指針　*Published By Sunrise Ministry Okinawa JAPAN*

我々は次のことを信じてアンカーを出版している。

1. 我々SDAの働きと使命は三天使の使命である。(6T 384, 2SM 142)
2. 第三天使の使命は人々をキリスト再臨の栄光の前に立ち得る特別な備えをさせるものである。（9T 98, 大争闘下 140)
3. 第三天使の使命は人々の心を至聖所に向ける。そこにおいて信者は最後の、特別な贖いを受ける。（初代文集 414, 5,7)
4. 我々は神のご計画されたこの特別な祝福、特別な経験を拒み続けてきた。特に1888年以来(RH26,1890年)
5. ダニエル書8：14の聖句は再臨信仰の土台であり、み業の完成はこの聖句の正しい理解にかかっている。（生き残る人々 422, EV 221, 5T 575)
6. エレン・G・ホワイトは聖書の預言者と同様の霊感が与えられた預言者である。（1SM 36)
7. 最後の時代の嵐に押し流されないようにさせるアンカー（錨）は、三重の使命、聖所、安息日、人の性質、イエスの証（預言の霊）等である。（初代文集 417, 1T 300)
8. アンカーはリレーの最終走者の意味もある。この世代は福音の働きが信者の中に、外の世界に完成する最後の時代である。不信仰によって、150年も時が延ばされ、イエスの十字架の苦しみを増している。（大争闘下 182, 教育 328）　信仰による義認の体験によって、再臨を早めることをキリストは待っておられる。再臨とみ業完成をこれほど遅らせているのが我々神の民であるとするならば、我々の今日の、義務は何か、約束のものを受ける条件は何なのかを研究し、共に備えたいと思う。
9. セブンスデー・アドベンチストは最後の「残りの民」である。たとい教会がどんなに背教しようとも、激しい震いの経験をして、純潔な教会となり、永遠の神の目的がこの教会によって達成されると信じている。